

録せしめたが、同じトット工作隊の業績たる西部沿岸要塞もまた、米英軍を英本國に釘づけとし、海を越えて迫らんとする西よりの攻撃を封じて歐羅巴を泰山の安きに置き、獨逸軍をして自由に、東部戦線に活躍せしめつつある。しかし今日の歐羅巴西岸は、より一層強化されてゐる。トット工作隊の建設した要塞の上に、スペアー國務大臣の指揮する獨逸技術者の大群が、外國人労働者の支持を得て、更に強固な要塞の構築に成功したからである。

一獨逸紙の記者は『無数の要塞の長鎖』と、沿岸要塞線を形容してゐる。全大西洋岸は戦前から要塞であつた。挪威海岸には切り立てたやうな岩石が聳立し、丁、蘭、白諸國も軍港に砲壘を配してゐた。フランスに至つては數百の堡壘を連ねてゐたのである。トット工作隊は之を有機的に組合はせ、足らざるを補ひ、新式に改め、系統的、組織的に構築して、いかなる奇襲上陸作戦をも忽ち撃退し得る力をあたへた。しかし獨逸の決戦につぐ決戦は、獨逸をして東部戦線に死力を盡す決意をさせた。いかなる大軍が押し寄せても、いかなる強力な攻撃に遭ふても、西方防衛線が微動もしてはならぬ。ドイツ上陸作戦で、トット工作隊の構築した要塞に據つた防衛軍は、僅々十時間で一ヶ師團を殲滅し、艦艇十四隻を海底に葬つたが、獨逸は之をもつてなほ足れ

りせず、スペアー國務大臣をして更に根本的に補強せしめたのである。

スペアー國務相はトット工作隊員を總動員し、之に十倍する外國人労働者を使用した。即ち十人の外國人労働者は、一人の獨逸要塞構築技術者の指導を受け、完璧の長城を迅速に仕上げたのである。工事に要する數百萬立方メートルの資材製作も、その輸送も並大抵ではない、それらの一切を嚴密に組織的に、全歐羅巴の人的、物的資材を傾けて成つたのが今日の沿岸要塞線である。それは單に獨逸を守るのみでなく、新秩序建設工作の進みつつある全歐羅巴を守るにふさはしい質量を持つてゐる。

長大な沿岸要塞線には一分の隙もないと言はれてゐる。岬、島、突堤、丘陵、砂地、草原等近代築城の粹をつくし、迷彩技術の頂點を採り、三ヶ年にわたる戦闘の經驗が織り込んである。フランス沿岸の何處の地點でも良い。海岸から二キロ奥には入つて、谷や丘の起伏するあたりをみれば、大西洋防壁の絶對的安全を何人も疑はぬであらう』と、ベルリナー・ベルゼン・ツァイツング紙は報じ、第三國方面では『ところによつては百五十キロの奥地までトーチカが點綴されてゐる』とその厚味を傳へてゐる。



連なるトーチカの内部には重火器から輕機まで、あらゆる近代兵器が揃ひ、砲口は何時でも三百六十度の回轉が容易に行はれる。海上も岬も野も森も、トーチカの周圍は悉く射程内に入り、長距離砲の巨大な砲身は英國の空を狙つてゐる。巨人の指の様に大空に擴げられた長大な砲身の林からは英本土の軍事施設と、重要都市に叩き込まるべき巨弾が、物凄い勢ひで飛び出してゐるのだ。散點する飛行場はみごとな滑走路を持ち、トーチカ狀の格納庫と、巧みな迷彩を施した宿舎もある。偵察機はここから英海峽を索敵し、爆撃機は英本土諸都市の灰燼化をめざして出發してゐる。一度本土上陸を試みれば、戦闘機は群をなして弾丸の如く飛び出し、殲滅戦に参加するのである。動く重砲であり、要塞の目でもある空軍の基地は、大西洋沿岸に數へ切れない程ある。

艇々一萬キロ、歐羅巴沿岸には一分の隙もないが、大事なところもあり、英佛海峽沿岸、特に港灣や河口附近が嚴重に武装されてゐる。ドイツ上陸作戦の失敗は英國の歐羅巴侵略企圖を一應放棄せしめた、數ヶ師團を以てする奇襲の如きは、龍車に向ふ螻蛄の斧のあはれさにも及ばぬことを覺つたからである。米英が次に歐羅巴を狙ふとすれば、すくなくも數ヶ軍團を一舉に上

陸せしめねば、作戦基地の確保も困難なことを知つてゐる。大規模な上陸作戦實行には何よりも、重火器、戦車、老大な彈藥等を揚陸し得る地點を奇襲、相當長期間獲得してをらねばならぬ。戦車のない師團、重火器を持たぬ兵團は、たゞ重裝備樞軸軍に殲滅されるのみだからである。従つて米英は港灣、河口、入江を狙ふは必定であり、沿岸要塞線もまたそこに重點を置く。

危険のあるにしたがつて防備は嚴重の度を増す、大部隊を揚陸せしめ得る地點にはぎつしりトーチカが詰つてゐる。飛行場も周圍に控へ、巨砲も列を成す。敵は陸地に達する前に輸送船とともに海底に沈められ、護衛艦艇と共に爆彈の餌食となるやうにできてゐる。ドイツ上陸作戦の如き小規模のものなら、防衛軍の目を潜つて行ひ得るかも知れぬが、作戦上幾分でも意義ある戦果を獲得するため、大軍を輸送するといふやうな舉が、全然樞軸に氣づかれずして行はれる譯はないが、もし闇夜や濃霧に恵まれ、尖兵にして沿岸に辿りつくとしても、高壓電流の通ずる鐵條網と無數の地雷を埋めた死の平地が待ち構へてゐる。優秀火器は一齊に火を噴き、一兵の生還も許さぬのだ。

防衛施設に於て何人も歐羅巴西海岸の優秀さを認めぬものはない。米英がソ聯の強要をも却



け、デイエツプ奇襲以後鳴りを鎮めてゐるのもそれがためである。しかし西部沿岸要塞の意義は、防衛よりもむしろ出撃基地としての設備にありと言へやう。長距離砲は英本土を脅やかし、空軍もここから英佛海峡を越えて、輸送船の撃沈に、工場地帯の破壊につとめてゐる。そしてより注目すべきは、米英を戦慄せしめつつある潜水艦基地が、幾々一萬キロの要塞至るところに鑿めてある點にある。

一九四三年春、トット部隊によつて建設された潜水艦格納庫こそは、沿岸要塞線をして單に防衛の一線たらしめたのみならず、出撃基地としての重大な意義をあたへた。潜水艦格納庫は單なる潜水艦の格納庫ではなく、獨逸はこれを『潜水艦トーチカ』と呼んでゐる。米英輸送船團を撃滅し、數ヶ月間海上に戦ひ、一萬餘キロを航破した潜水艦と乗組員は、こゝに這入つたときはじめて完全な安息を恵まれて鋭氣を養ひ、魚雷を積み、食糧と燃料を補給して、再び通商破壊への壯途に就くのである。

潜水艦の攻撃を防ぎ切れず、月と共に撃沈量を増すに従つて、米英の焦慮も加はつて行く。護衛艦艇の増加、快速船の建設、迂回航行等凡ゆる防禦策に失敗した米英が潜水艦の産室たる造船

所と、格納庫の攻撃を開始してからでもすでに久しい。しかし前者は獨逸の完璧な防空施設と驅逐機に阻まれ、後者は潜水艦トーチカによつて目的を達してゐない。格納庫のところどころは三四寸の凹みができてゐるが、それこそ來襲の度に大半を撃ち落されつゝも、あくまで執拗に続けられてゐる英空軍の總戦果である。英空軍の投下する爆弾は、巨像に對する縫針ほどの效き目もなく、潜水艦トーチカは三四寸の凹みを残すのみで巨弾をはじき飛ばし、潜水艦や乗組員の休息をすこしも妨げない。

第一次大戦の獨逸潜水艦は獨逸本國を基地としなければならなかつた。之に備へて英國は、スカゲラツク海峡よりスカパフローにかけて七萬個の機雷を敷設し、獨逸潜水艦を北海に封じ込めうとした。勇敢にも獨逸潜水艦は、その間隙を縮めて大西洋に現はれ、よく通商破壊の實をあげた事は前大戦史の語るところであるが、同時に苦心の甚だしかつた事も推測できる。本國の基地を出發獨逸潜水艦は機雷と驅逐艦艇の關所たる米佛海峡を避けて、北方から迂回せねばならぬ。オークニー諸島の關を突破したとしても、米國よりノース海峡を経て、英西海岸諸灣に入らんとする輸送船の航路に至るまでには五百哩を走航せねばならぬ。更にビスケー灣沖に達するには、



五、六百哩を突破する必要がある。英艦船の警戒網を突破して、目的地まで一千哩を空しく走らねばならぬ乗組員の苦痛はもとより、之によつて燃料を消費し、日数を空費して戦闘力を殺ぐことも多大であつた。

今日の獨逸潜水艦は沿岸要塞線のどこからも簡単に米英の輸送路を衝くことができる。北ノルウェーの基地は米英の援ソ船通路を目と鼻の近さに控へ、ベルゲン潜水艦トーチカより米英北方通路までは二百七八十哩、佛國ブルターニュ半島の獨逸潜水艦群は、アイレの南端まで百五十哩の間に網を張れば、セントジョージ海峡に出入する輸送船團を攻撃することができる。ビスケー灣岸の沿岸要塞より出た海上の狼群は、地中海に向はんとする米國輸送船團を襲ふに、獨逸本國より出發するよりも半分の日數と半分の燃料の消費で済む。攻撃點としての沿岸要塞線の持つ意義は、潜水艦戦より觀てもいかに大きいか判明するであらう。南阿ケーブタウン沖より、印度洋にまで通商破壊の範圍を擴大しつゝある獨逸潜水艦の活躍は、勿論優秀な船體の性能にもよるものであるが、同時に安全なる休息所を南佛に持つ強味も見逃してはなるまい。

潜水艦トーチカの周邊には之を護るために、近代火器をぎつしり詰めたトーチカが並び、重要港灣と等しく、空港も配してある。そのいづれも擬裝技術の限りを盡して、敵空軍の發見を困難としてゐる。一度米英の大軍にして歐大陸侵攻の行動を起せば、潜水艦もまた艦船へ狼群の如く殺到して、新秩序建設工作進む歐大陸の防衛にあたるのだ。歐大陸西岸の防備かくの如きとすれば、地中海沿岸の要塞もまた完壁を期して建設されてゐると觀なければならぬ。トット工作隊の早業はジークフリード線建設以來磨きをかけるばかりである。

## 一、一、歐西阿に無敵獨逸空軍

東亞に無敵日本空軍あり、歐阿に無敵獨逸空軍がある。日本空軍は大東亞戰爭の發端、眞珠灣頭に米國太平洋艦隊主力を撃滅し、マレー沖海戦で英極東艦隊の主力プリンス・オブ・ウェルズを海底に葬つて、陸と海の日本に新に空の日本の一大威力あるを印象せしめたが、獨逸空軍は歐洲戰の發端でポーランド進撃立體作戰の妙をみせ、西部戦線が英佛空軍を撃碎、バルカン作戰、北阿作戰、對ソ戦で、共に壓倒的強味をみせてゐる。だが獨逸空軍が眞に米英を戰慄せしめたのは、クレータ島攻略戦に於ける殊勳であつた。



獨逸の航空機が量と質に於ては抜けた世界一である事に何人も異存はなかつたが、百七十キロの海洋を征服して英國が半ケ年間着々と防備を固めた東地中海面の三大根據地の一つ、アレキサンドリア、マルタと並稱さるべき要衝クレータを空軍のみによつて占領した事實こそ、世界の驚異であると共に、艦隊至上主義の殘燭を守る英國の戦慄であつた。海軍力なくして敵前上陸をなし得る筈は英國參謀部にはなかつたのである。しかも優勢艦隊を持つ英國は獨逸空軍に阻まれたクレータに援軍を送り得ず、逆に獨逸空軍は英艦隊を蹴散らして敵中に作戦基地を擴大してゐる。しかしクレータ島の占領は東地中海に於ける一英要衝を陥した事のみを意味しない。空軍のみによる大量部隊の敵前上陸が可能である限り、キプロス島も危ふく、シリアを通じてスエズも危険だ、英本土に至つては希臘本土よりクレータ間の約四分一の短距離に獨逸空軍基地を控へてゐる。英國朝野の驚愕は當然の話である。

クレータ敵前上陸に於て空中輸送に使用された飛行機は勿論各種のものがあつたであらうが、主役を努めたものはお馴染みのユンケル五二型である。翼の長い強力な發動機三個を備へ、旅客機らしく胴體を膨ませてゐるこの機は獨逸空軍の祖母とも稱すべき敬愛を國民から捧げられてゐる。ユンケル航空機製作所は世界で始めて全金屬旅客機を作成して有名となり、現在獨逸に於ける最大の航空機製作會社である。世界中廿二ヶ國以上の國で旅客輸送用として採用されたが、五二型はその安定性、經濟性で各國に歡迎され、旅客機の王者として性能を謳はれてゐた。部分的には設計も年毎に變更されたが完全な基本形態は依然として續き、今次戰勃發以來北歐作戰で始めて軍用として登場した。

『英米の侵略に備へて逸早く諸威を奪取せよ』と命ぜられた獨逸陸軍の尖兵は、一九四〇年春四月ユンケル五二型に搭乗祖國の基地を發つて北歐作戰の輝く第一歩を踏み出した。旅客並に郵便物ばかり積んで來た獨逸空軍の祖母はこの時始めて彈丸や、高射砲の部分品や、そしていづれも背囊と小銃に身を固めた兵士をぎつしり腹一杯詰めて新戰場への途に就いた。ユンケル五二型は旅客機として製作されてゐたもので、重量兵器の輸送等豫定して設計されてはゐなかつたし、平和時代扉が着いてゐた側面には間口の廣い戸が取付けられ、そこから機關銃がのぞいてゐるといふ格好であつたが、北歐戰中一回の事故もなく、よく祖國の危急に參じて殊勳を現はした。

世界卅數ヶ國に供給し得る生産力によつてユンケル五二型は軍用として其後續々完成して行つ



た。佛國降伏當時英本土攻略に備へて三千臺の輸送機が待機してゐると第三國方面に傳はつた程である。と同時に空軍のみの渡海作戰に備へて重量火器を分解できる様に設計すると共にユンケル五二型もまた之を輸送し得る様な特殊装置も施された。クレータ攻略戦に於ても、オートバイ、輕砲等が多數空中輸送されて、ある程度の作戰單位たる丈の裝備を送り込める事が判明した。姉妹型多用途機ユンケル三四型と共に水陸兩用機として製作され、翼長卅五米、全長廿六米五、一八四平方メートルの翼面積を持つ獨逸最大のユンケル九〇型等と共に、ロメル軍の北阿遠征に、對ソ援軍援送に、特に最近ではみごと六ヶ月間米英の大軍を支へた、チュニジア樞軸軍に對する兵站空中線の確保に、八面六臂の活躍を續けた。

ユンケル八七型とメツサーシユミットは獨逸空軍の花形である。急降下爆撃に示すユンケル八七型の威力はポーランド進撃、北歐作戰、マチノ突破等一連の陸戦に赫々たる武勳を樹てたが、ナムソス沖の英國艦隊攻撃を魁として、ダンケルク港外に於ける英佛艦船襲撃、地中海の海空戰等、敵海上部隊攻撃にも驚異の戰果を樹立した。其後地中海に於ける對英艦隊擊滅戰に現はした威力は正に英地中海勢力の戰慄であつたが、特に注目さるべきは東部戰線に於けるソ聯軍集團

と、戰車、砲群攻撃に示した威力である。

遠距離移動砲兵としての正確な爆撃は勿論獨逸の普通爆撃機にもある程度の期待は持てるが、急降下爆撃機は之まで殆んど不可能視されてゐた精密さで爆撃する所に眞骨頂を發揮する。個々の橋梁、戰車、軍艦等の破壊は寧ろ易々たるものであり、佛國降伏以後實戰の經驗によつて改善を加へて以來、長距離飛行の後にもなほよく急降下爆撃をなし得る様になつた。と共に敵地上部隊に對する攻撃力は急激に昇り、クレータ攻略戦完成の蔭には重砲の身代りとしてのユンケル八七型の功績は見逃し得ないものがある。世界一艦隊を蹴散らして敢行されたクレータ空中攻略部隊最大の悩みは重量火器の不足であつた。輕戰車や分解砲の空中輸送は既に實用の段階に達したが、獨逸空軍の充實を以てしても三噸以上の敵地輸送は今なほ困難であると觀られてゐる。占領以來半歳、クレータは英國の巨費によつて急激に武装されてゐたものであり。輕量火器のみで之に對抗する事は獨逸軍としても容易なものではない。しかしユンケル八七型は見事に敵要塞を破壊し、英軍の重量火器を沈黙せしめて陸上部隊の進撃に協力した。クレータ戦が十二日間で終了した裏面には急降下爆撃機が完全に果たした新任務の輝く戰果が潜んでゐたのだ。北阿戦は砂漠戦



である。英本土攻略戦は空中渡海部隊を尖兵とするであらう。砂漠を急進する機械化兵團と一緒に、重量火器の急速な移動は種々の困難がともなふ。英本土に空より着陸した獨逸軍もクレータ攻略戦に於けるが如く重量火器の不足を告げるは必定である。そのいづれの場合もエンケル八七型は陸上軍の重量火器として華やかな活躍の舞臺を提供される。急降下爆撃機の使命は獨逸今後の決戦に於て愈よ重大なるものありと言へやう。

エンケル八七型を攻撃の花とすればメツサシユミットは防禦の花である。數千數百の大爆撃機編隊が英哨戒艇や聽音機をめぐらす英佛海峡を飛んで英本土の中樞に猛威を發揮し得るのも護衛するメツサシユミットが信頼に値する優秀機なるがためであり、獨逸を狙ふ英爆撃機が高空より盲爆を行ふのみで低空飛行をようしないのも、メツサシユミットの快速と搭載砲の火力に對する恐怖が原因である。七五〇キロの高速度記録を作つて世界をあつと言はせた九〇型は、急速な獨逸航空機工業發達の前にはすでに語り草となつて、今や一〇九型が英米必死の努力を冷笑するが如く世界一戦闘機の勇名を馳せてゐる。最近列國の爆撃機は機關部には特殊裝備を施して機銃の數發位喰ふてもびくませず、操縦者か、機關の一、二の部分に命中さす以外墜落は困難

と言はれてゐる。メツサシユミットが持つ砲は一發必墜の威力を持つ所に大部分機關銃しか持たぬ英國戦闘機の到底及ばぬ攻撃力を有してゐる譯だ。

メツサシユミット一〇九型は驅逐機として製作され、強力な機關銃と砲を具へてゐる上に爆弾まで積む事ができる。英佛海峡を荒れ狂つた『空の饑軍』はこの型の集團で英國の恐怖の一つとなつてゐる。メツサシユミットの名聲にかくれてはゐるがハインケル戦闘機もまた獨逸空軍の一大威力だ、一九三八年の猛烈な國際速力記録獲得戦ではメツサシユミットに一步を譲つたが、同年ハインケル工場で生れた飛行機は廿四の世界記録を樹立した。メツサシユミットと共に兄たり難く弟たり難き獨逸戦闘機陣營の双壁である。

英本土を灰燼に導きつつある獨逸重爆撃機陣にはハインケル一一一型、エンケル八八型があり、最近大西洋奥深く護送船集團を襲撃して幾多の艦船を撃沈してゐる長距離爆撃機フオツケウルフ・コンドルが登場した。ハインケル一一一型は晝夜いづれの爆撃にもよく、エンケル八八型は急降下爆撃機八七型の兄貴分として輕快なる爆撃機といふ特色を持つてすでに世界的名聲を博してゐる。



フォッケ・ウルフ・コンドルは愛稱クリヤ、日本語では章駄天、一九三八年伯林紐育間を四十五時間で往復し、東京訪問千八百四十四キロを四十六時間卅五分で完成、章駄天振りを發揮したお馴染みのコンドルを改良し性能を高めたもの、四つの發動機に機關銃と砲を積んで敵駆逐機との格闘力を持ち、爆弾の積載量、航続距離も比肩するものなく、おまけに亞成層圏を飛行できる様耐寒装置も到れり盡せりと言ふ驚ろくべき謎の性能を持つてゐる。乗組員は六人で發動機はBMW 130A、減多に兎を脱がぬソ聯もクリヤ型の性能には完全に参つたといふ因縁附の優秀機である。

ユンケル、ハインケル二大航空機會社につぐドルニエからは特異の大型機が續々生れてゐるが特にドルニエ一七型は遠距離偵察爆撃機として注目されてゐる。一九三七年チューリツヒの飛行大會に参加し、多座軍用機のアルプス周圍飛行競技で斷然他を壓した外、單座戦闘機まで追ひ抜いたといふ偵察機にはもつて來いの型であるが、之に改善を加へたものが飛ぶ鉛筆の愛稱で形態のスマートさを謳はれながら、物凄い性能を持つドルニエ一五型である。獨空軍爆撃のあと英本土重要都市に大膽極る低空飛行を行つて偵察、高射機關銃は勿論、高射砲にやられても悠

悠基地まで歸還できるといふ不死身性を重寶がられ、英本土ヤソ聯の被害情況調査には缺くべからざる存在となつてゐる。

獨逸參謀部の眼として活躍する偵察機には全金屬機製作の仕上げに劃期的偉業を完成したヘンシエル工場製作のH・S・一二六型があり、高性能機製作めざして最近名聲をあげたブローム・ウント・フォス會社からは遠距離偵察機ベフアウ一三八型肩翼機と、中間翼機ベフアウ一四〇型が生れた。一四〇型は遠距離偵察のほか爆撃用にも使用され、水雷發射機としても優秀な成績をあげてゐるが、特に一本の中空管を燃料タンクと翼芯に併用したフォーク技師長の特殊設計は、屈回點に際して翼に力を加へるものとして列國航空工業界注目の的となつて居り最近型フォッケ・ウルフ一八九型は世界最初の二重胴體を有し、全部ガラス張りで乗員の視野も極めて自由、偵察機界の革命兒として今後の活躍が期待されてゐる。

列國の航空機工業は民間の自由競争に委ねられてゐたため各會社各様の航空機が雜多に製作され、軍部も採用に不便を感じてゐるに反し、獨逸は技術的に國立中央研究所で統一し、各國では各會社の秘密部分とされるものまでも一樣に公開されてゐるので全面的に高い水準を保つてゐる。



が、更に注目すべきは右多種類の機種はいづれも撞着矛盾する事なしにそれぞれの用途に応じて製作されてゐる點であらう。爆撃も晝夜、遠近、陸上か海上かの別、偵察もまた同じく、目標地點の敵地砲火及敵空軍力の大小に応じて、あるひは偵察機關の整備、あるひは空中格闘力の強弱等、自由自在に多様の性能を巧みに使ひ分けてゐる。クレータ島攻略戦でグライダー空輸を敢行せんとすれば、空中列車の大小に応じてユンケル五二型、クリヤ型等を好むが儘に繰り出してゐるのである。

世界一獨逸空軍が決定的實力を獲得したものは勿論目的によつて最高の能力を發揮し得る各型態機種の完備ではあるが、之を自由に作戰上に浮ばせるものはシリーズ的大量生産方式である。實に於て優れる獨逸空軍が開戦後愈よ擴大強化されて來た裏面には組立及附屬品工場的能力を極度に發揮せしめる有機的な科學的經營がある。そこに無敵空軍不動の位置が基礎づけられてゐるのだ。

參戰以來米國は大空軍計畫を着々と遂行し、日獨空軍の壓倒を目指してゐる。しかし獨逸も既成機種を改良強化し、新型を編み出し、すでに大西洋無着陸長距離機の出現まで報せられ、空襲

近しと米國東海岸諸都市を戦慄させてゐる。

### 三、航空機大量生産の謎

再軍備以來僅かに十年、世界一空軍を建設した獨逸の航空機工業は今や東部戦線に、地中海に、對英空襲に、通商破壊戦に、日日數千臺を同時に飛ばして、その性能の優秀なるは勿論、玩具でも製造する様に老大な工場より吐き出す老大な數量は、北は諾威より、南は地中海、東は北コーカサス、西は英本土上空を蔽ふて、尖兵は愛蘭沖遙か大西洋中央部にまで達してゐる。世界中の資源を獨占するかに見える英米兩國必死の航空機増産計畫にもかかはらず、獨逸の生産力を凌駕する事は永遠の不能事とされる理由は何處にあるか、精密中の精密工業たる航空機製作にタクトシステムを採用した驚ろくべき組織力であると列國航空工業技術家の眼はこの一點に集注されんとしてゐる。

航空機的大量生産は全世界軍部の課題であつた。飛行機が消耗兵器であり、戦争の立體化が必然の運命を辿る以上それは當然の話であらう。そしてこの問題をみごとに解決したのは獨逸航空



機工業界に於ける設計と製作陣を打つて一丸とした火の様な祖國愛である。一九三三年ナチス政権樹立當時、獨逸に一つの新型航空機が設計を完了しても、製作されるのは多くて廿臺であつたが、再軍備の強行につれて一つの型に對する注文は幾何級數的に増加した。一定の技術者が飛行機の各部分を組立て飛ぶ迄に作りあげるのは仕事の煩雜なるは勿論廣範なる専門知識を全技術者に與へなければならぬ。急激に増加する軍部の注文に應ずる丈の技術者が一朝一夕に養成できるものではない。そこで製作工程を數百に區切り、未熟練工を採用して區切られた製作工程に於ての熟練工に仕上げた。鋸を打つものは鋸ばかり、線を引くものは線ばかり、未熟練工は忽ち部分的専門家となつた。その部分的専門家、區切られた工程の熟練工を組み合はして一大熟練工の大群が獨逸に生れたわけである。

大量生産方式は流動システムに止めを刺す。獨逸のオーベル、米國のフォード自動車工場は流動システムの最高峰に位するものと言はれてゐる。ベルト上に乗つた一塊の鐵製品はベルトの進行につれて車體となり、窓となり、車輪をつけ、機關を据え、美しく塗られてベルトの最後ではその儘運轉できる颯爽たる自動車として完成する。飛行機もオーベル、フォードの如く次か

ら次に工場の門から吐き出し得たら獨逸科學の組織力もものを言はず英米の苦悶も生れては來なかつた筈であるが。飛行機は自動車よりも部分品が多く、据附が免倒で、細緻複雑を極めてゐる。大量生産の元祖米國の航空機工業が一九四〇年手工業時代を脱せず、今日漸く軌道に乗らうとしてゐるのもここに原因がある。獨逸は自動車大量生産工程の暗示を受け、長を採り、流動システムの過程たるタクトシステムを編み出した。タクトシステムとは音樂の指揮棒から名づけられた名稱である。パツハの名曲も、ベエトーヴェンの第九交響樂もその曲譜をみれば一連のお玉杓子の行列に過ぎない。そのお玉杓子の巧みなる組合せが全人類の心琴をかきならす。

しかし數十、數百の種々の樂器はお玉杓子の行列を追ふと共にふられるタクトの時間的間隔に随つて音を發しなければ交響樂は成り立たぬ。獨逸航空機の設計家は作曲家にあたる。材料資材はお玉杓子にも比すべく、部分的熟練工は樂器にあたる。製作技師はタクトを揮ふが如く全技術者の部分的製作に一定の時間的制約を行ふ。しかし交響樂の樂士がいくら多くても數百人であるに對し、航空機工場の従業員は數千人數萬人に上つてゐる、それを一つのタクトによつて動かし、パツハの名曲ブランドルブルグ協奏曲にも比すべき精緻な機體を大量生産してゐるのである。英



米必死の追隨を許さぬ獨逸機の量と質に、獨逸人の科學性と組織力は最も端的に現はれてゐると言へやう。

タクトシステムは航空機製作工程を區切つてタクトに合はず文では完成しない。先づ設計技術者は製作工程を區切り易い様に設計し、技術家は之をタクトに合はして各部分の仕事が同じ時間に出來る様に分割する。目標は勿論工作の速進と經濟的の二點である。かくて一つのタクトに次のタクトが連絡し、タクトを経る毎に見る見るうちに飛行機が出来上る。製作技師の苦心は註文臺數と工場の設備、廣さ、従業員數を精密に計算して何組タクトを作るか、一タクトを何時間にするか決定、區切られた製作工程の難易、大小によつて同一タクトに働く人員も増減される。例へば胴體内部の仕上げに長時間を要するからとて之を一タクト間に仕上げるために一人の、従業員が内部へ入つては身動きが出来ないので三人宛入れてやる。その代りには胴體の製作工程は數箇のタクトに分割される。しかもタクトシステムは本體の一組立のみならず部分品にも採用、之によつて技術者の組織力と能力は一分間も手を空けて待つ必要がなく、お互ひに邪魔をせず、時間と努力の凡ゆる浪費を解消して學術と原理と經濟が完全な調和を保つてゐる。

獨逸空軍標準型の一つハインケル一一一型製作工場に入ると、同一方向に多數の機體が一行に並んでゐるのを見るが、その大量の機體は工程が違つてゐるので形が全部變つてゐる。背後から見ると第一工程ではクレーンで胴體を引上げ四つの大ボルトで連結の眞最中であり、同時に壓搾空氣の輸送管や電氣裝置を据ゑつけてゐる。次に並ぶ機體は第二工程にあるもので第一タクトで始めた仕事の殘部を片づけ索線が引廻され、爆彈投下裝置が取つけられつつある。第三の機體は外見は第二と變りないが胴體の内部構造完備を急ぎ、爆彈投下裝置に電線が結ばれてゐる。胴體にはブリキ屋がぐるりに薄い金屬を張り、早くも機首をくつつけ接合工程を進めてゐる。銀治屋、ブリキ屋、電氣屋、ペンキ屋の凡ゆる技術家が一分の隙もなく組み合はされ、タンクが据えられ、プロペラが取つけられ、測量器、機關等次から次に載せられて何工程かを経ると全部分の検査タクトを最後に忽ち航空機は大空へ飛び立つて行く。

タクトと次のタクトを連關せしめ、お互ひの工程を邪魔せぬためには完成した機體の下に全部分品の準備を必要とする。至心全力をあげて働く技術者に一刻の浪費も與へぬ様に部分品倉庫から工場へは電氣自動車を通じ、箇々のタクトを豫定時間通り構成するために部分品を運搬する倉



庫係りも傍流タクトを採用して正確を期してゐる。タクトの始りと終りにサイレンが鳴り響く、すると各タクトを終つた機體は次のタクトの位置に移り、各職工は定められた位置について與へられた部分的専門家としての實力を發揮する。獨逸航空機工場にサイレンが一回鳴り渡つたといふ事は一臺の飛行機の完成を意味する。一戦闘機工場は一日廿四時間に三百回のサイレンを鳴らしてゐると傳へられてゐる。即ちその戦闘機工場丈で一日に三百臺の空の軍を第一線に送りつつあるのだ。タクトシステム驚異の成功と言はねばなるまい。ルーズベルト大統領の十二萬空軍計畫は必ずしも豫定通り進まず、英國、ソ聯、重慶、漢洲にも送り、それがため米國の第壹線機が思ふやうに整はないと問題にまでなつた事がある。英國の航空機工業は獨逸空軍の集中爆撃に増産を阻まれてゐる。之に反して獨逸は英米合作の生産力擴張以上に擴張計畫を敢行しつつある。獨逸の生産臺數追跡はつひに永遠に英米の夢であると稱せられる所以である。

#### 四、急降下爆撃に醫學の協力

波蘭戰、北歐戰、蘭白佛戰と一昨年末より昨年の夏にかけて歐洲の山野を席捲した獨逸軍電撃進撃のある所必ずストウカの名で呼ばれる急降下爆撃機の果敢なる對陸協力があり、續く英本土爆撃戰、通商破壊戰に、しかして今や對ソ戰線に、地中海に出動して常に獨逸軍攻勢の第一線に立つ急降下爆撃機の威力は、世界の驚異として列國航空機工業界注目の焦點となつてゐる。しかし急降下爆撃機が獨逸軍の至寶として戦闘艦の撃沈に、要塞の破砕に、倫敦爆滅に赫々たる戰果を累積してゐるのは單に獨逸航空機工業のみの殊勳ではない。そこには空軍不斷の研究、練磨、肉體の苦痛を克服する勇士の精神力、周到にして緻密な航空醫學の協力が徑となり緯となつて今日のストウカを形成してゐるのである。

急降下爆撃は獨逸に發祥したものであるが落下傘部隊がソ聯に芽生えて獨逸に於て大作戰中に織込まれ、イタリーの驅潜艇が快速艇として獨逸に完成した如く、急降下爆撃機の能力を地上の如何なる小目標に對しても完全に爆弾を命中さし得る程度に引上げたのは東亞に於ける日本を



除いて獨逸空軍が最初である。この機最大の價値は正確な命中率と短くて済む滑走路と、爆弾を積載しての上昇力大なる諸點であらう。二、三千米上空から急降下する場合の速力は色々あるが大體一秒間三百米乃至五百米で、狙はれた艦船、要塞、都市にいかに對空砲火多數を備へてゐても高度標準の合はし様がなく、大空の黒點はみるみる目標附近に迫つて、急降中爆撃機に命中率大なりの誇りをむざむざと與へてゐる。之を防ぐいかなる武器もない事は英國防空陣最大の憂悶である。

三百米乃至五百米の落下速度は搭乗員の抵抗力如何により特殊翼で調節できる様になつてゐる。急降下して爆弾を投下後飛行機は水平飛行に移る。その際飛行士の間で氣絶飛行と呼ばれる現象が起る。即ち猛烈な求心力が働く譯で、落下速度の二乗と廻轉半徑の積に正比例して増大する求心力は搭乗者の身體組織に非常な影響を與へる。ここに航空機工業に對する航空醫學參劃の重大な一點がある。急降下速度は航空醫學上地球の廻轉加速度の把握によつて理解され易いとされてゐる。急降下機搭乗員に地球加速度の三倍の速度が加はれば、自己體重の三倍の重力をもつて身體を押しつけられる。更に搭乗人員の體重を十七貫とすれば、急降下の際肩の上に五十

一貫の重荷を背負ふ。換言すれば體重が一時的に五十一貫となり、機體設計の當初座席を頭丈にして平時體重の三、四倍の重量にも樂にたへる丈のものとしなければならぬ。

水平に移る際の加速度の大きさは飛行機の種類に比例し、飛行半徑に反比例する、普通この時の速力は4 G乃至6 G即ち地球加速度の四倍乃至六倍で。操縦士が飛行機を目標の眞上に落下せしめ、命中率を高くするためには、目標物の間近まで落下する必要があり、猛烈な速度で低空まで降りると地上に衝突、もしくは立木其他の地物に觸れる、之を回避するためには落下より水平へ移行する飛行半徑を最小に止めねばならぬ。爆弾の命中率は之によつて一層高く、獨逸急降下爆撃機眞の威力は、勇猛果敢なこの一瞬の投弾措置にあるが、その時の求心加速度は地球廻轉加速度の七倍乃至八倍に達する。即ち體重十七貫の搭乗者は百卅六貫の重荷を肩にして目標物を睨み、爆弾を投下し、操縦桿を動かさねばならぬ。機體の性能、乗員の精神力のみで解決される問題ではない、航空醫學の科學的協力がもたらす獨逸急降下爆撃機の勝利である。

急降下爆撃機が爆弾を目標物へ完全に命中するため最低空まで落下し、地上の障害物を避け急轉水平に移る瞬間の求心加速度が地球加速度の七、八倍に達すると、人間の體內には頭部から腹



部大動脈に向ふ血管と並行する力が働く。血液は同容積の鐵と同じ重量をもつて航空機の方に随ひ、動脈中を頭から腹部、脚部へと集中する。人間の血管は強靱な纖維ではできてない、弾力性に富むが故に鐵の重さで逆流する血液のため上半身の血管は扁平となり、心臓や肺の血液は減少して全血液は下腹部と脚部に集中し血液は一時的に循環を停止する。この時操縦士は貧血して失神状態に陥る。即ち下腹部と脚部の血管が不自然に擴大されて全血液を流入するからである。

落下より水平に移れば他の現象が起る。即ち突然前面に眞黒なカーテンを投げられた様なショックを受け、視覚を失ひ、搭乗員全部の目が利かなくなり、加速度更に大となれば失神する事もある。獨逸急降下爆撃機の乗員は失神事故は起きなかつたが、視覚を失ふ事は時々ある。この原因については臨床例が尠いので理論的に研究を進めて行くより外方法がないが、獨逸の航空醫學はよく困難なこの原因の究明を終つてゐる。失神回復時の状態より、失神の繼續時間は勿論、眼球毛細管の血液不足による視覚喪失等各方面より科學的に追究して之が豫防に萬全の措置が講ぜられ、戦闘前の個別的な健康状態にまで及び、急降下機の構造改良や、技術の發達によつて現在では完璧の域に達してゐる。

獨逸空軍は航空醫學の協力により實戦に於て標準體格で一日に何回の急降下ができるかと言ふ統計まで完成してゐるのみか、早くも各乗員毎に嚴密な検査を行ひ、何回の急降下に耐へる體力を持つてゐるかを凡ゆる點より診斷、算出してゐる。急降下爆撃機乗組員と決定した空軍勇士は先づ航空醫學専門の軍醫の手に渡される。ここで科學的検査を行ふてその個體の持つ耐久力が明確にされ始めて急降下を許される。しかし急降下の回数はあく迄も軍醫によつて言渡された範囲より増加する事を許されない。いかなる作戰上の必要があつても萬一航空醫學上決定された回数以上の急降下を行ふ場合は、あたら勇士を墜落の不幸に陥れるおそれがあり、同時に決定回数以内に於ては、急降下は若くして闘魂に燃ゆる勇士にとつてスリルに富むスポーツにも比すべき快適なる祖國への忠烈であり、科學的診斷の結果決定せる回数以内で急降下する限り、失神事故は絶無となつてゐる。

空の勇士は常に精神的肉體的最上のコンディションを持たねばならず、それがために日常生活は極めて嚴肅な規律の下にをかれてゐるが、急降下爆撃機乗組員は生活上特に自重自戒を怠らない。軍務中は一滴のアルコールを服まず、一日中の急降下回数も訓練によつて漸次増加される。



飛行前及び飛行後の微細な身体上の變化も見逃されずして記録され、重要任務を完全に果し得る最適の状態が保たれてゐる。獨逸急降下爆撃機の威力を發揮するのもまた、工學、醫學の科學的總力に支持された獨逸獨特の精神力であるとみるべきであらう。

### 第三部 獨逸戦力の背景



## 第一章 樞軸を支持する歐羅巴大陸

### 一、文明勞働力四億人を結集

米英の謀略外交に乗せられて、かつて對獨包圍網の一環となつた諸國、かつて獨伊と戦つた諸國が、獨伊の歐羅巴新秩序建設工作に共鳴して、積極的に樞軸へ參加した諸國と共に、全歐羅巴を一丸とする一大經濟力、一大戦力を培養する方向へ急速に進みつつある事は、フランス降伏以後報道されたところであるが、米英兩國から放送される夢物語り式歐羅巴戦後案、第二次冬季反撃を契機とする赤禍の脅威に對する自覺と共に、その歩調を早めた事は、獨ソ決戦の前途を決定する重要な鍵と觀らるべきものがある。

その理由は全歐羅巴諸國の運命が、直接獨伊の運命と緊密なつながりを持つて來たところにあると言へやう。外交政策は自國の安全と、發展、繁榮の線に沿ふて遂行される。ポーランドの

對獨挑戰は今日の事態より眺めて無謀も甚しい事であるが、當時ポーランド政府より觀れば、それによつて自國領土を保全し、將來の繁榮を招來するための行動であつたに相違はない。第一ポーランドは獨逸の戦力に對する觀測を誤まつて過小評價し、第二に英佛の戦力を過大に評價した第三は英國の假面外交の實體を見破る事ができなかつた。その結果は一撃のもとに倒され、英佛の救援を仰ぐ時間もなく、更に今日となつては英國の對ソ媚態外交の犠牲として、戦後反樞軸側の勝利の夢が實現しても、分割されるといふ悲痛なる立場に立つたのである。しかも舊ポーランド政府は之を以て最上とした方策を誤つたもので、亡國するためには獨逸に挑戰したものでない事は確い實である。

獨逸包圍網の一環を承つた舊チェッコ・スロヴァキアの外交方針も同様であり、開戦五日目に白旗をあげたオランダも、英佛兩軍の來援によつて最後の勝利を得るといふ確信と、反樞軸側に立つて參戦せぬ限り、大海上武力を持つ英國により、面積に於て本國の五十倍、人口で六倍に達する龐大な植民地を分割されるおそれがあるといふ打算に出發した。ベルギー政府も目算を誤り、フランスも英國を信じ過ぎた。正面の敵だつた獨逸に食糧を支給され、戦友の筈だつた米英



に植民地を抑へられるといふやうな今日の事態を想像するは困難としても、獨逸の持つ軍備に對する正確な知識があれば、いかに英國の使務があつても、自國領土の保全のため、たとへ面目は泥土に委しても、フランスは對獨逸開戦の愚擧には出なかつたであらう。

同じ傾向は同じゲルマン民族である舊オースタリーにもあつた事は記憶する必要がある。ヴェルサイユ條約によりハンガリーと切離され、政治經濟上の獨立能力を失つたオースタリーは、すでに一九一八年の假國民議會法令によつて、獨逸へ合邦意志のある事を表明。翌一九一九年の正規國民議會で之を裏付けする動きをみせたにもかかはらず、英・佛・波等の壓迫によつて獨立維持の義務を背負はされ、一九三一年三月協定の成つた獨逸關稅同盟さえ、西部列強の反對によつて閣から閣へ葬られてゐる。經濟的獨立の實力を持たぬオースタリーは、國民が生存するためにも英佛の意志に従はざるを得なかつたのである。新生獨逸の興隆を恐れる英國の封鎖外交は、イスを除く一切の歐洲諸國家を糾合して完全な陣型を作つてゐたかに見えてゐたが、一切は各國が領土保全と將來の發展、繁榮のため、英國の意に逆ふは愚かなりと觀た結果であつて、そこには一本の精神的紐帶も存在しなかつた。

今日の事態は完全に逆となつた。英國の意に迎合して繁榮と發展なく、樞軸に抗して領土の保全は覺束ない。獨逸の勝利によつてのみ歐羅巴諸國の脅威は除かれ、獨逸に與みしてのみ歐羅巴の文化は救はれるのである。

一九四三年四月ヒトラ、ムソリーニ會談に關して獨逸總統大本營は『最後の勝利が達成され、歐阿に對して東西何れよりするも、今後あり得べき一切の危險を徹底的に排除するまで、獨逸は總力を戰爭に注ぎ込む』と發表した。しかし獨逸の總力とは獨逸のみの總力ではない、その背景には獨逸と共同の運命線上に立つルーマニア、ブルガリヤ、クロアチヤ、ハンガリー等の三國同盟參加諸國が存在し、對ソ血戰に全力を傾けるフィンランドがあり、防共の誓ひ堅きスペインが控へてゐる。そして嘗て獨逸包圍陣に参加し、戰鬪さえも交へた佛、蘭、白等の諸占領國民が、漸次親米英の惡夢より覺めて、親樞軸へ轉換の歩を早めてゐる。

歐羅巴諸國が何故に獨逸を支持せんとする方向へ歩みつつあるかは打算と精神的自覺の二方面から解明する事ができる。米英側に立つた諸國は亡びる。獨逸に與みした國は繁榮するといふ今次大戰勃發以來の一連の事實による教訓が打算のその一つ、獨逸敗れば歐大陸は赤化し各國の



困窮があり、樞軸が勝つた時はじめて歐大陸永遠の平和と各國の繁榮があるといふのがその二つである。チャーチルの口車に乗つた諸國は悉く敗れ、悉く欺かれた。舊ポーランド國域に關するソ聯と亡命政権の紛争に對してとつた、米英の態度は、歐大陸に残存する親米英派に對する最大の教訓であつた。そして樞軸に参加したルーマニアはベツサラヴィヤとブコビナの一部分を奪回し、フィンランドもカレリヤ地峽を奪ひ返してゐる。樞軸側に立つてはじめて領土保全と發展のある事を證明する嚴然たる事實なのだ。

獨伊が敗るれば、ソ聯に隣接する諸國の領土は、米英によつてソ聯に獻上される。フィンランド、ハンガリー、ポーランド、バルト三國、ブルガリヤは、抹殺または分割され、赤色警察が武力をもつて、オーデル河以西に設定される事は、戦勝の夢を見つゞける米英の戦後案の中にある。残余の歐羅巴には米英の金權政策の尖兵として、アングロ・サクソンの武力が侵入、戦前よりもすごい經濟的搾取が展開されるであらう。米英防壘たる役目を果し得ずして崩壊したフランスの如きも、獨伊と等しく武装を許さぬといふのが、慘虐なアングロ・サクソンの痴妄が描く夢の戦後案の中にあり、獨伊が敗れた時全歐羅巴は、世界一の文明大陸から、奴隸大陸へと轉落の運命に逢着する。

しかもソ聯の共產統治と、米英の金權支配に、萬一歐羅巴が兩斷されたとすれば、次に來るべきものはソ聯對アングロ・サクソンの争闘でなければならぬ。その日が何時來るかは何論判明しないとしてもアメリカ・ユダヤが世界統治を最後の目標とし、アングロ・サクソンが世界を支配せんとする限り、ソ聯と米英の衝突は必然の運命にある。現實の歐羅巴は樞軸の精強なる武力によつて、未曾有の大戦中戦場たる災禍を免れ、東方戦線は遠くソ聯領奥深く、西は大西洋上、南は地中海に布かれてゐるが、ソ聯對米英角逐するの時ありとすれば、戦争は歐羅巴大陸のまん中に展開され、傳統に輝く大陸の文化は完全に地上から姿を消すであらう。

樞軸の目標は歐羅巴の新秩序建設にある。獨逸の勝利によつてのみ赤化なく、金權米英の搾取なき、眞の平和と繁榮が歐羅巴に招來される。かつて獨伊の敵たると否とを問はず、大陸の諸國が一丸となつて、獨伊の勝利のため結束せんとする空氣のある事は、單に打算の上からのみ觀ても當然肯けるところであらう。

今次大戦前英國は謀略を以て歐洲諸國を自己の陣營にひきつけんとし、數ヶ國もまた打算の上



から英國の堡壘たる愚かなる役割に就いた。しかし打算によつて決定する外交方針は、また打算によつて變更される。英國と同一歩調をとる方が利益であるとき、ベルギー、オランダも英國について行つた。一度英國との道中に不利を感じた時、ベルギー皇帝は全軍をひきいてフランダース戦線の守りを放棄し、無條件で獨逸軍へ降伏を決議された。亡命政権や逃亡女皇を齒ぎしりさせた、オランダ軍の單獨降伏も、英國と最後まで戦ふの愚かなるを知つた、オランダ軍司令官の打算によつて決定してゐる。

しかし獨逸を支持し、歐羅巴新秩序建設工作へ積極的に参加しはじめた歐羅巴諸國は、打算と同時に獨逸への精神的な細帯を深めてゐる事を忘れてはならぬ。

即ち英國謀略外交のからくりが戦争の進行と共に暴露されると同時に、金權米英の搾取をあくまで排して、歐大陸の自由と獨立と安全を圖り、運命共同體として大陸永遠の繁榮を維持せんとする、樞軸の崇高な理想が事實によつて示された結果、親獨諸國はより獨逸へ近づき永年の敵性諸國も過去を清算して、獨逸への信頼を昂めはじめた。必ずしも余らぬ食糧をフランスに頼ち、血の犠牲によつて赤色勢力の南下を防衛し、多數の技術者を派して農、工業の改善を圖る等、

歐羅巴大陸を握つて以來の獨逸の建設的行動は、久しき英國謀略外交が培ふた反獨的空氣を急速に拂拭してゐる。

全歐羅巴大陸が一丸となつて、眞に有機的結合を完成したとき、獨軍の戦力は無限に擴大される。一切の人的、物的、精神的總力を動員したとき、他のいかなる大陸も歐羅巴が驅使し得るが如き、訓練あり活動力ある人的資源には敵し得ない。獨軍及び三國同盟參加國を合して歐羅巴には一億七千萬の樞軸國民がある。歐洲戦勃發以來樞軸軍占領國民は合計一億三千萬人を超へてゐる。之に東部ソ聯占領地域の八千萬人を合して、獨軍が現に自由に驅使し得る總人口は三億八千萬人に上る。外に親樞軸國としてスペインの二千五百萬人、スエーデンの六百萬人も控へてゐる。人口がいかに尨大でも協力するところなく、質に劣つては問題でないが、占領地域の住民まで獨軍を支持し、ウクライナ、白ルテニア等の八千萬人までが、ソ聯邦でも最も高い文化的水準を持つてゐる點に、總計四億に下る人的資源の重味がある。

米英ソ三國は今合して二億七、八千萬人の人口を持つてゐるが、米は四半球にあり、英は孤立せる島國、ソは亞歐兩大陸の北邊に位して、地理的に各々離絶されてゐる。之に反して歐羅巴大



陸の四億は纏つた人口の大集團を形成してゐる。ソ聯の技師不足を米國が補ふ至難の事に屬し、英國の勞働力不足を米ソで補ふ事も困難である。しかし歐羅巴大陸の四億は必要に従つてどこへでも移動し、融通し得る、現に獨逸の大軍需工場は、全歐羅巴の勞働力を自由に集め、後進國の指導には獨逸の技術的専門家が動員されてゐる。そして全歐一體となつて無限の軍需品生産力を維持してゐるのだ。

獨逸は國內から一切の有閑人と不急營業を驅逐した。戦闘に従事するに非ざれば、悉く戦闘に關係ある物資の生産者であり、伊太利も、ルーマニア、ブルガリア、ハンガリーもその線に沿ひ、他の一切の占領國、親樞軸中立國民も武器と鉄とハンマーをもつて歐羅巴の將來のために、戦ひかつ勞働すべく動員されはじめた。歐羅巴を一丸とする一大戦力こそは、對ソ戦に於ける獨逸の一大背景であらう。

## 二、傳統久しき工業大陸の強味

文化水準に於て優れ、四億といふ大集團を形勢、しかも自由に移動、配備し得る歐羅巴諸國民を背景とする獨逸の戦力は、同時に世界に最も古い傳統を持つ工業技術と、生産施設も背景としてゐる。東部で一千萬に近い兵員を動かし、西に英國と海空戦にしのぎを削り、地中海沿岸で米英と角逐する樞軸の戦力は、歐大陸全般の人的、物的資源を検討せずして理解する事はできない、ヒトラー、ムソリーニ會談に於て決定せる『歐阿に對する一切の攻撃力を撃碎する』といふ斷乎たる決意もまた、かかる背景があつてはじめて理解する事ができるのである。

歐羅巴大陸は近代産業發祥の大陸である。獨逸、伊太利兩國は勿論、フランス、ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ等の被占領國、スエーデン、スイス等の中立國はそれぞれの特質を持つ工業力を持つてゐる。蘭、白、佛の諸國はかつて特異な工業力を持つてゐた。精強獨逸軍のために忽ち打破られた之等三國の軍備は、貧弱な軍需工業しか持たなかつたためといふよりも、獨逸が餘りに龐大な工業力を整備してゐたために敗れたといふ方が適切である。フランスの軍需工業力の大はすでに定評があり、ベルギー、オランダの精密工業にも生彩がある。たゞ誤れる政治家が國力結集への手段を誤り、折角の生産施設を全的に活用しなかつた點にこそ、西部戦線に於ける慘敗の理由を發見する事ができるのである。



勿論歐羅巴大陸の工業力が、全部近代的組織と施設を持つてゐるといふ譯には行かない。むしろ傳統古き工業大陸であり、獨逸、アメリカ等に押されて退歩してゐただけに、佛、蘭、白等の工業施設には部分的に舊式なものがあつたと観るべきである。そこに歐大陸を一丸とする大軍需工業力擴大の餘地があり、樞軸の軍備は無限に擴大し得るといふ第三國方面の觀測の基礎がある。即ち米英ソ三國の軍需工業擴充が、それぞれの暗影と難關を持つてゐると對比した時、古き工業大陸の持つ底力がはつきりして來る。

ソ聯は現にウラル・クズネツ綜合工業地帯の生産力増強に懸命の努力を拂つてゐる。しかしウラル一帯は文字通りの曠野であつた。その地下資源は帝制時代から知られてゐたが、近代的工業施設を開始したのは五ヶ年計畫以後に屬する。全くの未開の原野に、地を相し、基礎工事を行ひ、建物と従業員の宿舍を建設してからはじめねばならぬ。之に反して獨逸の占領地域には工場の基礎があり、周邊に技術者がある。舊式、非科學的施設も僅少な部分的改造で、大部分は近代的軍需工場へ甦生させることができる。

參戰以來一ヶ年半を経過して、アメリカの工業力は一應の戰時編成を終つた。自由主義の總本山として、平和工業の軍需轉換には、多大の支障が豫想されたにもかかはらず、ルーズヴェルトの野望とアメリカ・ユダヤのあくなき世界統治慾が生み出した今日のアメリカの軍需品生産力は、勿論輕視を許さぬであらう。しかしアメリカは、世界一を誇つた既存の工業施設を完全に戰時動員し切つてゐる。今日までの軍需生産力擴張は、蓄積せる平和工業力を基礎として遂行されたものである。今後の増産には新たな資材の抽出と、技術者の養成と、全然新たな工場の設立を前提としなければならぬ。すでに昨年の後半、部分的ながら兵器の生産力が減退してゐると傳へられてゐるのは、それを證明するものであらう。歐羅巴大陸の工業施設は今日まで完全に獨逸のために動いてゐなかつた。しかし西部諸國の交通機關も漸次戰前に復し、各國が積極的に樞軸を支持しはじめると隨つて、歐大陸の全工業力は一切を樞軸の軍需品生産に振り向けはじめた。そこに限界點に近寄つたアメリカの軍需生産力と、伸びゆく歐大陸のそれとを比較する事ができやう。

四億の優秀な人口と、未だ利用し盡さざる工業施設を持つ歐羅巴大陸はまた、東西南いづれの戰線にも、一切の力を自由に驅使し得る立場にある。ソ聯は老大な資源を失つたが、同時に背後



になほ相當の資源を持つてゐるのも事實である。しかし失つた資源地帯と工業地帯が有利な交通施設、運輸施設を持つてゐるに反して、現在の工業地帯と資源地帯が、最も不便な東方に位すること、赤軍の重大な悩みであらう。ドニエプロペトロフスクを中心とするウクライナの工業は、クリヴォイローグの鐵とドネツ炭を近距離に持ち、ケルチの鐵礦とクリヴォイローグとの間僅々三四百キロを隔てるのみであるが故に、ドンバス重工業地帯は榮えた。しかし今日ソ聯軍需工業の中心地たるウラルは、二千三百キロを隔てたクヅネツツの石炭を焚き、製品は更に千五百キロ東方に送らねば、歐露中心部の工業地區に届ける事ができない。

モスクワ、レニングラードの大工業力は、ニコボリの滿俺、ドネツの石炭を使用してゐたが、現在は遙々四千キロも東のシベリヤより燃料を運び、南コーカサスのジョルジャから滿俺を運んでゐる。海路は使用によしなく、ヴォルガの水運はともすれば切斷され、鐵道の貧困は列強中例なきソ聯にとつて、かかる工業資源と工業施設の隔絶は重大な苦悶の種である。之に反して歐大陸の工業施設と資源は完全な集中體型をとつてゐる。獨逸の工業施設は直接石炭と抱合され、隣接してフランス東部の資源地帯が控へ、ベルギー、オランダの工場も至近の地に資材を擱んでゐる。

獨逸兩國が敵性をもつて相對してゐる時には、フランスのアルミニウムは英國へ渡り、獨逸ははるばるスエーデンから鐵礦を運ばねばならなかつた。舊ポーランドの鑛物資源も獨逸が自由を使用する事は不可能だつたのである。しかし歐羅巴を一丸とした時、はじめて大資源と近代工業力が眞の實力を發揮しはじめたのだ。

米國の戦力は勿論侮る事はできない。現に一千萬の大陸軍建設計畫は進められ、英、ソ、印度、重慶へ渡すべき兵器、彈藥が生産されつつある。しかし大西洋の幅こそは米國の戦力を徹底的に割引きするものであり、更に獨逸潜水艦が潑刺たる活動を示すに至つて、距離と船腹の悩みが深まる。ニューヨークと英西岸のリバプール間は三千五十三哩を隔ててゐる。アメリカ東部工業地區より地中海西口に至る距離も略同じい。之を地中海中部の戰場へ運ぶには更に一千五百キロ、砂漠を突破させねばならぬ。この長大な輸送路は悉く樞軸潛艦の碁盤型網目に觸れるに非ざれば、獨逸空軍の狙ふ魔の進路にあたる。アメリカを出發した船舶の幾割が戦線に到着してゐるかは勿論正確には判明しないが、獨逸海空軍が毎月百萬噸近くを爆撃沈してゐる事は確實であり、同時に百二、三十萬噸の兵器、彈藥、食糧等が海底に葬られてゐる事も事實なのだ。アメリカの



戦力は大西洋を渡るに随つて減退し、戦線へ到着した時は、アメリカ人の想像も及ばぬ程實力を削ぎ取られてゐる。

歐羅巴の戦力は何等の危険なくして至近の戦場へ迅速に到達せしめ得る。獨、洪、羅國境より東部戦線まで、最長千キロ、伊太利本土よりシチリヤ、パンテレリヤ、サルヂニヤ、は自と鼻の間にある。歐羅巴西部海岸に米英軍が上陸を試みれば、獨逸の大戦車集團は數時間で駆けつける事ができる。歐羅巴文明とその自由なる發展に對する各國民の權利を維持防衛するといふ。明確崇高な戦争目標の利を持つ獨伊は、無限の軍事的實力を發揮する地理的條件も備へてゐるのだ。

獨伊を中心とする歐羅巴大陸の軍事的實力を強めるものに、明確な戦争目標と、一點の緩みもない樞軸諸國の血盟がある。日本を中心とする東亞新秩序建設が各國をして各々所を得せしめる大理想に出發してゐると等しく、獨伊の戦争目標は歐羅巴の共榮にある。大陸と關係なき國のため、買収または驅使されて、數百年間歐羅巴を攪亂したアングロ・サクソンの手先を撃滅し、永年の軋轢状態から各國を解放しやうといふのである。各國の協力は共同の利害に基き、正當な基礎の上に統一された新歐羅巴の成員國には、戦後分に應じて經濟資源が分配される事は、ヒト

ラ・ムソリーニ會談も明確に決定してゐる。

反樞軸側には一定せる戦争目的がない。文字通りの吳越同舟で、「何とかして勝つ」ための乗合船である。その弱點は戦争の最中現はれ、夢の戦後案を中心として紛争を捲き起してゐるのでも知られる。英外相イーデンと、米國務次官ウエルズが、戦争目的や戦後問題に觸れぬ申合せをしたといふ報道は、その間の機微を物語るものである。うかうか意見を發表すると同盟をぶち壊すおそれさえあり、黙するに如かずといふのだ。之に反して獨伊間には完全な意見の一致があり、樞軸參加國また然り。爾餘の諸國も獨伊の明快な行動には安心してついて行ける。そこに歐羅巴樞軸の強味があり、各國が競ふて兵を東部戦線に送つてゐる理由も知る事ができやう。

フィンランド軍の奮闘は餘りにも知られ過ぎてゐる。雪と氷と森林の最北戦線で、強大なソ聯軍に體當りを試み、獨逸遠征軍と生死をともにせんとする意氣は壯とせねばならぬ。獨逸兩國は廿五ヶ年前にも戦友として同一戦線に立つた。一九一八年四月三日、フィンランドが獨立のためにソ聯と戦つてゐる時、ケルツ大將の指揮する獨逸バルト海師團は、ハンゲ半島に上陸して救援の實をあげた。そこに獨逸の戦友意志が育まれてゐる事も見逃してはならぬが、同時に米英の謀



略外交が、ソ芬の單獨媾和をめざして猛烈に續けられてゐる點も見逃してはなるまい。しかし第一次ソ芬戦當時ソ聯を猛烈に非難した米英が、獨ソ一度開戦するや掌を返すが如く、逆にフィンランドを壓迫しはじめた信義なき態度は、フィンランドをして最後まで獨逸と共に戦ふ決意を固めさせたのである。獨逸なくしてフィンランドの獨立なく、中歐に依存せずして繁榮のない事を明確に知つてゐるところにフィンランドの強烈な戦力が生れて來るのだ。

ルーマニア、ハンガリー、クロアチア諸國の軍隊は、樞軸加盟國としてすでに東部戦線にあり、あるひはスターリングラード籠城戦で最後の一兵まで戦ひ、あるひはクバン河口の橋頭堡死守戦で獨逸軍以上の働きを示してゐる。ノルウエーをはじめとする占領地諸國も、義勇軍や義勇警官隊を派遣して、レニングラード攻撃に、東部諸戦區に獨逸軍と協同してゐる。中立國スペインの青色師團は、南國生れの青年を以て、零下五十度の中部戦區で、すでに二回の冬季戦を経験した。特に一九四二年―一九四三年の冬には、ラドガ湖畔の攻防戦で、豫備軍一ヶ旅團がソ聯軍撃碎に殊勳を樹てた。悉く歐羅巴を守るものは歐羅巴自身であり、獨伊敗れて歐羅巴諸國の繁榮はあり得ぬといふ、共同の利害に基く協力の現はれである。

ソ聯はすでに二千萬の兵員を失つた。英國も最大限度の兵を絞り出してゐる。米國の一千萬陸軍計畫は、軍需勞働力の不足となつてゐる。しかし歐羅巴には無限の豫備軍がある。ブルガリヤは鳴りを鎮めてバルカン南方の押へとなり、ルーマニア、ハンガリー兩國も全軍隊を動かしてゐる譯ではない。占領地諸國に至つては、餘裕綽々たるものがある。かくしていかなる見地に立つても、歐大陸の持つ軍事的底力は、反樞軸を遙かにしのいでゐるといへるのではあるまいか。

### 三、親米英派大陸より一掃

一九四二―四三年に至る、獨ソ冬季戦の眞最中、獨逸の東部占領地域建設工作が、ソ聯の大反撃の嵐をよそに悠々と進められつつあるといふ報道は、獨逸軍の對ソ作戦に於ける確固たる自信の深さを示し、歐羅巴新秩序建設のためいかに努力を拂ひつつあるかを證明するものとして注目される、赤軍が東方に撤退してからすでに一年半、豊饒なウクライナでは一九四三年悠々春季耕作が行はれた。占領後一ヶ年の耕作はまだ生々しい戦跡で行はれ、農具は乏しく、人心も平穩に返つてゐたとは言へなかつた。獨逸本國から急派された農業挺身隊の指導も間に合せの、微温的



たるを免れなかつたのである。しかし今日のウクライナ農業は明確な目標めざす計画的再編を終り、農具も潤澤に理想的な耕作を行つてゐる。農業挺身隊は耕作に關する細かい指導を終つて、今や全ウクライナをあげる増産時代に入つた。特にコルホーズ組織から解放して、新農業規則をあたへられた農民階級は將來に明るい希望を持ち、高い理想を抱く結果となり、増産に極めて良好な影響をあたへてゐる。

努力の結果はすでに現實の數字となつて現はれた。ウクライナからの報道によれば、東部戦線にある全樞軸軍の食糧を一手に引受けて、なほ余りある粒穀物を獨逸に送つたウクライナは、一九四三年三月下旬四千番目の食糧品輸送貨物列車を仕立てた。一九四一年は獨ソ開戦の年であり、一九四二年の春にはまだクリミア半島にソ聯軍があつた。随つてウクライナ農業の復興開發に種々の影響をあたへてゐる。しかも現在歐羅巴に送られつつある食糧の總量は、一九三九年八月の獨ソ條約によつて、ソ聯が獨逸へ供給を約したもののより遙かに多くなつてゐる。一九四三年春の戦線はドンバス東部にあり、農具も愈よ潤澤に、新農業規則に對する住民の理解も深まつたので、今後の増産は期して待つべく、歐羅巴の穀倉としての眞面目はますます發揮されると觀ら

れてゐる。

注目すべきはウクライナの農業が、ソ聯の穀倉から歐羅巴の穀倉として再發足した點にある。ソ聯がウクライナに要求するものはウクライナ在來の農作物であつたが、歐羅巴が求めるものは歐羅巴に不足する農産物となる。ウクライナの土地と勞働力に適當した農作物の栽培に力を入れると共に、歐羅巴市場の需要も參酌しなければならぬ。獨逸農業政策の企圖するところに從つて、ウクライナの農業は全歐羅巴の生産計畫中に織込まれなければならぬ。そして第一に増産の必要を認められたのは菜種と穀物であつた。

牧畜面でも獨逸式徹底性を以て研究され、どの地域にいかなる品種を飼養すべきかも決定した。獨逸及びバルカン方面から良質の飼料が輸入され、家畜農場は續々生れて、血統が重視され種豚も國有財産となつた。獨逸及びバルカンも積極的に協力し優秀な牝牛を送り、そして歐羅巴が不足を訴へる丈の獸肉を供給すべく、急速な増加も併行的に行はれ、自然の條件に恵まれた羊が、食肉増産の目標となり、五萬頭の一大羊群が西ウクライナから南部の草原地帯に移された事等は、獨逸農業指導がいかにか熱意を以て科學的に行はれつつあるかを證明するものであらう。かく



してウクライナはソ聯との一切の絆を断つて歐羅巴大農業圏の一環として發足したのである。獨逸東部占領地域の開發工作が如何にかくも順調に進捗しつつあるかは、歐羅巴新秩序工作の進捗と睨み合はせて觀なければ納得行かないであらう。ローゼンベルグ黨外交部長は「歐羅巴の文化と社會秩序を暴力より防衛し、他國民を尊敬しつつ指導して、共榮の實をあげ、繁榮歐羅巴の一部とならうとするのが獨逸の意志である」とその意圖を表明した。獨逸の謙虚なこの態度は占領地工作に於ても現はれてゐる。

シコルスキー聲明を發端としてソ聯と亡命政權間に紛争を起し、米英まで加はつて戦後處理の皮算用をしてゐるポーランドも、獨逸の總督政治三ヶ年半を経て驚くべき急速な開發の歩を進めてゐる。總督府食産總局の拓植農政義務制度施行は、インテリ農夫を中心とする農業改良運動で、増産行爲に對する總督府の便宜供與が奏功してゐる。ガリシヤ地區は從來より獨逸の影響を受けて、總督政治により忽ち獨逸の意圖に沿ふて増産に努めてゐるが、文化と縁の遠いルフリンの農民は、善良と勤勉を以て獨逸人指導者の熱意に應へてゐる。衛生施設、社會制度の改善に對する獨逸の施政は驚くべきものあり、全住民へ種痘が行はれ、隨所に健康診斷所が設けられ、數百名

の醫師が傳染病豫防に配置されてゐる。之がため例年老大な犠牲者を出した傳染病は漸減して、行届いた措置に全住民の感謝は深い。

舊首都ワルソウにはすでに廿四の病院が建設され、一萬の病床が備へられた。天災による住民の困苦を軽減するため、國庫の援助を多分に受けた補助委員會も生れた。市内には百廿六の臨時調理場が設けられ、毎日一萬人分の食事を調べてゐる。植物園も新たに開かれて、市民の生活を豊かにしてゐる。特に學校の復興は目覚ましく、特殊學校、職業學校に對しては入學希望者が殺到して、收容生徒も戦前より六割増加してゐる。バルト三國の私有財産制復活も時宜に適した措置として歓迎されてゐる。施設關係は後廻しとなつてゐるが、之によつて個人の創意が旺盛となり、對ソ戦闘意識も培はれた。明朗の空氣は沿バルト諸國に清新潑刺の氣を注入してゐる。

注目すべきは現地義勇軍であらう。東部占領地域の住民が、對ソ戦線に参加して、その中に純粹のロシア人があり、白ルテニア、ウクライナ人をはじめ、バルト三國民、ベツサラビヤ人等、帝制時代ソ聯領内にあり、スラブの血を多分に受けた人々が、赤軍と戦つてゐる事は、東部戦線の持つ思想戰的意義を表明するものではあるまいか。占領地住民の義勇軍は獨逸開戦の直後編成



された、最初は軍役や、運轉手としての参加で、直接戦闘に従事したわけではないが、何時の間にか樞軸軍の一角で堂々たる戦士となつてしまつた。クリミア半島ではタタール人がソ聯陣地に突撃した。レニングラード前面の要塞攻撃には白ルテニヤやバルト三國人、バルチザンの妄動を抑へるためにはウクライナ人、白ルテニア人が銃を執つた。新生歐羅巴の一員となるか否かが、戦闘に参加するか否かによつて決定するといふ自覺と、共産黨への憎惡に發する行動であることは更めて説くまでもあるまい。

樞軸軍の一員となつた占領地の住民は、獨逸兵士と同一の給料を受け、軍服も同じものを支給されてゐる。ただ上衣に民族を象徴する色分けがしてあるのみ。獨特の宗教、特別の民族的慣習がある場合は勿論考慮される。戦死者の遺族、出征將士家族の保護も獨逸兵士の場合とすこしも違はない。戦傷兵は同一の野戦病院で手厚い看護と治療を受け、恢復すれば前線、でないものは銃後に廻され、復興、開發事業に直接参加するか、または總督府諸官廳で事務をとる。獨逸の旺盛な氣力と、熱意ある指導、謙虚な態度は、占領地の農作物を増加させると共に、戦線に立つまで精神的紐帯を固くしたのである。

開戦當時同一陣営にあつた舊ポーランド國域問題に冷淡であつたと等しく、佛、白、蘭諸國に對する英國の態度も目に余るものがある。米國赤十字社がベルキ一の乳幼児、病人のために提供しやうとする紛末牛乳の送付を、英國經濟戰爭省次長フードが拒否したのは最近の事であるが、今度はアントワープを大爆撃して老幼婦女子を多數殺傷した。目貫通りは一キロにわたつて廢墟と化し、屍臭全市を蔽ふこの世の地獄を思はずものがあり、死者のみで二千三百名に達したと傳へられてゐる。今次大戦のはじめ、西部戦線で英佛側に立つたベルギー軍の戦死者の總數が七千名であつたといふ事實を想起したとき、英國の鬼畜振りがはつきりと判る。フランスこそは煮え湯を吞まされ續けである。利を以て反逆將星を誘ひ北阿を分斷せんとし、世界中の植民地を米英で勝手に處理してゐるのみか、ヴィシー政府の命令を尊重してゐるといふ理由で、アメリカはマルチニツク島の略奪にさへ着手した。戦備未だ整はず、空軍に於て絶對的に劣勢であり、勝目なき對獨戦にフランスを煽り立てたのはアメリカであつた。フランダーズの織滅戦で樞軸軍を最後まで支へ、たとへその一部たりとも英國遠征軍に本國へ歸還の機會と與へたのはフランス軍であつた。しかも今米英がフランスにとりつつある態度は數百年間相對峙する敵國にも等しいものがあ



る。しかも英空軍は最近バリを空襲して、軍事的に何等の意味もない住宅街を盲爆し、白晝敵千人の群衆で埋めた競馬場に爆弾を落して非戦闘員を殺してゐる。

ベデカー（旅行案内）空襲なる言葉が今西部占領地域の住民を激昂せしめ、同時に英國を輕蔑させてゐる。ルユベツクのマリエン教會、ミュンヘンの美術館、ニューレンベルクの風光美はしき市役所付近等、英空軍が空襲してゐる獨逸諸都市は悉く旅人の杖をびくところである。防備固き軍需工場地帯を避けて、英空軍の爆撃は旅行案内でもするが如く、獨逸の名所ばかりに落ちるといふ意味である。そのベテカー空襲が今西部占領地域にも展開された。花のパリの競馬場、アントワープの銀座通り。水車廻るロッテルダムの近郊等。英空軍の卑劣残忍なる爆撃は、非戦闘員の殺傷のみを目的とするが如く落ちて来る。蘭白佛諸國民は、嫌でも歐羅巴新秩序建設に協力し、樞軸を積極的に支持せざるを得なくなつてゐるのだ。

ラ・フランス・ソシヤリス紙政治部長シャトオ氏は『獨佛間の争鬪程危険であり、無意義な事はないといふ事を今度こそ全フランス人がはつきり覺つたであらう』と、新生歐羅巴のために盡すべきフランス人の責務を述べ、ド・ブリノン大使は『東部戦線こそフランス軍の眞の戦ふべき

意義あるところだ、之によつてフランスは光榮ある防共戦の一國となり、子孫の運命も共產主義より解放され得る』と演説してゐる。かくして舊蘭白佛三國は多數の勞働者を獨逸に送つて樞軸の軍需工業力を培養し、工業諸施設と農業もまた、歐羅巴大經濟圏の一環として再編成されつつある。アフリカや西半球から食糧を仰いでゐた時こそ、英國のための酪農製品、英國のためのフランスの輕金屬工業も存在の理由がある。歐羅巴の食糧によつて生きる現在の西部占領諸國民が、歐羅巴の要求するものを生産すべく新發足するのは當然のことといへやう。かくして歐羅巴の新秩序は東西占領地住民の熱烈な支持の下に建設の歩調を早めてゐる。

#### 四、食糧自給の數字的基礎

開戦前あれ丈の食糧を海外に仰いでゐた歐羅巴大陸が、いかにして喰ひ繋いで行くかには幾多の疑問があつたのである。米英はそこに宣傳の鋒を向け、大陸の飢餓を幾度か放送し、中立國の懷柔には食糧供給を以てし、謀略の基礎ともしてゐるのである。しかし歐羅巴は食糧に於てもさしたる不安なく、貯藏品の減少によつて英國が苦悶し、物のあり餘るはずのアメリカに闇取引頻



出が傳へられてゐる時、歐羅巴の食糧問題が日と共に改善されつゝある事は戦争と建設を併進せしめんとする獨逸の方略が着々完成しつゝあるものとして注目しやう。

ソ聯を除く歐羅巴大陸が食糧を自給自給するためには二つの途があつた。一つは大陸そのものの生産高を増加すること、今一つは樞軸のソ聯領占領地域より不足分を補足する事である。しかしらば歐大陸ほどの程度増産すれば自給でき、ウクライナ、ルテニアはどれ丈を送れば、歐羅巴の穀倉たる使命を果し得るかといふ問題になる。今次大戦勃發前歐羅巴は食糧を海外に依存してゐた。その自給量との比率は雜穀で八百萬乃至一千萬噸で全需要量の六分乃至八分、油脂類が約二百五十萬噸で四割にあたる。コーヒー、紅茶等の嗜好品の率は遙かに高いが、之は戦時中の絶對需要品と稱することはできないので問題なく、他の輸入率は極めて低く、砂糖の八分の如きは、穀物、油脂類と違つて、消費規正によつて解決出来る問題である。かくして歐羅巴全住民が生存するための食糧問題は、穀物及び油脂を焦點として解決しなければならぬ事となる。

年額八百萬噸乃至一千万噸の穀物といへば老大な量であるが、大歐羅巴全域を以て解決を目指せば譯はない。即ち獨逸式農法のその一部でも、殘餘の歐羅巴が採用すればよいのである。戦前

數年間の平均主要食糧の各國收穫量を示せば簡単に判る。(數字は一ヘクタールあたり收穫量、單位は百キログラム)

國別	小麥	大麥	馬鈴薯
獨逸	一一・七	二〇・一	一五六・一
佛蘭西	一五・五	一四・八	一一〇・一
波蘭	一一・八	一一・一	一一二・七
諸威	一六・二	一八・八	一八五・七
西班牙	九・二	一一・二	一一六・〇
洪牙利	一三・五	一四・一	六二・〇
勃牙利	一一・六	一三・四	四九・三
ユゴスラ	一一・一	九・六	五八・九
羅馬尼亞	九・六	一〇・三	九一・一

即ち小麥に於ては、獨逸に次ぐ諸威も二割五分方收穫がすくなく、スペイン、ルーマニア等は半分にも達しない。馬鈴薯に至つては、ハンガリー、ユーゴスラ、ブルガリヤ等の一ヘクタールあたり生産高は獨逸の三分の一前後である。



歐羅巴諸國が、獨逸と同一の收穫を得ることは勿論困難である。徹底的な土地經營の集約化、自由な、良好な土地耕作法、不斷の種子改良と輪作、細心な農作物の保護と害蟲の驅除、一般的農業知識の向上等、獨逸式農法は獨逸の科學と、獨逸人のあくなき忍耐力、勤勉によつて今日の繁榮を招來したものだからである。しかし歐羅巴が食糧を自給するために必要な穀物は、斷じて他の諸國が獨逸農業と同一の水準に達しなくとも解決することができる。各國が五分、乃至一割五分程度の増産、即ちヘクタールあたり、四十キロ乃至二百三十キロの收穫量を増せば、戦前一ケ年間海外より仰いだ、八百乃至一千万噸の穀物を生み出すことができるのである。

獨逸は歐羅巴第一の工業國であつた。ヒトラ政權獲得以來歐洲戰勃發まで僅々七ケ年の間にあれ丈の軍備を完成しつつ、しかも歐羅巴のいかなる國よりも遙かに高い農業を建設してゐたのである。東南歐諸國の如きは農業國を以て立ち、農産物を産業の基本とした諸國であつて、獨逸より劣つてゐたことがむしろ不思議とも言へる。しかもノルウエー等の一部を除いて、大部分の歐大陸諸國は、地質、氣候に於て獨逸よりも優つてゐる。之に獨逸農業科學の粹を注ぎ込み、獨逸式農具と技術を送れば、八・九百萬噸の穀物増産は必ずしも難事ではない。事實歐羅巴大陸は、

各國民の新秩序建設工作に對する理解と、獨逸式農法の輸入、戦火地帯の復興等相まつて、急激に増産への道を歩んでゐる。

畑作物に於て生産豫備力を持つと等しく、家畜増加に於ても歐羅巴は洋々たる前途を持つてゐる。特に牧畜經濟の集約化に成功すれば東南歐諸國の家畜現有量は飛躍的に増加し、二倍までには漕ぎつける事ができ、隨つて歐大陸油脂類の不足分も補ひ得るのである。

ベルサイユ條約によつて版圖を削りとられた舊獨逸の家畜稠密度を百とすれば、各國の現有量は左の如き比例となる。即ち北西歐羅巴に於てはオランダ一四一、デンマーク一三七、ベルギー一一六、東南歐羅巴では、ブルガリヤが五一、ハンガリー四九、ルーマニア四五、フランス五九、舊チエツコ八五、ポーランド六六等である。北西歐諸國は酪農王國として戦前英國その他に大量の酪農製品を輸出してゐた。しかも大量の飼料を海外に仰いでゐたので之以上の増加は困難であるが、同時に全歐羅巴の立場よりすると、之等三國はいづれも小國で國土せまく、獨逸への比率を二百に引上げて大した影響はない。之に反して東南歐諸國の増加は、國土が廣大な丈に、低率の増加も全歐羅巴の油脂問題に直接多大な影響を及ぼす。



獨逸は東南歐羅巴の家畜頭数を二倍に引上げ、獨逸と同じ率にする可能性があると観てゐる。東南歐には第一に飼料を購入する必要がないどころか、穀類栽培面積に比して、せまい飼料栽培面積しか持たぬにもかかはらず、飼料植物輸出ばかりである。舊獨逸諸國の飼料用植物栽培面積が、穀物栽培地の二倍半にあつてゐると對比した時、東南歐がいかに牧畜に恵まれた諸國であるか判明するであらう。第二は家畜頭数増加に要する労働力に恵まれてゐる。老大な軍需工業が要求する老大な工業力を供給しつゝある獨逸の農園に比して、東南歐諸國は遙かに豊富な農業従事者を持つてゐるからだ。

現在歐羅巴大陸中農産物過剩國は東南歐のみに限られてゐるが、嘗ては悉く農業國であつた。フランスの如き現在には最も食糧の不足する國も、大量の穀物を輸出した記録を持つてゐる。勿論歐羅巴は其後工業大陸と化してゐるが、何よりも食糧自給を不可能とした原因は他大陸より安價に食糧を輸入し得て、農業に採算がとれなくなつた結果である。しかし現實の歐羅巴は他大陸よりの供給を断たれて、農業の復興が順調か否かは、各國民の生存に直接の影響を持つて來た。各國政府は厭でも應でも農作物の増産に努力しなければならぬ立場に立つた。従つて歐羅巴の

農業は新しい生氣を叩き込まれ、着々自給自足への道へ進んでゐるのである。

歐大陸自身の食糧自給計畫と併行的に行はれてゐるものに東部占領地域の増産がある。現在樞軸の手中にある舊ソ聯領土は一億二百万ヘクタールで、そのうち四千三百萬ヘクタールは耕作地となつてゐる。戦前この地域に於ける收穫の總計は、パン用穀物千五百萬噸、小麥七百五十萬噸、裸麥六百九十萬噸、飼料穀物八百八十萬噸、馬鈴薯三千二百萬噸、甜菜九百萬噸と見積られてゐた。それ丈でも歐羅巴の穀倉としての充分な生産力である。

しかし之等の生産額は共產主義政治によつて不當に抑壓されてゐた結果の數字であると、獨逸の農業専門家は断定してゐる。その理由の一は赤色政府の集團農業組織が農夫の勤勉心を削減した事、その二は急激な工業國への轉換によつて、巨大な労働力が新設工業地區へ集結された結果である。第一次大戦前、帝制時代のロシアは農産物の一大輸出國であつた。現在樞軸の手中にある地域からでも、一九〇九年から一九一三年までの輸出平均年額は穀物一千五十萬噸、砂糖二十七萬噸、ベーコン六萬六千噸、牛酪五萬八千噸、鶏卵五十億個にのぼつてゐた。共產主義政治から解放された東部占領地域が、歐羅巴の穀倉としての新しき使命のもとに、第一次大戦



前の生産額を復活すれば、穀物は丁度、今次大戦前歐羅巴が輸入しただけ、砂糖は需要を満たして餘りあり、一九三八年の家畜の總數、馬六百三十萬頭、牛千六百萬頭、豚千四百萬頭、綿羊一千萬頭が生み出す酪農製品や食肉も、歐羅巴の脂肪性食糧の不足を解決する事ができる。

現在の東部占領地域は、戦前程の工業従事員を必要としない。農産物の減少の原因となつてゐた赤色集團農業制度は廢止され、農業組合から個人農業へと移行しつゝある。土地、家屋の私有を許され、租税を免除され、耕地の擴大が自由となつた。農家の喜びはたとへるものなく、中北部の集團農場は大部分個人の經營となつてゐる。經營資材や種子は獨逸から供給され、農業機械や器具が一九四二年の春だけでも貨車數百臺に満載して東部占領地域に送られてゐる。農業用電力を供給し、既存施設を改修するためには、資本金一千萬ライヒスマルクの東部動力開發會社が牛乳、鐵道、道路、自動車船舶等、交通運輸に關する一切の調整、經營にあたるためには東部交通總務院が設立された。戦火地帯の復舊も、工場や都市と違つて、相手が大地である丈にすでに完了し、製粉、製糖工場等、農業關係工場の再操業も、獨逸技術者の指導で順調に進んでゐる。かくして東部農産地帯の占領後一ケ年にして、戦前獨逸經濟協定によつて供給を約束された丈の

食糧が、樞軸遠征軍の食糧を負擔しつつ獨逸へ送られた。採油植物も一年目に十萬トン以上が歐羅巴へ輸出された。油脂類の生産量も日と共に増加し、穀物はソ聯統治時代に比してすでに一割五分方の増収をみ、一千萬噸を輸出した帝制時代へ歩一歩近づきつゝある。

歐羅巴大陸が食糧を自給するための二つの途、大陸自身の増産と、東部占領地域の開發は共に進捗してゐる。即ち前者は穀物に於て一割弱と東南歐諸國の家畜を倍加すれば、ウクライナ、ルテニアに頼る必要なくして全歐を養ひ得るし、後者は帝制時代丈の收穫をあげれば、歐羅巴諸國の農業を現狀の儘としても、全需要に應じ得る。平時に於けるこの程度の増産は問題なく行はれるであらうし、戦時中といへども必ずしも難事ではない。むしろ緊迫せる政情は國民を眞剣にして増産に心魂を打込ませる反面、消費規正によつてある程度の消極的措置も講じ得るからである。しかし獨逸は萬全の方策として、二つの途を同時にとつた。東部占領地域が帝制時代の半分を輸出し得、歐羅巴諸國が五分方の増産を行つても、食糧問題は完全に解決するのである。事實局部的地域を除いて歐羅巴大陸に今食糧危機は存在せず、増産運動の徹底と共に全面的解決も近い。しかも米英ソ三國の食糧事情が時と共に惡化するに反して、歐羅巴が日と共に潤澤な食糧を



配給してゐる事は、獨逸の成功として見逃し得ない樞軸戦力の一つの基礎であらう。

## 五、抱藏資源は戦前の三倍

日獨伊三國は同一の運命線上にある、獨逸敗れて日本の戦略的不利は免れず、伊太利の勝利はひいて日本の作戦に好影響をもたらす、地中海戦の一勝一敗が、日本の運命に微妙な繋がりを持つと等しく、南太平洋戦に於ける日本の勝利に、獨逸兩國民は狂喜してゐる。その意味に於て日獨伊經濟協定の成立は必然的なもので、三國同盟の經濟部門を條文化したものであるとは、日獨伊三國の朝野ともに認める所である。しかし三國の歩み寄りが、思想的な防共協定、科學的な文化協定にはじまり、軍事同盟で完成し、更に經濟協定の成立で仕上げを行つた點に樞軸の高い理想があると共に、亞歐に於ける持たざる三國家が、赫々たる戦果の累積によつて、持てる國家として經濟的地歩を固めた今日、經濟協定の成立は、世界史的見地に立つても極めて意義深いものがあるといへやう。

イギリスがフランス及び一連の歐羅巴に於ける中小國家を使啖して、戦争を押しつけた理由は、

明らかに持たざる國家獨逸が、物的、經濟的破綻を起して結局降伏するであらうといふ確信があつたからである。當時獨逸の軍備は英佛兩國を遙かに凌いでゐた、動員力も佛波兩國を合してなほかなはず、軍需生産力に至つては壓倒的に優勢で、戦意もまた燃ゆるが如きものがあつた。勿論英佛は、獨逸が再軍備以來僅かに七年を経過したのみであり、ナチス政權樹立以來日も淺く、隨つて開戦後示された物凄い獨逸の軍事的實力と、國民の結束を過少評價してゐた事も争へぬが、對等に戦ふ自信もまたなかつた事も事實である。即ち英佛の頼みは時であり、絶對優勢な海上勢力であり、獨逸軍の鋭鋒を巧みに避けてゐる間に、徐ろに軍事的實力を培ひ、一方經濟封鎖によつて獨逸を物的に崩壊せしめ、最後の勝利を掴まんとしたのである。歐羅巴戦の緒戦に於て、獨逸軍の進撃が疾風の如く鮮やかな反面、英佛陣營が『長期戦』なる言葉をお題目の如く連呼したのは、この間の消息を物語るものであらう。

しかし獨逸の軍事的實力は、伊太利の勢力と結んで、歐羅巴に不動の樞軸圈を確立した。前大戦の如く、獨逸を孤立さし、經濟的に封鎖しやうといふ英佛の目論見は破れて、佛國は降伏し、英國は逆に獨逸潜水艦のため本土を封鎖されてゐる。樞軸は戦力を消耗するどころか、日と共に



強大となり、デーリー・メール紙の如きも『歐羅巴大陸の資源と、工場施設と、勞働力を握つた獨伊を、長期戦によつて崩壊せしめんとするが如きは夢である。反樞軸諸國を片つ端から潰し、アフリカに米英と戦ひ、ソ聯と東部に死闘しつつ、しかも獨逸は微動もせぬ大陸軍と、老大な潜水艦隊列を擁してゐる。むしろ決戦の時を今年に選び、獨伊の強化を防がねばならぬ』と論じてゐる。ルーズヴェルトも一九四三年を決戦の年とし、英國もそれを肯定してゐる等、反樞軸陣營に長期戦論が影を潜め、短期決戦の聲が擡頭してゐるのは、米英の焦慮を示すものではあるまいか。

しからば何故に米英は焦慮するか、獨逸が東部にソ聯の資源地帯を奪ひ、占領地の復興開發に驚異的成果をあげ、日本が東南亞を確保して、資源難を克服してしまつたからである。そして逆に戦前の持てる米英陣營に、種々の重要物資不足時代が訪れはじめてゐる。石炭、鐵礦、ボーキサイト、錫礦、クローム、マグネシウム、マンガン、ゴム等、軍需重要物資八品目より觀ても、樞軸の保有資源は戦前の三倍に急騰、戦争經濟の弱點は完全に除去されたといひ得べき段階に達した。米英が徒らに時によつて利せんとする時代は過ぎ去つたのである。その豊富な亞歐の資源

を、強大な樞軸軍力の背景としたのが日獨伊經濟協定である。

樞軸が戦前に比して、如何に老大な資源を獲得したかは、敵に語らしめても判明する。ニューヨークのビジネスウイック誌は、一九三八年より一九四二年に至る四年間で、世界に於ける重要資源の掌握國に多大なる變化をもたらし、日獨伊三國がいづれも大なる原料保有國となつた事を認め、之がため米英側が樞軸よりも貧しくなつたとは言へぬとしても、資源國としての基礎をゆすぶられ、反對に日獨伊がいかなる原料封鎖に對しても、泰然たる經濟的實力を得た事を強調してゐる。

ビジネス・ウイックの調査によれば、軍需資材の第一に推さるべき鋼鐵の樞軸生産額が、世界に於ける戦前の二割四分七厘から、三割三分一厘と、鐵石は僅か七分三厘から四割四分四厘へ。工業活動第二の決定條件たる石炭及び褐炭が、戦前の三割二分から四割五分四厘へ、いづれも激増を示してゐる。之を獨逸に觀ると、一九三八年の鐵礦生産額は千二百萬トン、乃至千三百萬トンと言はれてゐた、その數字は勿論一國の生産額として老大なものではあるが、英佛兩強をはじめ、歐羅巴の親英中小國家を敵に廻して、激烈な近代消耗戦を行ふには足りないといふ英國は睨んだ



のである。しかし西部戦線の快勝と、ソ聯への進撃によつて、獨逸はオーバーシレジャの九十萬トン、エルサス・ロートリンゲン及佛本國の三千三百萬トン、ベルギー及びルクセンブルグの五百卅萬トン、ソ聯邦の二千五百萬トンを加へて、一九四二年には六倍の七千六百七十萬トンといふ巨大な鐵鑛年産を得、優秀なスエーデン鐵鑛も自由に輸入し得る立場にある。

獨逸は石炭國であり、戦前も大量を輸出してゐた。一九三八年の採掘高は一億八千二百萬トンで、石炭に關する限り、獨逸はいかなる消耗にもたへる事ができたのである。しかし戦争の進展につれて、ポーランドで三千八百萬トン、フランスで四千七百萬トン、ベルギー三千萬トン、オランダ百三十萬トン、ソ聯一億トン、合計二億二千八百萬餘トンを加へて、一九四二年には確實に四億一千四百餘萬トンを握り、北歐諸國の暖房用、工業用は勿論、全歐羅巴大陸の需要に應じてゐる。中南米諸國が船腹不足で米國よりの石炭供給を断たれ、ソ聯がドネツ炭田を樞軸に占領されて、共に重要線路及び軍用列車以外は薪を以て列車を走らしてゐる現状と對比した時、樞軸の軍事的勝利が物的勝利をもたらし、日獨伊を貧しき國と觀たば樞軸陣營に深刻な物資飢饉の兆歴然たるものがあるのを發見するであらう。

日本の勝利によつてもたらされた原料保有量變異について、ビジネス・ウィーク誌は、樞軸のゴム資源が戦前の〇から九割一分一厘へ、錫が九分四厘から七倍の七割三分二厘へと、飛躍的に増加した點を特に強調し、ポーキサイドは二倍半の六割六分へ、マンガンは四倍の四割へ、鉛鑛は二倍半の二割二分へ、亜鉛は二倍の二割八分へ、ニッケルは廿倍の二割一分、亞麻は四倍の三割六分、羊毛は三倍半の一割二分、棉花は三倍の二分六厘へと、日獨伊の資源掌握範圍が、大戦の進行につれていかに擴大されたかを明らかにしてゐる。特に原油は戦前の四厘から一九四二年初頭すでに十五倍の六分九厘にのぼり、その後東印度諸島の油田を日本が握り、獨逸の石炭液化工場は比躍的に擴大増強されて、近代戦の血液にたとへられる液體燃料の不安を一掃し、鐵、石炭と共に、長期戦に對應する必要軍需物資の基礎を確立した事は樞軸勝利の前提條件を完璧ならしめたものとして注目さるべき數字である。

樞軸の獲得したものは反樞軸の失つたものである。米英陣營が戦前世界の七割五分を保有してゐたポーキサイドは一割四分に半減し、鐵鑛は九割二分七厘から五割五厘へ、石炭及び褐炭は七割弱から五割五分弱へと轉落した。特に錫は戦前の九割から二割六分八厘へ、ゴムは十割から八



厘九毛へと悲惨なる敗退で、その最大需要國たるアメリカの狼狽は秘すべくもなく、ゴムの如きは少量のセイロン島産に、更に僅少な南米産を血眼で探し、老大な人造ゴム生産計畫で急場を逃れんとし、戦争の責任者ルーズヴェルト最大の悩みとなつてゐる。世界無比の強兵日本軍、精強の黄金時代に入つた獨逸軍と、戰意火の如き伊太利軍は、老大な資源を獲得して勝利の絶對街道を今進みつつある。しかも亞歐のその資源を相結ばしめ、三國戰時經濟的基礎を一層昂めんとするのが、日獨伊經濟協定なのである。

日獨伊三國が亞歐に新たな老大な資源を獲得して、兩大陸に各々新共榮圈を建設しつつある事は、三國經濟協定の背景として注目さるべきであらう。樞軸は今米英と喰ふか喰はれるかの死闘を展開中であるが、新秩序の建設も同時に行はれ、新協定もまた亞歐の經濟力を結集して共同の敵を痛撃すると共に、戦後建設計畫の經濟的基礎たらしめんとする理想に出發してゐる。

東亞新秩序建設工作は、滿洲國の飛躍的發展、中華民國の參戰、日佛印外交の調整等、政治外交的に異常の進歩を示す反面、占領地帯の復興開發目覺ましいものがあるが、歐羅巴大陸もまた、複雑な政治情勢を克服して、着々と新經濟圈の內的充實に邁進してゐる。特に東部占領地域開發

工作の成功がもたらす食糧問題の解決と、歐大陸を一大兵器廠とする軍需工業の改編が順調に行はれてゐる事實は、ルーズヴェルトの一千億弗軍事豫算を默殺し得る樞軸の軍事經濟的背景となつてゐる。一九四二年大なる期待をかけなかつた東部占領地域が、獨逸の食糧配給量を増加せしむる程の菜種と、穀物と家畜を歐羅巴へ送つた事實は、一九四三年より更に大量の食糧を送り得る事を示唆するものとして注目されやう。

東部占領地域にして指導よろしきを得れば、歐羅巴の穀倉として如何に素晴らしい底力を發揮し得るかは第一次大戦前の數字をあげれば判明する。即ち一九〇九年より一九一三年に至る五ヶ年間、一ヶ年平均穀物千五十萬トン、搾油作物廿三萬トン、牛酪五萬八千トン、鶏卵五十億個といふ老大な食糧が、現在の占領地域から輸出されてゐた。

赤色政權樹立以來、工業方面へ力を入れたのと、集團農業組織、畜産制限等が微妙に農民心理に働き、農作物は刻々減産されたが、獨逸の占領後、農耕組合の組織、積極的耕作指導等によつて漸次農民間の増産氣分を醸成してゐる。一九四一年、戦火の跡生々しいウクライナ、白ロシアの收穫機械を赤軍に蔭匿された結果、人力のみで行はねばならなかつたが、其後獨逸側指導者と



農民の協力で、農業機械は森林から採し出し、破壊されたトラクターは使へる部分品を集め二、三臺で一臺を組立てる等、苦しいながらも復舊、開發工作が進み、生産は上昇一路、食品工場、製粉所、酪農場等も大部分操業を開始してゐるので、今後の増産は期して待つべく、歐大陸に於ける食糧配給は漸次潤澤さをみせるであらうと觀測される。

歐大陸を一丸とする軍需生産力の増強も飛躍的な成果をあげてゐる。ベルギー、ヴォロニア、フランダース等の労働力は、文化的に高い水準を持つ地方丈に優秀で、ポーランド出身の労働者の如き、獨逸國內で獨逸人と何等の差別も受けず、ルーマニアは東部戦線で獨逸軍と協力すると共に、全經濟力を樞軸に捧げて獨伊を支持してゐる。歐羅巴大陸は世界中最も水準の高い文化と工業力を持つてゐた、多數の國家相反目、對立してゐる時こそ大きな威力を示さなかつたが、相寄り相扶け、獨逸のために盡すことが歐羅巴のためで、大陸を赤化より救ふ途であるといふ理念が徹底しはじめてから、新經濟圏の實力は急速にあがつてゐる。一九四二年は歐羅巴大陸新秩序の礎石を置いたのみだといふべきであらう。工場施設、人的資源、軍需物資を單一の目標へ集中する準備の容易ならざるは更めて説くまでもあるまい。しかし一切のお膳立は整ふた、全歐の經濟力を結集して、米英撃滅戦に動員し、その成果をあげる日は今後にあるのだ。

## 六、ヨーロッパ革新戦争論

米英は勿論世界の統治者ではない。また國際的権力者でもない、しかしアングロ・サクソン兩國は統治者の如く世界を自由にせんとし、武力と金力をもつて列國を縛りつけて來た。行ふところ正なく、覆むところ信義なく、列國の不満は永年累積されてつひに爆發、今次歐洲戦の勃發となつたといふ觀方である。かくして『ヨーロッパ革新戦争』『新秩序の戦争』なる言葉が全歐に嵐の如く擴がり、獨伊を中心として米英撃滅への爆發力を一層強化せんとしてゐる。

歐洲革新戦争たる理論的根據は 一、不正にして時代遅れの歐羅巴支配形態撃滅を第一の戦争目標としてゐる事 二、領土的爭奪に非ずして大陸そのものの國際政治體形を變更せんとしてゐる事 三、大戰の勃發が史的必然性を持つてゐる事 四、列國の經濟的向上を戦後の目的としてゐる事 五、國際的特權階級たる米英を正面の敵としてゐる事等がある。之がため今次大戰は舊來の戦争と全然性質を異にし、クラウゼウイツの有名な『戦争は政治の延長なり』といふ定義もあ



ではまらず、戦争の實體こそ政治であるといふのである。しかして革新なるが故に妥協もない、今次大戦は米英を撃滅せざれば、自らが亡びる性質を持つてゐる。故に最後の勝利の日まで絶對に戦はねばならぬといふのである。

歐羅巴大陸の國際政治形態は不正の極致と言つて良い、同時に世界に綱を張る米英の動きは悉く不正であつた。世界物資の公平な利用を米英は意識的に妨害した。獨逸が歐羅巴大陸より物資を輸入しやうとすれば英國は金力にものを言はせ、中小邦を武力で壓迫、より高く買ひとつた、ルーマニアの油田は、その消費に何等の關係なく、しかも西阿油田地帯にあり餘る石油を持つ英國資本に抑へられてゐたのである。東南歐の欲する機械類を獨逸が供給せんとすれば、英國は商團の喪失を恐れて壓迫した。米英の搾取に疲弊した歐羅巴諸國民が、飲みたいだけのコーヒーも買へなくなり販賣の不振から暴落の兆をみせると、コーヒーは全部海底に投じられた。濠洲で羊毛は焼却され、米國中西部で羊群は撲殺され、小麥の山は野つ原で灰と化した。歐羅巴大陸の一角に飢餓が迫つた時、一方では暴利を續けるために食糧が抹消されてゐるといふ事實は、大地の恵みを空しうする悪虐非道たると同時に、物資の公平な利用を意識的に阻む不正である。

歐羅巴戦の發端はポーランド獨逸と獨逸の離れたる一都會ダンチツヒに關する領土問題であるかの如くみえるが、それは單なる切つかけに過ぎない。そもそも英國の不當なる獨逸包圍政策が獨逸問題の遠因として存在する。民族自治に名を籍つて、民族不自治の實をとり、ポーランドを、不當に水膨れ状態に導き、之を利用して歐羅巴の正しき新興勢力擡頭を阻まんとしたが故に、獨逸問題は持ちあがつた。自國の爲にのみ歐羅巴諸國をこね廻し、中小邦を使喚し、壓迫し、挑發する英國が背後にあつて、永遠に風波なき大陸のあり得るわけではない。獨逸が獨逸問題で立ち、ポーランドに進撃したのは、英國の歐羅巴支配に對する斷乎たる撃滅の一步であつて、一ポーランド國家の如き問題ではなかつたのである。そこに今次歐洲戦勃發の歴史的必然性をみる事ができる。

アングロ・サクソンの國際權力政治は、人道主義と各國協同の政綱を掲げて來た。看板に偽り必ずしもなしとは言へぬが、アングロ・サクソンの看板程甚しい偽りはない。羊頭を掲げて狗肉も賣らず、非人道、非協同が政治の實體であつた。その悪い臭味が、基督教的假面の下に包まれてゐた間はまだよい、一度膿汁が皮膚の一點を破つた時、列國は嫌でも顯正破邪の闘士として起



ちあがらざるを得なかつたのである。

チャーチルに代つてアトリーは、最近英國の人道主義に關して演説し『英帝國は自治領たる植民地たるをとはず、平等の權利の上に築かれ、協力による親和がある』と述べた。しかし英帝國に於ける平等とは英國人のみの平等であり植民地原住民との混血英國人は第二、第三階級の市民で、たゞロンドンのナイト・クラブの内部でだけ平等の權利が許されてゐる。列車内でも同席は拒否される。海水浴場、宴會でも區別される。上院議員となつた一インド人は、議場に現はれた瞬間一議員に拉致され、更衣室で着替えさせられた後印度へ送り返された。之を眺めて制止する何人もなく、たゞ異民族への冷笑のみを口邊にたたへてゐたといふに至つて、英帝國內の平等の眞相が判明するであらう。『英帝國が植民地原住民を平等に扱ふのは税金を徴収する時のみである。その時こそアングロ・サクソンはむしろ異民族を優位に置く』と一獨逸紙は皮肉つてゐる。

數千の残忍なるユダヤ金權勢力、インチキ投機業者、鑛山、油田の所有者、乃至その大番頭等少數の米英人が之まで列國をいじめてゐたといふ事實に想到すれば、歐洲革新戰爭なる言葉は容易に肯定できやう。窮乏する民族、地政治的に不利な立場にある國家に暴利をむさぼつて物を賣

りつけ、先づ經濟的從屬地位に陥れるのがアングロ・サクソンの國際的統治第一歩である。搾取によつて社會的困難、内外政上の危機が見舞ふころ、アングロ・サクソンの摩手は完全に國の内外に張られて身動きができない。東亞に日本なく、歐阿に獨伊の復興がなかつたとすれば、大東亞戰爭も歐阿戰も起らず、アングロ・サクソンの搾取は愈よ激しく、政治謀略網愈よ密に、世界の海を支配し得る大海軍力と、世界の輸送を籠斷する商船隊と、資源と、黄金によつて列國は名實ともにアングロ・サクソンの統治下に服し、十六億人類の社會的靈息が見舞つたであらう。日獨伊三國起つて金權米英擊碎の火蓋を切つたればこそ、不正にして残忍なる世界支配の本據を衝くことができたのである。

アングロ・サクソンは勿論恐るべき極惡民族であるが、最も痛撃さるべきは戰爭の責任者ルーズヴェルト一黨と、チャーチルをめぐる米英の支配階級であらう。英國の勞働者は必ずしも他國の勞働者以上に恵まれてはゐない。社會保證制度等では歐羅巴各國の方が遙かに優つてさえる。植民地經營や、海上運輸、石油、金屬資源、纖維工業等の國際トラストによつて獲得された老大な富は、そつくりその儘特權階級の懐ろへ入つてしまふ。世界一の富國を誇つたアメリカの



勞働者もまたしかり、肥え太つたものはウールウオース一家、テイーツ一家、モルガン一家等のユダヤ系財閥以下の特権金権階級と、これをめぐる政治家の一族であつた。シカゴ・トリビュン紙の社主で、共和黨の政治家マツコーミック大佐が最近の演説で『紐育程貧富の懸隔甚しき都市はない』と斷じてゐるところをみても、アメリカ下層階級の慘たる社會的窮乏が明白となるのではあるまいか。

平等を口にするアングロ・サクソン兩國家は、自國家内に於ける貧富の差と等しく國際的にも自國の特権を愈よ強化擴大し、他列國を一層窮乏せしめ、世界の富を自由自在に處理してアングロ・サクソン永遠の榮華を基礎づけんとしてゐる。アングロ・サクソンの不當なる榮華は、他民族、他國家の不當なる隸屬と不當な窮乏を意味する。かかる暴慢無禮黙許し得ずとして獨逸が騒起したのは當然であり、歐羅巴諸國が追隨するのも理がある。かくして新秩序戦争たる本質は明白となつて來るのだ。

アングロ・サクソンには人道もない。英國の富は植民地原住民の搾取の上に築かれ、搾取は武力による彈壓の下に遂行される。印度にはベンガルの虐殺がある。エチオピアにはライルの殺戮があ

る。南阿には婦女子二萬人の大量殺入がある。英國膨脹史は血で描かれ、英國植民地には悉く悲愁の原住民がある。阿片戦争は暴利をむさぼり、支那四億のアジア人を骨抜きにするために起された。前大戦後ライン河畔に駐屯する黒人部隊の破廉恥行爲、五十年前の英國政治犯收容所の悲劇、今次大戦では佛領マルチニツク島の飢餓封鎖、米英空軍の老幼婦女子盲爆、ベルギー乳幼児、病者に對する榮養補給の拒否等、アングロ・サクソンの行くところ悉く、他民族の鮮血がぼたりぼたり滴つてゐるではないか。

かくして米英の暴虐は今自国の下に曝され、歐羅巴諸國は今大戦が日獨伊對米英の戦ひに非ずして、不正なる世界支配、世界搾取に對する、邪惡是正戦争たる實體を知つたのである。ヒトラー、ムソリーニ會談に於て、民族的公平、世界財貨の公平な分配、經濟的搾取と武力による脅威より全歐羅巴を防衛し、大陸の文化と、各國民族の生活を昂上せしめ、公平恒久なる平和を打樹てんとする歐洲革新戦争の目標は明確に決定した。歐羅巴のための歐羅巴の資源、大陸のため

の大陸の協同、列國の利益のための團結はかくして進展し、歐羅巴新秩序建設はここに新たなる歐洲革新戦のための一大背景たる色彩を帯びて來た。かくして獨逸會談に續く樞軸參加諸國首腦



部とヒトラー總統の會見は新秩序戦争を裏づけるものとして一層の意義を持つに至つたのである。

スロヴァキアからは大統領チソ博士が總統大本營を訪問し、サナマツト内相、カトロマ國防相も參加した。ハンガリーのホルチー攝政は二日間にわたつて總統と熟議し、之には參謀長スツオムベテリー大將も加はつた。羅馬尼首相アントネスコ元師は今度で八回目の會見であつた。前回は一月十日から二日間で、丁度三ヶ月振りとなる。その内容は勿論窺知すべくもないが、獨逸側からはリツペントロツプ外相、カイテル幕僚長以下獨逸政府首脳部が殆んど出席してゐるところより觀て、極めて重要なものである事は判明する。特に獨逸側の發表が、『歐羅巴の自由獲得戦を最後まで戦ひ抜く』『生存を確保するために國力を盡す』『全般的政治情勢と共同作戦打合せ』等極めて暗示多き表現で會見の内容を報じてゐるところに、樞軸參加國が歐洲革新戦争の眞意義にいかにか徹して來たかを觀ることができやう。

特に注目すべきはノールウェー首相キスリング氏がヒトラー總統と會見、懇談した所にある。ノールウェー軍は一九四〇年春獨逸軍と戦ひ、國王は現に英國にあつて亡命幽靈政權を統裁して

ゐる。獨逸兩國は三年前の敵國であり、ノールウェーはなほ占領地域とも見做し得る。その兩國の最高指導者が歐羅巴の自由のために歐羅巴の運命を決する戦争の眞最中世界環視の中で會見したところに、北歐諸國の歐洲革新戦争に對する自覺の程を窺ひ得る。キスリング首相は一九三〇年、その著『ロアンとわれら』で北歐の原則を説き、赤化の脅威を強調すると共に、繁榮と平和は對獨協同以外にないことを主張してゐる。キスリング首相の率ゐるノールウェー今後の動きは相當重視さるべきものがあらう。

領土の爭奪、資源の抗爭に非ずして、歐阿の戦ひが歐羅巴の自由と平等と繁榮を目指す限り、全歐は一丸となるの外はない。歐洲革新戦争は獨伊によつて口火が切られたが、歐羅巴諸國は漸次その陣營に參じはじめた。單に規模の大小のみに非ずして、その形態、情熱に於て、今次大戦が從來のいかなる戦争とも異つた性格を持つてゐるのは、世界の惡を叩き潰さんとする顯正破邪の戦争なるが故ではあるまいか。



## 第二章 必勝態勢整へる獨逸銃後

### 一、ヒトラ政治十年の結實

ソ聯の第二次冬季反攻戦最も酷烈を極める時、ナチス政權獲得十周年記念日を迎へた事は、獨逸全國民に一層異様な感銘をあたへ、烈々たる勝利への確信が、最も困難なる秋に八千萬民族へと波濤の如く擴がつて行つた。

全獨逸國民は何故に勝利の確信を新たにしたか、それはナチス十年の政治が漸やく實を結んで、開戦以來最大の試練に際し、軍事上、經濟上微動だもせぬ祖國の姿をはつきりと觀たからである。その第一は前大戦と違つて、八千萬ゲルマン民族が完全に一國家の中へ吸収されてゐる事、第二は無限の軍需生産力が獨逸を中心として完成してゐる事、第三は歐羅巴の新秩序建設工作が進捗して、勞働力補給、食糧供給等一點の懸念もなくなつてゐる事等である。しかもかかる國家の重

要問題が、米英佛等の防衛的外交攻勢の只中に進み、未曾有の大戦の最中完成したといふ事實を顧みて、獨逸國民は今更にナチス十年間の施政の成果を讃えてゐる。

歐羅巴新秩序建設の中核となつた獨逸現實の力は、單にナチス政權十年間の施設のみがもたらしたものではない。獨逸にはそれ丈の科學と文化と熱意が傳統的に具はつてゐたのである。しかし何よりも注目すべきは、歐羅巴大陸に於て獨逸人が持つ量的威力があらう。歐羅巴に於ける大國中最大の人口を持つ國はソ聯邦で一億六千六百萬人を包蔵してゐるが、その民族的多様性は純然たる亞細亞人、純粹の歐羅巴人を兩端として、六十民族を混淆してゐるといふ丈でも判明する。世界一海洋帝國を誇るイギリス人も、本國に居住するものは四千七百萬人である。フランス人は四千萬人を僅かに越し、伊太利人も四千三百萬臺に過ぎない。之に反してゲルマン民族は獨逸國を中心として一億に近い大量がその周邊に集まつてゐた。

ビスマルクはゲルマン民族の傳統的分裂を排して、プロシヤの指導下に統一的強力な獨逸國家を六百年振りで歐羅巴のまん中に建設した。之がため小邦相反目、相争鬪した時代は過ぎて、龐大な民族力を集結する經濟的、技術的躍進がはじまり、前大戦勃發前には英國の一大脅威として



華々しい新興獨逸國の躍進は世界の驚異であつた。しかし同じゲルマン民族たる奥太利人は別個に帝國を持ち、未だ獨逸國は眞の實力を發揮する事ができなかった。獨逸兩國間には國際的の同盟があり、事實前世界大戰では同一戰線に戦ひ、兩帝國の王朝は共に亡びて行つたが、なほ眞の民族的團結は行はれてゐなかつた。しかしナチスは數千年來の獨逸史に、はじめて民族的大獨逸國家を完成した。一九三五年ザール地方が先づ獨逸國家へ復歸、一九三八年には獨逸合邦が成つた。ズデーチン地方、メーメル、ダンチヒ、上部シユレジア、ワルテガウ、アルザス・ロートリッゲン等、ゲルマン民族の居住する周邊の地域は、悉く獨逸國の中へ吸集された。

かくして大獨逸國は僅々十年間に生れたのである。一九三三年獨逸の國土全面積は四十七萬餘平方キロ、人口は六千七百七十萬人であつたが、今日は百萬平方キロに一億三千萬人の住民がある。その内八千百萬乃至八千二百萬人は純粹の獨逸人となつた。人口は倍加し、國土は四倍となつた。しかも新たな國土は豐饒な可耕地であり、集結された民族は科學的、文化的に歐大陸中最も高い水準を持ち、勤勉、努力もまた一頭地を抜いてゐる。更に一絲紊れぬヒトラー總統の統率の下米英撃滅に決死の意氣をもつて奮進してゐるのである。全獨逸國民はそこに勝利への確信を得てゐるのだ。

八千二百萬人の獨逸人が、一國家の中へ吸集されて、大陸に於ける最大の單一民族國家を結成しても、未だ歐羅巴新秩序建設の原動力となる事はできない。米英佛等の舊秩序國家は、既成武力を擁して壓迫を加へ、ヴェルサイユ條約は獨逸を殆んど軍備なき國家に追ひ込んでゐたからである。しかしナチス政權は今日に備へて着々と軍需生産力を蓄へ、軍事的組織を整へてゐた。獨逸及びその周邊にあるゲルマン民族が悉く結集された時、忽ち一大強國、一大民族國家たる素地がすでにナチスの統治によつて準備されてゐたのである。

一九三三年ヒトラー政權が樹立された時、獨逸は周邊のいかなる小國の攻撃をも防ぐ軍備がなつた。陸軍十萬、海軍は僅かに一萬五千二百、合計十一萬五千二百名が、ヴェルサイユ條約で押しつけられた獨逸國の全兵員であつた。重砲、戰車、飛行機、大型戰艦、潜水艦は所有を禁ぜられ、國境に堡壘一つの構築も許されてはゐない。今日全歐羅巴の敵性國家を一掃し、米英と北阿に格闘し、不死身ソ聯に喰込んでゐる獨逸陸海空三軍の實力を觀る時、その歩める道がいかに荊棘に満ちてゐたかを知ると同時に、全獨逸國民がいかに苦闘を超えて伸びて來たかが判るであらう。



一九三五年、ヒトラー總統は一般徴兵義務制を再施行し、一九三六年には兵役義務期間を一ケ年から二ケ年に延長した。壯年男子の短期軍事教練、豫備兵の再召集、豫後備將校團の新組織、兵役前後期間の軍事訓練を目的とするヒトラ青少年團及び突撃隊の組織等、國軍の根本は着々と成つて行つた。

一方軍需工業も地歩を固めつつあつたのだ。自動車は裕福階級の奢侈品に過ぎなかつた時、アドルフ・ヒトラはナチス運動のために一臺の自動車を購入、之に騎士を乗せて國內至る所に出沒、失意の獨逸人にナチス理論を吹込んだ。そこに黨と發動機結合の發端がある。一九三三年新政權が發足した時、全國の機動化促進運動が開始された。自動車の免税がその第一歩、相つゞ自動車展覽會もその政策の現はれである。自動車工業、發動機工業、航空機工業は飛躍的に擴大されて行つた。一九三二年フランスは獨逸の六倍の自動車を持つてゐたが、一九三九年には獨逸が二對一と引離してゐる。一九一四年獨逸は六萬五千臺の自動車しか持つてゐなかつたが、一九三九年には三百萬臺に達し、外に百萬臺のオートバイがあつた。前大戰勃發當時と比較にならぬ機動化が、獨逸國を強靱な國家に育てあげてゐたのである。

製作される自動車は事ある場合軍用となるべき事を考慮して、堅牢、頑健を第一とした。急速に大量を生産するために、自動車の單純化がはじまつた。貨物自動車の型は百十三種から十九種へ、オートバイは百五十から卅へ、一般乗用車は五十三種から三十種へ、小型自動車も十分の一の二種へ規格を統一されてゐる。之がため自動車工場は型を絶えず變更する煩雜を避けて、少數の型を間斷なく大量生産できるやうになつた。部分品工場は螺旋や凡ゆる部分品を特別の工程で生産する必要がなく、特定の部分品を大量に生めばよくなつた。全國自動車道路の大規模な計畫も、機動計畫と並行して着手され、ナチス操縦士隊は全國二十二校の自動車學校で、毎年約五萬人の運轉手を、理論的、實際的に教育すると共に、ナチス魂を吹込んで世の中へ送つてゐる。青少年のためにはヒットラー・ユーゲント自動車教習所まで設置されたのである。

發動機工業は單に自動車を獨逸輸出品の重要なものの一つとした丈でなく、航空機工業の急速な擴大の機縁ともなつた。獨逸國力の機動化が進んだ時、周邊のゲルマン民族は刻々と獨逸へ集結されてゐた。兵器彈藥もまた八千二百萬獨逸人を一個の戰鬥力に纏める丈揃つてゐたのである。フランス、ユーゴ、ギリシヤ等が鎧袖一觸の運命に陥つたのは、獨逸の軍事工業力と、人



的資源より觀て當然の事と言はねばならぬ。そして歐羅巴新秩序建設の發足へ展開したのである。

自由主義經濟を逸早く清算したところにも、獨逸國民の勝利に對する確信の因由の一つがある。『經濟は宿命なり』といふ、ラウテナウ式敗北主義を一蹴して、一九三三年獨逸は新經濟理念の實踐に乗り出した。ナチス政權樹立以前の獨逸經濟界は、ユダヤ大資本家に牛耳られてゐた。一國民の民族的生命よりも經濟法則を重しとし、經濟力學を動かす力は獨逸にないといふ暗鬱な宿命を排撃して『經濟は國民及び民族の從僕であり、援助者たるべきもの』といふ理論が即刻實行に移された。獨逸經濟界は利得の觀念をここに一掃して、奉仕と犠牲の原理を以て起ちあがつたのである。そこから獨逸今日の軍事的、政治的、經濟的實力が培養された。

自由主義經濟は、廉價に輸入できる物資を國內で生産しないが、獨逸は先づ自國原料資源の開發を第一の目標とした。錫とゴムにアメリカが今如何に悩んでゐるかを觀る時、この兩資源に於て遙かに恵まれぬ獨逸が、代用資源で立派に賄つてゐる事は、明らかにナチス十ヶ年の施政の勝利である。最短期間の失業征伐、農業生産の向上も見逃し得ぬ大成果であつた。一九三八年オー

スタリー、ズデーデン地方、保護領等が獨逸の手に還つた時、五ヶ年間のナチス政治が如何に輝やける實を結んでゐたかを證明した。獨逸經濟界は忽ちにして、新たな領土との經濟的交流を遂げた。現に行はれてゐる全般的戰爭經濟は、ナチス政權の樹立以後行はれつつあつた組織を、より精巧に、一寸手を加へれば足りた。米國が一九四一年から、英國が一九三九年から、曲折を経て經濟機構の戰時改變を行つたに比して、すくなくも七年間の強みがある。

國民經濟上必須の原料と食糧は、戰時中外國よりの輸入なくして獨逸が自立できるといふ目標めざして四ヶ年計畫が生れた。鐵、ゴム、石油、纖維原料、食糧の準備が完成した時、國際財貨交易がはじまつた。之に對して英國が横槍を入れた事は更めて説くまでもない。歐羅巴諸國民は必要な原料を英國を通じて海外より輸入してゐたので、英國は何時でも歐羅巴諸國の海外貿易を中斷し、艦隊の援助を以ていかなる國家の死命も制壓する事ができた。そこに自由貿易時代、英國の歐羅巴諸國に對する優越的地歩があつた。獨逸はその桎梏を破るため、自國內の自立經濟機構を確立すると共に、南東歐諸國との財貨交易に努めた。過剩農産物は英米の勝手に左右する世界市價より高く買取り、工業生産物は安く供給した。之がため農業恐慌は除去され、經濟は活潑



化し、一九三八年、ブルガリヤ、ユーゴスラヴィア兩國の貿易は、その七割五分まで獨逸に振り向けられ、トルコの如きも一割三分から五割に増大してゐる。

この間英國は獨逸及歐大陸諸國間の經濟協定を邪魔し、歐大陸を永遠に搾取するために、東南歐を政治的に切離さんとまで企てたが、歐羅巴新秩序建設の地中の發芽は順調に進み、歐洲諸民族の健全な分業に歩一歩進んで行つた。そして歐洲戰の勃發、樞軸全歐掌握を契機として、密接な經濟協力は、單一共榮圏の實現へと擴大されたのである。獨逸經濟協約を觀れば、この間の消息は一目瞭然たるものがある。即ち、歐大陸の一つの分業負擔國として、ルーマニアの農業は再編成され、小麥面積の二割、玉蜀黍栽培地の一割二分は、麻、棉花、菜種、飼料植物等の栽培地に變更され、獨逸は之に對し、農業機械を供給すると同時に、工業國ルーマニアの建設に協力してゐる。ナチス政權樹立以來十ヶ年間に、獨逸は自國の自立經濟、自立軍備を整へた後、更に歐大陸の自立經濟、自立軍備を確立して行つた。ナチス理論は今や單に獨逸一國に光明を投げたのみでなく、全歐大陸の分業的産業改編は獨逸の國力を昂め、樞軸の實力を不動のものとした。更に東部占領地域の驚異的開發によつて歐大陸は完全な自立性を得てゐる。そこにも獨逸國民の勝利への確信が湧きあがるのである。

## 二、勞務總動員が生み出す戦力

ザウケル勞務配置總監はヒトラー總統の特別依囑に基き「國防任務に對する男女申告に關する」諸法案を一月廿七日發布した。之によつて十六歳以上六十五歳までの男子、十七歳以上四十七歳までの女子は、原則として全部居住地所管の勞務局に申告して、榮光ある勞務召集の日を待つ事となつた。かくして全獨逸國民は、戰鬥地區にあるものと、本國にあるものを問はず、悉く戰爭に直接、參加する、そこに獨逸が最後の勝利をめざして、如何に強烈な戰意と準備を持つかを觀得すると共に、今時大戰の様相漸やく深刻にして、米英を擊碎するまで、全樞軸の何人も、戰鬥に關係なき生活を許されない段階に達してゐる事を知る事ができる。

勞務總動員は獨逸がはじめてではない。英ソ兩國ではとつきの昔に實行されてゐる。ソ聯は數年前から、何らの假籍なく全國民を徵用してゐるし、英國も勞務動員統制を設けて、極端な婦人、少年の酷使を續けて來た。開戰以來すでに、二千萬人の兵員を喪失し、しかも現に七、八百萬の



將兵に、兵器、彈藥を供給しつつあるソ聯軍需工業の運轉が、老幼婦女子の参加なくして遂行され得る譯はなく、英國も樞軸潛水艦の封鎖に遭つて物資需給極度に窮迫し、樞軸の上陸作戰に備へて二百萬の防衛軍を本土に留め、廣大な植民地に兵員を派し、青壯年を軍務にとられた以上、軍需工業の勞働力と、生活必需品の生産には、老幼婦女の手を極端に籍らねばならない。近代消耗戰は文字通りの同民總力を結集せずして、一日の戰線維持も困難なのである。

英ソに比して獨逸は遙かに大量の勞務を必要とする。戰線は勿論青壯年で固めねばならぬ。廣大な東部占領地域の再組織、復興、開發が要する人力も大きい。進みつつある歐羅巴新秩序建設工作の指導も獨逸人が行はねばならぬ。更にその軍需工業力が歐阿樞軸軍の物的支柱である限り、老大な勞働力を必要とするは當然である。しかし獨逸は一國で戰つてゐるのではなく、歐羅巴大陸といふ背景がある。盟邦伊太利が先づ協力し、フランスの勞働力も抽出された。白、蘭、丁、諸諸國の青少年も積極的に参加してゐる。東部占領地域の人的資源も流れ込んだ。外國人勞働力は單に獨逸本國で消化されてゐるばかりでなく、歐大陸諸國の工業力は、その國內の勞働力を消化して獨逸の軍事生産力を助けてゐる。歐羅巴大陸の雄大な建設工作、未曾の消耗戰が樞軸によ

つて同時に行はれてゐながら、今日まで獨逸本國の勞務總動員が延期されてゐたのは、かかる全歐大陸的背景があつたからである。そして今一つ獨逸の勞働力配置がナチス政權樹立以來、極めて合理的に行はれてゐた事も見逃せぬところであらう。

一九三三年、登録失業勞働者は六百萬人に上つてゐた。之に不登録者、棒給生活者を加へると、獨逸本國で遊んでゐた者は七百萬人を越え、家族を含して全國民の二割五分が失業による困窮にあえいでゐた。しかしアドルフ・ヒトラーの失業防止策によつて翌一九三四年の失業者は三分の一の二百廿萬人に減り、戰爭勃發の一九三九年には、僅かに六萬三千人を數へるのみであつた。そして一九三三年ナチス政權樹立當時、千三百萬人の就業者を記録した獨逸は、開戰當時五割増の二千百四十萬人を持つてゐたのである。米英佛をはじめ、巨大な資本力を持つ諸國が、いづれも老大な失業者を抱いてゐた時、獨逸は全人的資源を極めて合理的に、適性を考慮して、着々と重要な部門に配し、臨戰體形を整へて行つた。

英國では少年勞働力の苛酷な驅使が問題となり、勞働者の合法的休業が傳へられてゐる時、勞務總動員の聲を聽いて、全獨逸の老、少年と婦女子は、銃後の戦ひに参加し得る榮光を得たもの



として歡聲を以て迎へてゐる。其處に獨逸があくまで合理的、あくまで科學的に、歩一步勞務を戦力の増強に徴用する、無理のない政策への、無限の信頼があるからでもある。

一九三一年までに獨逸は六百八十億マークを支拂つてなほ、尨大な賠償金を支拂ふ義務を残してゐた。アメリカの投資額三十一億弗を筆頭に、對外債務もまた大きい。かかる破局的經濟状態の中から、今日の獨逸を建設するためには、一人の徒食者も存在する事は許されなかつた。勞働力配分に關する法令は一九三四年すでに發令され、一九三五年には勞働仲介、職業相談、政治要員仲介も、勞働大臣の下に一括統制され、勞働手帳制が生れ、勞務者全部の登録が實現されたのである。

一九三六年秋、第二次四ヶ年計畫樹立に際し、愈よ勞働動員の形態が成つた。先づ鐵、金屬、建築工業勞務員の増加を圖るため、大工場は専門勞働者數に應じて一定數の見習工を採用する義務を課せられ、重要工業勞務者の就職先變更に許可制を採つた。豫備勞働力を第一線に出すため行商人も制限され、國民學校、中等學校、専門學校卒業生の申請規定が現はれ、青少年は續重要産業部門に繰り込まれた。年長者の徒食を排除するため、官民を問はず十名以上の人を使つて

ゐるところは、必ず四十歳以上の者を備はねばならぬ事になつた。廿五歳以上の休閑女子勞働力は、一ヶ年間勞働手帳によつて農林業に従事しなければ、一般女子勞務員となる事ができぬ規定も生れた。農業及家事上の女子勞働力不足は之で緩和されたのである。

青壯年は勿論、年長者、婦人まで、疲弊のどん底から立ち上るためには、全部働かねばならぬといふ勞務動員は、歐洲戰勃發の三年前から實行されてゐた。戰爭第四年目となつた今日、勞務總動員が實行されたとして當り前の事である。一九三八年には勤勞奉仕の義務規定によつて重要國策上の諸課題が次々と解決され、ジグフリード要塞線も、四十萬人を超える勤勞奉仕隊によつて構築され、戰爭第一年の義務勞働は百萬人以上と稱せられてゐる。十萬の海陸軍を、一千萬大軍に擴大し、歐羅巴第一の發動機文明を建設するために、獨逸は十年間かかる苦闘を経て來たのである。そして青壯年が續々と戦線へ赴くに至つて、重要産業部門の空席は、不休産業従業員、婦人、外國人勞働者で埋められた。

工業の決戦體勢轉換は非常な成功を收めて一九四二年末完了した。その一年前三千項目にわたる製造禁止命令が發せられてゐたのであるが、今後更に廣範圍に及ぶ消費資材の生産が停止され



る運命にある。流行品生産會社が重量爆弾を作り、玩具工場が爆弾の翼や飛行機の部分品を、エスカレーター専門會社はプロペラー製作へと轉換された。チヨコレート大工場は火薬工場に、ズボンの鉤製作所は導火線製作所へ、従來の機械と、勞務員の技術を最高度に活用して、獨逸の大軍需品生産力は生れたのである。シュペーア軍需相は獨逸勞働會議所ナチス執政十周年祝賀式場「重要軍需産業部門の生産力は、一九四一年末より、四二年末の一年間に、十倍乃至二十倍に増強された。新工場の完成、現存工場の擴張、新製作機械の据付、改善と合理化によつて、一九四三年中に獨逸の工業力は無限大へ伸びるであらう」と述べてゐる。

轉換すべき機械と人が轉換され、更に新しき工場が簇生する以上、勞働者は新たな方面から獲得されなければならぬ。今次勞務總動員令は、かくして料亭、手工業、ホテル、中小商店から、戦争遂行に必要な勞働力を軍需工業へ吸収すると共に、女子の勞働力も樞軸軍の支柱として、軍需産業の第二線に登場する事となつた。全歐の勞働力と資源を自由に驅使し、東部占領地域に食糧を確保した獨逸は、今や全國民の總勞働力を結集して、決戦體形を整へたといふ事ができる。

中小商店は開戦以來相當數減少してゐた。商品の不足で平常時の如き取引は行ひ得べくもないからである。今次小賣業者の數制限は、單に勞働力を戰時必需方面に抽出するばかりでなく、商用旅行の激減で旅客運輸にも好影響をもたらす、料亭、ホテルの制限もまた同様である。私立銀行は既に二百七十行閉鎖命令が下つた。保險代理業も、一九三八年契約高三千萬マーク以上、一九四二年四千五百萬マークに達してゐないものは悉く閉鎖される。妊娠中の母親、學齡前の子供、もしくは十四歳以下の子供二人と同居してゐない婦人も申告を必要とする。かくして戦争第四年目、獨逸は尤大な勞働豫備軍を新たに掌握した。

今次勞務總動員によつて期待されるものは婦人の勞働力であらう。開戦以來三ヶ年半、獨逸婦人は勇躍困難な男子の仕事を引き継いで來た。指導者の勞苦は勿論、働く婦人の苦勞も並大抵ではない。ただ報國の熱意と、崇高な戦争目的の理解によつて、従來女性に不適當と見られてゐた戰場へもどしどし進んで行つた。そして今や獨逸女性は、壹々たる重工業戦士としての資格を獲得したのである。女性は手先が器用で、責任感が強く、呑み込みが早い。それに天性の忍耐力は男子を凌いでゐる。力を必要とする仕事は勿論男子でなければならぬが、檢定作業、飛行機の細密



部分、配線の取付等では男性よりも女性の方がはるかに能率をあげ、成績もよい事が判つた。

金屬加工工場の報告によると、簡易な穿孔作業、塗油、製品點檢等では男子に匹敵し、ニス塗、り、包装、スライス盤、旋盤作業は、二部交替制によつて立派に軍需工業勞務員としての責任を果してゐる。事務方面への女性の進出は一層目覚ましく、戦前からタイピスト、記帳係として能率をあげて來たが、男子の戦線進出の跡を埋めて、會計係等の重要な位置に就きはじめた。各銀行の當座預金係や爲替係は、すでに女性の最も格好な働き場と認められてゐる。女性が如何なる方面に適當し、どの程度の力を持つてゐるかは三ヶ年半の経験で證明済みであるとすれば、老大な婦人の勞働力は、今後無理なく、科學的に、全獨逸の重要産業へ配分されるであらう。

七百萬失業者を抱いた一九三三年、豫備勞働力を次々に吐き出してつひに女性も含む勤勞動員にまで展開した獨逸十年間の足取りを觀る時、ナチス政權樹立以來の獨逸がいかに急速に工業力を擴大して行つたかを知る事ができる。特に今次大戰勃發以來、老大な資源を歐大陸に獲得し、東部占領地域開發に多大な指導者を必要とし、ソ聯が失つた丈の南ソの物資を獲得して以來、これが運営と消化にいかにも獨逸の工業力が擴大また擴大されたかを知る事ができるのである。しか

も全歐羅巴各國より老大な勞働力を輸入しながら、なほ勞務總動員を敢行するところに、獨逸の必勝の陣立てと、測り知れぬ工業力の厚味を知る事ができる。

全獨逸國民は、直接銃をとるか、しからざれば銃を作り、食糧を生産する者ばかりとなつた。戦争と密接な關係を持たぬ一切の職業と休閒者は抹殺されたのである。既成觀念の勝敗とは全然違つて、今次戰こそは亡びた民族と、存續する民族によつて結末を告げるといふヒトラー總統の決意は、つひに勞務總動員を決意せしめたと觀なければならぬ。

### 三、軍需勞働者としての女性の強み

勞務總動員令は一九四三年を期して、大量の休閒女性を軍需工業力の支柱としたが、歐羅巴戰勃發當時より一千万動員を敢行した獨逸は、すでに一九四〇年から大量の女性勞働者を持つてゐたのである。

『今や男子の困難な勞働を引受け、仕事への愛情と愛國の熱情を捧げて新しい職業にいそしみ、幾多の個所で男子の代りを勤めてゐる獨逸女性に對し、余は心から感謝する』とはヒトラー總統



の言葉である。獨逸婦人は仕事が好きだ。犠牲的精神と繊細な愛情を以ていかなる仕事にも對し得るのが獨逸女性の傳統的美徳であつた。女性は家庭内で煩はしい仕事を持つてゐる。拭き掃除から煮炊き、育児から家具の整理等その仕事の分野は單調で、煩鎖で、見栄えのせぬ事ばかりである。女性はかくして忍耐力を養はれ、常に真心といつくしみの氣持を持つやうな性質を植へつけられてゐる。その忍耐力から戦時下獨逸の工業部門で漸次重要な勞働力として女性が注目されて來たのである。

女性が本來の最も美しい職務たる妻及び母とは一見して遙かに縁が遠いやうに思はれる工場の一員となる事は、工場もまた忍耐力と仕事へのいつくしみを必要とするものである點を考へれば簡單になつて居るであらう。獨逸婦人はその健康と忍耐力によつて他國では男子でなければ困難だと思はれてゐるやうな職務を久しい前から立派にやつてのけてゐるが。工場の中にはどうしても女手をかりねばならず、又は婦人を基礎としなければ立行かぬものも相當ある。即ち食糧罐詰工場、衣料系統工業、煙草、人造纖維、無数の加工工業等が之である。他の生産部門でも婦人を基礎勞働力としないだけで、どうしても女性を必要とする部分的仕事がある。細心綿密、形や指

先の敏感さで男子は女性にかなはない。非常に細かい仕事は。持久力と忍耐力を必要とし、女性の勞働の方がはるかに適してゐるのである。

しかし戦争は女性に新しい職業の分野を開拓した。戦前一人の婦人もあつた工場へも、戦争は全獨逸のあらゆる勞働力を必要とするが故に女性は喜んで進出しはじめたのである。之等の工場は一人の婦人も使つた経験がなく、婦人にとつても全然新しい職業である。教へる者も危懼をもつて臨み、教はるものも第一歩から始めた。そこには男女の生理的相違、腕力の相違、智能の相違等、凡ゆるものが異つてゐて、使ふ者使はれる者ともある程度の失敗を覺悟したのであつた。しかし結果は政府の豫想を完全に突破する好成績で、みごと工場の最高能率を發揮させた。

男子が前線で戦ふ以上、戦後工場の勞働力の間隙を埋めるものは婦人以外にないとは獨逸女性の覺悟であつた。しかしそれは理論であつて果してうまく行くかどうかは疑問だつたのである。だが獨逸女性は開戦間もなく難問を克服して、残存男子まで戦場へ送り得るほどに國內工業力確保のために素晴らしい成果をおさめたのである。



一千万の兵士が消耗する兵器弾薬は莫大なるものである。飛行機、タンク、大砲等近代兵器はそれが精密なものであればある程長期間の使用に耐へない。戦ひは全生産部門に無限の生産力を要求する。しかも北歐に作戦し、西部に頑敵を一蹴し、不死身のソ聯を押しまくるために獨逸が消耗する物資は想像に絶する巨大なるものである。しかも之等前線の勇士に一分の不安もあたへず、無限に物資を送り出すために働く事こそ、獨逸女性最高の榮譽であるといふのが働く婦人の確固たる信念であつた。

軍需工場には多數の女性が悠々と、微笑さへ浮べて働いてゐる。發動機工場、飛行機工場、彈藥工場には前線にある息子のため、夫のため、兄のため武器を鍛へてゐる女性が満ち満ちてゐる。旋盤工もあれば研磨工もある。女性では到底駄目だといはれた仕事まで、獨逸技術者の綿密な仕事の分類と、労働工程の機械化によつて苦もなくやり遂げる様になつた。特に大量生産組織は製造段階の區分を多くし、部分的作業で習熟に便となつてゐる。更に仕事が部分的であるだけに仕上がり早く、従つて單調になる。獨逸女性の綿密な観察と忍耐力は大量生産組織で完全に女性労働力の眞價を發揮し、男子に充分とつて代る能率をあげはじめた。

祖國愛と犠牲的精神が獨逸女性を軍需工場へ吸収した。進んで職場には就いて見たものの、今迄握つた事もない機械工具に手を觸れて最初は不安な顔をしてゐたが、機器の取扱ひ方を覚え、呼吸を知り、完全な製品を出す様になつて楽しく労働に身を入れるやうになつた。全獨逸軍需工場の技師長や監督は今や女性の仕事振りに絶大の讃辭を捧げてゐる。更に今まで氣づかれなかつたある種の工業行程では、女性の注意深さと良心的な作業が男子よりも遙かに立派な成績をあげてゐる事が判つた。樞軸勝利の曉前線から多數の兵士が工場へ復歸しても、若干の製作部門は現在の儘女性に残されるのではないかと觀られる様になつた。否數種の工場では戦後の世界新秩序建設事業の大なるを豫想し、男子労働力が過剰を見る事は、當分あり得ないと、引續き婦人労働力の使用を決定してゐる。

大量生産組織は仕事を單調にする代り、機械が女性の腕力の不足を補つて行く。仕事の單調さは婦人の忍耐力で征服する。忍耐力は婦人が天性有してゐるもので、必ずしも戦争に勝つためといふ様な確固たる目的あつて生れたものではないが、祖國の危急といふ現實の大問題が獨逸婦人を一層自覺せしめた事も事實である。流水作業の一部分で、あくまでも眞剣に、愛國の熱情を胸



に疊み辛棒強く作業する女性の姿を見たものは、ヒトラー總統ならずともいづれも熱い感謝の念を捧げずにはゐられないであらう。

如何に忍耐強い女性でも限度がある。故に獨逸は勞働する婦人達が愉快に作業し一層能率を昂める様精神的、肉體的に特別の保護を加へてゐる。この福利施設こそナチスが特に重要視し、劃期的に行つてゐる所である。仕事の美意識涵養、休息時間、自由時間の設定、休養と體育、社宅の建設、託兒所による子供の保護等、今や働く婦人と切放し得ない密接な連關を持つ様になつた。

醫學的検討を経て設定された休養と體育時間によつて、働く獨逸婦人は一人も健康を害してゐない。託兒所の完備は勞働と母との二つの仕事を支障なからしめ、充分行届いた之等の施設によつて婦人は歡喜しつつ生産能率を上げてゐる。獨逸政府の厚生政策は着々と進捗し、遠大な計畫は一步一步實現してゐるが、働く婦人に對しては特に保護指導を厚くするために、勞働婦人厚生官(女子)が設けられ。各工場には女子世話係が女性勞働者の福利増進のため専任となつてゐる。明るさと日光、働く喜びと快活さをあたへ、できる限り臺所仕事や家族の世話の負擔を軽くす

る事こそ女性勞働者の能力を増大せしめる前提條件である。勞働省婦人局は時宜に適した試みとして働く婦人の住宅建設計畫を着々實行してゐる。之は若い獨身婦人の希望に應じて、快適な住居を提供し、楽しい生活を營まさうといふ目標を持ち、今までの單なる『眠り場所』たる宿泊所の殺風景な朝夕とは雲泥の差で、本當に落ちついて休養と修養と、明日の勞働への力を蓄積し得る住居を提供しやうといふのである。工場が大となり、仕事が單調となればなる程樂しき住居が必要となる。今や獨逸の大軍需工業地帯には續々働く婦人の樂しき家が作られてゐるのだ。

働く婦人は必ずしも生活の足しとして金を得るのを目的にしてゐるものばかりではない。夫を戦線に送つた妻があり、戦前多數の召使ひにかしづかれた良家の子女もある。國家が婦人の勞動力まで要求した時、箱入り娘は決然立ちあがつて軍需工場の轟音の中へ挺身してゐるのである。獨逸婦人は扶けあふ、多數の令嬢は子供の多い都會や田舎の主婦を扶け、隣組精神は全獨逸の隅々まで行きわたり。戦争は街々村々に和やかな空氣を注入したかの觀を呈してゐる。働く婦人は必ずしも工場にばかり居る譯ではなく。婦人速記者、タイピスト、實驗室の助手、男子の仕事までする看護婦、急行列車や電車の車掌があり、郵便局には集配手や、電氣自動車で小包を運搬し



てゐる女もある。空の勇士のために落下傘や救命チョッキを縫ふ婦人もあれば、彈丸に火薬を詰める一見危険な作業を平然とやつてのける者もある。發動機や飛行機の部分品を立派に造りあげる女性熟練工まで現はれはじめた。

クレーンを操る女を見ても獨逸ではすこしも異とするに足らない。國家の必要とあらばいかなる方面にも進出して男子に代り得るのが獨逸女性である。前大戰後苦難の月日が續き、小屋には一頭の家畜もない深刻な食糧難に陥つた時、獨逸婦人は男子と共に荒れ果てた耕地に鋤を入れて獨逸民族の生存を確保した。獨逸國防軍は前大戰の食糧難に鑑みて、農業生産力の維持に萬全の手段を盡してゐる。かくして田園もまた多數男子を戦線に送り、その勞力補充を女性に求めてゐる。しかしてこゝにも戦前に比して一步も譲らぬ生産力が働らく獨逸婦人によつて保たれてゐるのだ。

## 第四部 喰違ふ米英ソの戦争目標



## 第一章 米英の甘口に乗らぬソ聯

### 一、アングロ・サクソンへ一脈の不僞

米英とソ聯には戦争目的に喰違ひがあるとは常に論ぜられたところであつた。ソ聯が東部戦線で獨逸軍と戦ひ、イギリスがリビヤ、エチプトで樞軸軍と角逐、米國が太平洋方面で日本軍と對してゐる間はそれでもよかつたが、西亞に米英ソ三軍が接觸し、地中海に米英が同一戦線に立つに至つて、漸やく目標の齟齬が表面化し、反樞軸側の歩は必ずしも完全に揃つてゐない。

カサブランカ會談第一の失敗として傳へられるところは、スターリンソ聯首相の参加拒否であつた。東部戦線は嚴冬に入るに隨つて凍結どころか逆に熾烈化の傾向を辿り、之が總指揮にあたるスターリン首相が、本國を離れ得ないといふのは確かに理由のある所であるが、若しカサブランカ會談に對して参加する意向さえあれば、必ずしもスターリン首相が直接参加しなくとも、モ

ロトフ外相を代理として派遣する事もできる。米國が元首ルーズヴェルトをはじめ、戦争の樞機を握る文武官八名、英國が首相チャーチルの外、四大將を派してゐる時、ソ聯が一名の代表も送つてゐないところに、カサブランカ會談の茶番劇的臭味と、米英對ソ聯の紐帶の側面を觀る事ができた。

米英兩國が、いかにソ聯側の参加を希望してゐたかは會談終了後アメリカ政府が『スターリン議長と會見するために、會議開催地を東方に選ぶ用意もあつた』と告白してゐる點からでも判明する。米英は三國勢力の渦心にあたる。イラン國首都テヘラン、もしくはパレスチナでも構はないから、是非スターリン首相に顔を出して貰ひたかつたのである。米國政府はカサブランカ會談に於て『一九四三年の作戰計畫について意見の一致をみた』と發表してゐるが、ソ聯軍なくして作戰は樹立しやうもないのだ。歐羅巴大陸の樞軸軍を一手に引受けてゐるのはソ聯軍である、一千萬に近い樞軸軍の矢面に立ち、とに角雪將軍の利ありとは言へ、當時獨逸軍に反撃の實力ある事を示してゐたのは、スターリン首相の率ゐる赤軍あるのみであつた。米英軍は僅少な獨伊聯合軍に北阿で手古摺つてゐた。ルーズヴェルトとチャーチルの會談が百萬遍の攻勢を呼號しても影



が薄いとすれば、スターリン首相の参加は絶対に必要となる。

しかしソ聯はおいそれと、米英の策に乗る程お人好しではない。米英の魂膽はソ聯をアングロサクソンの堡壘として、その人的、物的消耗によつて獨伊兩國をも消耗せしめんとするにある。樞軸の攻撃が威力を示し、ソ聯抗戦力の前途に暗色が濃くなる時、米英陣営には俄かに援ソ論が擡頭するのを例とする反面、ソ聯軍の抵抗が意外に強い時、果然反共産主義的言説が横行する。資本主義の頂點を行く米英と、共産主義國ソ聯とは、その根底に於て相容れないものがある。ソ聯が獨伊を消耗する事は結構だが、赤軍が勝つことは絶対に避けねばならぬ。

ルーズヴェルトとチャーチルは、スターリン首相と會見して抗戦を激勵すると共に、歐羅巴の戦後計畫に關しても、ソ聯の過大な要求を今から封じて置かうといふ下心があつたと観なければならぬ。之に對してスターリン首相が、戦後の自由を確保するために、のつ引きならぬ言質をとられる危険のある、老獪チャーチルとルーズヴェルトとの會談を拒んだのは當然と言へるのではあるまいか。

米英とソ聯の間には一脈の不信が存在する。米英は、對ソ無制限援助を約してゐるが、その一つも實行されてゐない。一九四二年夏獨逸軍の猛攻を支へかね、南方戦線に敗退を餘儀なくされた時、ソ聯は歐羅巴大陸に對する第二戦線の速時展開を要求し、米英もまた一九四二年中に實行を約して果さず、わづかに謀略によつて佛國の反逆者と手を握り、北阿侵略を行つたのである。ソ聯は之によつて軍事的に何等の恩恵に浴さず、東方に對する樞軸軍の重壓は微動もしてはゐない。

米英はソ聯に武器、彈藥、軍需物資食糧の送附を約したが、これもまた完全には實行されてゐない。一九四一年春頃の東部戦線には、ある程度の米國製戦車があつたが、第二次冬季作戦では全部自國製の戦車を使用してゐるといふ事實は、ヴォルガ河を遮斷され、北氷洋航路を封ぜられたといふ輸送上の問題があるとしても、米英に援ソの眞剣な意圖のなかつた事を證明すると觀てよからう。コーカサスの危機急迫して、イラン駐屯赤軍が北上を餘儀なくされた時、その後へ流れ込んだのは米英兩軍であつた。すでに海空陸三軍の基地提供に同意してゐるイランに對し、最近ソ聯が新たな外交攻勢に出てゐるといふ報道も、ソ聯の微妙な心理を反映するものである。イランの食糧危機は極めて重大なものがあつた、首都テヘランに暴動の續發が傳へられてゐる時、



その責任は英國にありといふソ聯側の報道は、米英對ソ聯關係の複雑さを示すものであらう。

しかし複雑な對立は必ずしも米英對ソ聯の間丈ではない同じアングロ・サクソンの血を引く米英兩國の關係も、微妙なものがある。カサプランカ會談はド・コール派とジロー派の反目調整をその一つの目的としてゐるが、之もつひに失敗に歸したと傳へられてゐる。ルーズヴェルトが力なきものに對していかに威力を示すかは、カサプランカへの往復の途中、リベリヤ國の大統領エドワード・バークレトを呼びつけ、南米の雄邦ブラジルのヴァルガス大統領と、ナタールに會した丈でも肯ける。英國の捨て扶持で殘燭を守るド・ゴールや、アイゼンハウアーのお蔭で反逆政權の首班に就き得たジローの如きはルーズヴェルトの一喝で縮みあがるはずなのである。その無力な兩派の抗爭がチャーチルとの二人がかりでも解決し得ないのは、ド・ゴールの背後にイギリス、ジローの後盾にアメリカが存在するからである。

國外旅行する大統領は早く死ぬといふ迷信のあるアメリカから、ルーズヴェルトが遙に大西洋を越えてモロッコに渡つたのは、ルーズヴェルトがすでに佛領北亞を自國の領土とでも感違ひしてゐるのではないかと皮肉つた獨逸の一紙がある。地名カサプランカには白い家といふ意味があ

る。白聖館の主が、白聖館の延長として北阿の白い家へ渡つたと、之も同じく、一獨逸紙は皮肉つた。事實チャーチルに對するルーズヴェルトの態度は、モロッコの主人公としての態度であり、チャーチルもまたお客たる地位に甘んずるかの如く見たと報ぜられてゐる。ルーズヴェルトがカサプランカを會談の場所にしたのは、單にモロッコがニューヨークとモスクワの等距離にあるといふ理由以外に、アメリカの勢威がすでに北阿にも伸び、佛領植民地はアメリカに脅伏したといふ印象を。千九十億弗の豫算の重荷にあへぐ自國民と第三國へ印象せしめんとしたものである事は明確だ。

英國の民心はおだやかでない。ルーズヴェルトの藥が世界に利く丈、英國民の不滿は募る。チャーチルも老獪外交陣を掲げて、北阿軍司令官アイゼンハウアーを後退せしめ、英將アレキサンダーを後釜に据え、ペイルトンのアルゼリヤ總督を撤回さし、英國の御用政治家カトール將軍を任命せんと策動したが、つひにカサプランカでは物にならなかつた。米英は同じ穴の貉ではあるが、最後の一线では斷じて解け合へる仲でないのだ。

カサプランカ會議に對する米英國民の期待が大きかつた丈に、幻滅も深刻なものがあつた。デ



ーリー。ヘラルド紙を、『戦後計畫の割振り、四ヶ國最高軍事會議等、期待された收穫は一つも得られなかつた』と不満を浴びせてゐる。ルーズヴェルトと、チャーチルがいかに智囊を絞つても、戦後計畫の構想が生れる譯はない。今次大戦の終了後、新しき世界秩序を樹てるものは東亞に於ける日本、歐阿に於ては獨伊である。假りに反樞軸陣營が最後の勝利の夢を見てゐるとしても、ルーズヴェルトはチャーチルに相談する程謙讓ではない。米國民は今「米國の世紀」の到來に備へてゐる、經濟調査團、大統領特使等の名目で、アメリカの監察隊が今世界各國にばら撒かれてゐるのは、世界制覇の準備が、ルーズヴェルトを傀儡とするアメリカ、ユダヤ人によつて、如何に周到に進めつつあるかを示すものである。デーリー・メールをはじめ、米英兩國には戦後計畫の夢譚として、歐羅巴に於ける中小國家の整理論が相當巾を利かし、『國家主權は經濟上、軍事上否定され、バルト三國、波蘭をはじめ、小國が蘇聯に編入さるべきだ』と述べてゐるが、それはソ聯の御機嫌取りで、ルーズヴェルトにその意向のない事は彼の遺り口を見れば判る。

アメリカは戦前ソ聯を毛嫌ひした。英國また然り。しかし今日のアングロサクソンも樞軸を憎悪すると違つた意味で、ソ聯に油斷してゐない。獨逸の精強三軍の前に歐羅巴の樞軸國は悉く揉み潰されたではないか。ダンケルクの慘劇で英陸軍は木つ葉微塵に粉碎されたではないか。大空軍の殺到で英本國の大都市、軍事施設、重要工業地區は灰燼一步前まで追ひ込まれたではないか。英帝國が曲りなりにも今日存在するのは、ソ聯が樞軸の軍事勢力を東方へ牽制してゐるからで、お祭氣分で囁し立つた北阿侵入軍が、米軍の精銳をすぐるものであるにもかかはらず、東方埃及よりする英第八軍と挾撃に出でながら、僅少な獨伊軍を制してチュニジア侵攻まで六ヶ月間を要した事實を観る時、ソ聯の抗戦力こそは米英にとつて救ひの神であると共に恐怖の的でもある。そのソ聯に更に北歐を與へ、中歐にまで勢力を伸ばさず危険を百も承知してゐるのがアングロサクソンである。

アメリカは世界制覇を策し、英國は戦後も大海洋帝國の繼續を企ててゐる。ソ聯にもまたソ聯の方略ありと観ねばならまい。戦争目的は始めから喰違つてゐるのだ。ただ慘酷なるアングロサクソンは如何なる卑劣な手を打つてもソ聯を利用し盡す粘りだけは失はぬ國民である點を警戒せねばなるまい



## 一、舊ポーランド國域問題の紛糾

悲劇『ポーランド』がシコルスキーを主役として演ぜられ世界の目をひいてゐる。しかしこの劇には肝心の舞臺がなく、一種の茶番劇と化さうとしてゐる、しかも世界がこの茶番的喜劇に關心を持つ理由はどこにあるか、即ちこの劇を通じて樂屋裏に演ぜられつつある、米英ソ三國の微妙な對立を推測する事ができるからである。

主役シコルスキーが、ポーランド亡命政府の名で呼ぶ科白はかうである、『今次大戰が反樞軸軍の勝利に終つた時、ポーランドは一九三九年九月、即ち獨逸開戦當時の國域を以て復活しなければならぬ』之に對して相手役たるソ聯政府は『そんな要求は原則上絶対に認められぬ』と軽く一蹴した。するとチャーチル、ルーズヴェルト、イーデン、ハル等の協役が現はれて、あるひはソ聯の御機嫌をとり、ポーランド亡命政府を壓迫し、シコルスキーを抑へつけやうと各様の所作をはじめたのである。しかし問題の舊ポーランド領土は米英ソ波いづれも所有せず、その一部は獨逸本土に組込まれ、殘部は獨逸國總督管區として獨逸の手中にある。この劇に舞臺がないとい

ふ理由はそこにある。

更に究明すればする程、この劇ほど多様な國際政治の機微を露呈してゐるものはあるまい。英國の對獨逸宣戦の理由が吹飛んだ事がその一つ、米國の理想主義が馬脚を現はしはじめた事がその二つ、米英の戦後處理方策と、ソ聯の意欲の喰違ひが表面にはじめて現れた事がその三つであらう。そして米英兩國が、必要の前に盟邦の滅亡もいとはず、利用する丈利用したら簡単に突放す。國際的冷酷漢である事をはつきりみせたのもこの『ポーランド劇』である。更に歐羅巴問題に關する限り、米英は完全にソ聯に屈せざるを得ざる程、精神的負債を持つと同時に、無力化して來た事をみせつけた所にも、深々たる興味が横たはつてゐる。

ポーランドが貧弱な武備を以て獨逸に挑戦したのは英佛の援助に期待した結果であつた。戦前獨逸開折衝の中心問題となつたポーランド廻廊は、居住する獨逸民族の數、歴史的背景、政治的操作、そのいづれより觀ても獨逸に返還すべき性質のものである。しかし英佛は獨逸交渉が順調に進まんとすれば直ちに妨害行動に移りポーランドを使囈して挑戰的態度に出でしめた。事實一九三九年八月二十五日、ダンチツヒ、廻廊問題は急轉解決の曙光を認めたのであるが、英國は同



日ロンドンに於て調印された英波相互援助條約でポーランドを索制、歐羅巴戰を發火に至らしめた。しかも九月一日ポーランドの軍事行動に對應して、やむなく獨逸が動員をした日、英佛兩國は獨逸に覺書を手交し、獨逸軍にして行動を停止せざればポーランド援助の義務を遂行すると脅迫し、翌々三日對獨宣戰を布告してゐる。即ち英佛はダンチツヒと廻廊をあくまでポーランドの領土として置くために、今次歐洲大戰をひき起したといふ事になる。

シコルスキー聲明に對して英國は全面的に支持すべき義務を持つてゐる。舊ポーランド國域を守るため英國が獨逸に宣戰した以上、英國側が勝利を得た暁、ポーランドを戦前の領土の上に復活させるのは當然であり、シコルスキーはその意味で當然の要求を行つたといふ事ができる。しかし英國は極めて冷淡な態度をとり、『遺憾なでき事』として、ポーランド亡命政權に對し、ソ聯に讓步せよと勸告してゐる。そして英紙ニュース・クロニクルはカミングスノ一文をのせ『シコルスキー一派もよい加減に國粹主義的、帝國主義的宣傳を止めて、ソ聯を刺戟せぬようにしろ』と警告してゐる、ここに於て英國はポーランドの領土を保全させるために開戰したものでなく、獨逸包圍のためにポーランドを利用したのであり、今ソ聯を最後の血の一滴まで獨逸と戦はすために、

ポーランドの崩壊をも默過しやうとしてゐる。そこに英國假面外交の狡智を覗くことができやう。

ポーランドの對獨挑戰には米國も責任がある、獨逸と戦つて勝利の公算なしと觀た舊ポーランド政府は、英佛の後盾があればあるひは最後の勝利を得るかも知れぬと推測した。しかしそののみで自國の燒土化は避け難く最後まで抗戰は覺束なしと觀た。獨波交渉が開戰五日前まで、逆轉また逆轉した事實こそ、ポーランド政府がいかに迷ひ抜いたかを物語るものであらう。しからは、ポーランドをしてつひに軍事的行動を起させたものは何か、それは米國駐歐外交機關をあげて、一、米國は樞軸打倒を目標とす二、英佛にして獨逸と戦へば米國は英佛を徹底的に援助す、といふ宣傳を歐羅巴にばら撒いたからである。和戰の岐路に立つたポーランドも、米國まで尻押しすればまさか敗るる事もあるまいと無謀な戰爭に突入した、觀方によれば米國こそ最大のポーランド使喚者だつたといふ事ができる。

しかしシコルスキーが聲明を發し、ソ聯との間に紛争を起しかけた時、米國は極力回避的態度をとり、問題が愈々紛糾するや、ソ聯側の肩を持つて、シコルスキー聲明に對するモスクワの攻



撃的言辭を取上げた。更に著名な歴史家ローランド・グリーン・アンチャーにラジオ放送させ「一九三九年九月のポーランド東部國境を回復するといふポーランドの要求は非デモラチックであり、非現實的であるから米國は支持できた」と、見殺しの態度を表明、更に「千八百万人のポーランド人を満足さすために、二億のロシア人を怒らす事はできぬ」と放言さしてゐる。

しからば米英は果して舊ポーランドをソ聯に賣り渡す肚を定めてゐるであらうか、否、米英はポーランドこそソ聯勢力南下の防壁として將來再び利用の機會があれば利用しやうとしてゐるのだ。たゞ現在ポーランド亡命政府権を支持すれば、米英とソ聯の間にもすれば擴がらんとする溝が一層深くなるをおそれてゐる。と言つてソ聯の言ひ分を全面的に支持すれば、歐洲戰をひき起した反樞軸の面目が潰れ、國際信義を疑はれて假面を脱がなければならぬ。デーリー・テレグラフ紙はこの間の微妙な米英の駆け引きを捉へて、「ソ波國境紛議を検討するのはまだ早過ぎる」と論じてゐる。問題を後日に殘して置けば自ら解決するであらうといふのが米英の肚である、龍虎相喰むで、獨ソ共に傷けば思ふ壺であり、ソ聯が獨逸を壓して舊ポーランド領を武力で抑へれば、既成事實としてシコルスを泣寝入りさす事もできる。老獪アングロサクソンの肚の

底は見えずいてゐるのだ。

だが米英の延引政策は同時に英閣僚モリソンや、米外務次官ウエルズ從來の演説と相反する。モリソン、ウエルズ等はすでに數次此問題を論じて勝手な熱をあげ、「戰爭が終つて討議したのでは種々困難な問題が起るから、今のうちに會議を開いて定めて置かうではないか」と主張してゐるのだ。英週間誌スーフイアは、「ソ聯にして勝てば米英の歐羅巴大陸に對する一切の意圖は抹殺されてしまふ、アングロサクソン兩國がいかに力んでもその時ソ聯は一大強國となつてゐるからだ」と論じてゐる。ウエルズやモリソンはかかる線に沿ふてソ聯が米英の物資援助に頼り、獨逸と苦戦してゐる今、戦後計畫を定めて置かうといふのである。一方都合の悪いポーランド問題の如きは戦後に伸ばさうといふ蟲のよい意圖も現はれるのだ。

しかし戦後の國境を決定するものは力である。第一次ソ芬戰和平條項は、戰略上の安全保障に基く最小限度の要求として、レニングラードを脅やかすフィンランド領土の一部割讓を規定してゐる點より觀て、ソ聯が勝利を得るとすれば、一九一四年八月當時に於ける、帝制ロシア時代の西部國境回復を要求するのは明確である。問題は勝てるか否かにあり、幽靈の如きポーランド亡



命政權の如きは、スターリン首相にとつて問題ではないのである。

瑞典紙スヴェンスカ、モルゲンブラデットは、『ソ波紛争こそ反樞軸陣營の明確な最初の龜裂である』と述べストツクホルムス・チドニンゲン紙も『何か重大紛争の起る前兆』と論じてゐる。スミス紙、トルコ紙等、歐羅巴の中立諸國有力新聞は、悉くその影響の大なる事を認めてゐる。しかして結論として、ソ聯に對して米英は膝を屈する余儀なき立場にあり、随つて反樞軸陣營の勝利によつて、今次大戦が結末を見る場合には、ソ聯の意圖のみが歐羅巴に行はれるであらうといふに一致してゐる。

事實英米の輿論はすでにソ聯の中歐に對する支配權を認むるが如き態度をとつてゐる。デーリメール前モスクワ特派員の如きは、戦後ソ聯が何を望むかについて詳細な解説記事を紙上にのせてゐるが、『控へ目に觀ても、スカンヂナビヤ方面ではハンゲ半島、フィンランド灣内の諸島、ベツアモは戦後ソ聯が必ず要求すべく、米英もそれを認めねばならぬであらうし、ルーマニアの一部も割讓の運命にある。バルカン諸國に對する發言權もそうであるが、トルコは一層讓歩を余儀なくされ、黒海と地中海の無制限な通路の自由をソ聯から要求されるであらう』としてゐる、

一方アメリカに於てはニューヨーク、ステーツマン誌が『力の及ばぬ地方の問題に干渉するが如きは愚の骨頂である』と、歐羅巴大陸に於ける紛争に捲込まれて、ソ聯の御氣嫌を損するなど警告を發してゐる、

ダーダネルス海峡はトルコの生命であつた、同時に米英にとつて自由にならぬものである。この一點でソ聯黒海艦隊は地中海への出動を阻まれ、随つてソ聯勢力は地中海へ伸びる事ができなかった。その海峡さえソ聯艦船の自由な通路となる事を承認しやうといふ空氣が英國の一部に存在してゐるのだ。しかも現にダーダネルス海峡はトルコによつて護られ、トルコはなほ中立を維持してゐる。之に反してポーランド政權は名のみの亡命幽霊政權であり、かつての國土に一指も觸れる事のできぬ立場にある。シコルスキーがいかに叫んだところで、現在の英國がそれを支持する力はなく、ソ聯の言ひ分を認める外はないのである。米英は今やソ聯に對して完全に膝を屈したと觀る外はあまい。

蘭波紛糾は、ソ聯に隣接する全部の國家に深憂をあたへた。トルコ紙は、アシムス氏の論説を載せて『ポーランド國境問題が根本的に解決されねば、他のソ聯隣接國に波及し、單に國境問題



に止らずして、あらゆる點に疑惑と誤解を生ずるであらう」と同じくソ聯に境を接する國の持つ不安を露はにしてゐる。一方ロンドンにある亡命諸政權も、今次大戦が反樞軸の勝利となつても、歸るべき國土がなくなるのではないかといふ不安に襲はれてゐる。前例はエチオピア國王と、ドゴールにある。エチオピア國王を利用しつくした英國が、今武力でエチオピアを制した時、あれ程もてはやした國王には印度の土侯程の權利もあたへてはゐない。ドゴールを利用してフランス植民地の攪亂を企てた英國は、佛領アフリカにジロー政權が基礎を固めはじめると漸く袖にしはじめた。今またシコルスキー聲明を支持せず、逆に對ソ假面外交の一手段として、ポーランド亡命政權の主張に壓迫を加へんとするが如き英國の態度は、全亡命政權を戦慄さすに充分である。

スターリン首相は米英に續々起る戦後案に沈黙を守り続け、大西洋憲章もまた彈力的に解釋せんとしてゐる。カサブランカ會談の決定に接觸する事を避けたのも、戦争の責任者ルーズヴェルトの舌の先や、老獺チャーチルに言質をとられる事を拒む一策であると觀るべきである。戦ひは進行中であつて、今日百萬遍の聲明も、あすはどうなるか判つたものではない、勝利のみが一切の問題を解決する。勝殘る者は榮え、敗れたる國は亡滅する。かくしてソ聯はシコルスキーの如き亡者の相手役たる事を拒み、たゞ獨逸との血戦にのみ全力を傾倒してゐる。

### 三、夢の戦後案で英國の媚態

大西洋憲章送葬曲が奏でられんとしてゐる。勿論大西洋憲章は葬らるべき運命を持つてゐる。戦後の世界秩序を決定するものは日獨伊三國であり、三國同盟に参加した樞軸諸國である。ルーズヴェルトの戦勝の夢が生み出したこの憲章の如きは、反樞軸の敗退と共に泡沫の如く消え去る運命を持つてゐるのだ。しかし、戦ひ半ばにして大西洋憲章が、起草者の一人たるチャーチルによつて葬送曲を編曲され、その一黨イデーデンによつてタクトを振られやうとは思ひも寄らぬ所である。

大西洋憲章が前大戦に於ける米大統領ウィルソンの十四ヶ條の熾き直しである事は列國専門家の指摘してゐる通りである。その原則は戦後各國間の自由と平等を認め、民族の自決を規定してゐる。英國は之によつて中立國を反樞軸陣營に誘ひこみ、米國は自國民に鳴物入りで高遠なる、憲章の理想を説き、中南米工作にも利用した。喰ふか喰はれるか、切實な民族興亡を暗す樞軸諸



國とは違つて、切端詰つた何等の理由もなく、ルーズヴェルトの世界制覇の野望と、アメリカ、ユダヤの世界支配の慾望に驅られて参戦した米國は國民の戦意を湧き立たせるために、殊更に大西洋憲章をはやし立て、樞軸の新秩序工作を惡とし、各國の平等と、民族の自決こそ、人類の最高の善であり、従つてこの戦ひに勝たねばならぬと、國民の犠牲を強要したのである。

しかし突如として、大西洋憲章は英國によつて放棄された。勿論英國が眞に各國の平等と民族の自決を望んでゐない事は何人も知つてゐる。英國人こそは神の選民たる夢想を抱き、自國のみ一等高い地位に据つて世界を搾取し、三億三千万の印度人や、教養において秩序に於て、近代文明國に必ずしもおとらぬポーア人の、切實なる民族自決の叫びを武力に於て抑へつけてきた國であるからである。しかし大西洋憲章のお題目は、基督教的假面外交を實行する英國にとつて、最もふさはしいものであり、實質的にはあくまで、欺瞞外交はとつても、表面上は大西洋憲章の理論に沿ふが如く装ふであらうと觀られてゐたにもか、はらず、英國は突如として捨て去つてしまつた。即ちその一はロンドン・タイムスの社説、その一はイーデンの渡米、その三はチャーチルの演説で、悉く英國大西洋憲章脱落を證明してゐる。

しからは英國は何故に突如として假面を脱いでしまつたか。チャーチルやイーデンもできる事なら平等と自由と民族自決を叫び續けたかつたに違ひない。假面外交こそは英國の傳統であり、中小國家の一群がとに角英國に引ずられて行つたのも。もつともらしい假面があつたためだからだ。しかし戦争の途上に於て大西洋憲章の原則を快しとしないソ聯が大きく國際政治の舞臺に立上つた。

その第一の動きは舊ユーゴスラヴィア國內のゲリラ戦を中心とする、ユーゴー亡命政権とコミンテルンとの紛争に始まり、シコルスキー聲明を發端とする舊ポーランド亡命政権と、ソ聯の微妙な對立で漸く表面化して來た。亡命政権の肩を持つばソ聯の御機嫌を損ずる、ソ聯に味方すれば大西洋憲章を放棄しなければならぬ。前者は英帝國崩壞の危機をもたらし、後者は英帝國の體面を泥土に委するものである。チャーチルとその一黨は苦吟の果てつひに大西洋憲章を捨て、もソ聯に忠實たらんとする決意を固めた。

ソ聯なくして今日の英帝國は存在しない、老大な資源、一億八千二百萬の人口、獨得の粘り、スターリン政府の強權によつて、生み出す赤軍の戦團があるが故に、樞軸の精強な鐵軍は二ヶ年



近く東方に牽制されてゐる。獨ソ戦ひを開かず、赤軍にして頑張り続けなかつたならば、英國本土はとつくの昔に樞軸の鐵靴の下に懼伏してゐたはずである。佛國降伏の直後、獨逸軍の渡洋作戦に脅え續けたのは、傲岸不遜のチャーチルとその一黨であり、一九四一年六月、東部戦線が火を噴くまで相つぐ爆撃に重要都市と工場とを殆んどやつつけられたのは英國だつたのである。英帝國が解體の運命にある事に變りはないとしても、今日まで兎に角命脈を續け得たのはソ聯のお蔭である。

「英國外交に永遠の敵なく、永遠の味方もない、あるものは英國自身の利益のみ」といふ言葉が、今日程びつたりとはまつた事はない。今次歐洲戦の發端はポーランドの救援にはじまつてゐる。戦前ポーランドを支持する事は英國外交の必要によるものであつた。伸びんとする獨逸を叩き、歐羅巴を搾取し續けるためには、ポーランドを獨逸と戦はす必要があつた。救援しやうにもその實力なく、それがためにポーランドが潰滅し、國民が塗炭の苦しみを味はうと問題ではなかつたのである。そこに自國の永遠の利益のみある英國外交の姿を見る。

しかし現實の情勢はすでに完全に變つてゐる。英國の永遠の利益に、舊ポーランドや、亡命政権は何等の寄與もしない。ソ聯こそは最大の利用價值を持つ國である。ソ聯が求むるものは何でもあたへ、ソ聯の拒否するものは英國も拒否せねばならぬ、シコルスキー聲明をソ聯が拒否した以上、チャーチルもシコルスキーの要求を彈壓する必要がある。ソ聯が安全保障を要求し、領土の擴大を望めば御無理でも御もつともいふ必要がある。かくしてロンドン・タイムスは「戦後の歐羅巴を戦前と同じに引戻すことは出来ない」と斷じ、イーデンは米國に渡つてルーズヴェルトとハルに、歐羅巴の對ソ引渡しを相談した。そしてチャーチルは「戦後の諸問題に對する政治的意見の相違は漸次單純化し緩和しなければならぬ」と亡命政権の妄動に針を刺した。英國は自國の永遠の利益のために今や亡命政権と共に大西洋憲章を放棄し、ソ聯に乗り替へはじめたのである。

英國が大西洋憲章を放棄するには二つの難關がある。一つは亡命政権の蠢動、今一つはアメリカの態度である。チャーチル演説と、タイムスの社説は、果然亡命政権を戦慄せしめた。チャーチルの口車に乗り、國土と良民を捨て、英國に落ち延びた當時は、英國は朝野をあげて彼等を歓迎した。シコルスキー、ベネツシュ、ハーコン七世等、舊チエツコ、舊ポーランド、ノルウエー



等に殘る民衆の間には名を知られてゐる人間だからである。彼等は英國の糸に操られ、その名を利用して、かつての國土にある民衆を煽動、民心を攪亂し、獨逸の戦力増強を阻まうとした。そこに英國の現實外交があり、利用價值があつた。

しかし獨軍を中心とする新秩序建設工作は、快調を以て進む。全歐羅巴の運命共同體は、逞しき樞軸の理想に引ずられて急速に成り、亡命政權は、舊國土に一指も觸れる事ができなくなつた、かくして英國の態度日に冷淡な中で亡命政權の希望はたゞ、米英が勝利を得て故國に歸れる日であつたが、アメリカの參戰も反樞軸の趨勢を挽回するによしなく、あるひは獨逸と共倒れまでは戰ふかと期待したソ聯も、國土と住民と資源を漸次樞軸に奪はれて頼み難くなつた、英本國の危急は日とともに深化して、前途は愈々暗慘たるものがある。その時突如として亡命政權の守り本尊たる大西洋憲章まで、英國によつて放棄されるといふ事を知らされたのである。

亡命和蘭政權のクレツフェンが先づ鬱積した不満を表明して英米に抗議した。ワシントン滯在中の亡命ポーランド政權の閣僚ボエンスキーは、一米國紙上に反對を唱へ「一九三八年九月英國がポーランドに與へた保障の變更は、ソ聯の武力、英國の壓迫あるとも同意し得ず」と政治的取

引によつて、犠牲となる事を拒否してゐる。事實一九三七年九月英國がポーランドの現状維持を保障したればこそ、ポーランドは獨逸と戦つたのである。英國は歐羅巴に於ける聯合與國なる一群を、亡命政權を踏み臺として作り。共同聲明には、それら幽靈政權の首班に署名させてゐる。しかし幽靈政權が歐大陸に何等の影響力を持たず、ソ聯の血と資源の犠牲のみが歐羅巴を攪亂し得ると知つた時、英國は弊履の如くシコルスキー、ベネツエ等を捨て去らんとしてゐる。亡命政權が騒ぎはじめるのは當然だと言へるのだ。

しかし英國の現實外交は一切を默殺するのみか、逆に亡命政權に鋭い批判を加へ出した。ロンドン・タイムスの如きは「假政府と認め難い、戦争によつて偶然雇はれたもので、眞に國民を代表するものに非ず、むしろ歐羅巴の安全を妨げる傾向さへある、」と痛撃してゐる。上院議員ウエツチウッドは「輝きを失へる王冠のみ」と之はまた露骨に幽靈の正體まであばいた。ロンドンにある亡命政權が國民の代表でない事は、世界の常識であり、英國自身も知つてゐる、戦争による偶然の産出どころか、手先として利用するために英國自身が作つたものである。幽靈政權今日の悲境は國民と共に敗戦の苦悶を味はんことを拒み、英國の袖にすがつて榮華の夢を見やうとい



ふ彼等に降つた當然の天譴といふべきである。

問題はむしろ米國にある。戦争の責任者ルーズヴェルトとその一黨は、大西洋憲章を餘りに國民の頭に叩き込んだ。今更變更する等とは、さしも厚顔無恥なアメリカ・ユダヤの一群も言へたものではない。そこでイーデンは英外務省切つてのソ聯通、次官ウィリヤム・ストラングを帯同して米政府を訪ふたのである。英國がいかなる術策を用ひ、大西洋憲章を作りかへるかは今後の問題に屬する。と同時に米英の戦後案が、形勢不利なる今次世界戦の全貌を世界の目から蔽ふために、極彩色とした空想をばらまかんとする神経戦の一環である事も、見逃してはなるまい。

#### 四、ソ聯の意圖を英國はかく測定す

米英に於ける活潑なる戦後問題の論議は、戦後の新しき秩序を今より、論議しやうとしてゐるのではない。目標は之によつて最後の勝利が米英にあるかの如く印象せしめ、中立國を米英側に誘引すると同時に、歐大陸各國政府の對獨伊積極協力政策を索制し、樞軸の内懷ろを攪亂せんとする神経戦術の一つであることはもとよりであるが、今一つ萬一反樞軸側が勝利をおさめた場

合、ソ聯の必然的勢力圏の擴大に備へて、今からソ聯に釘を刺し、同時に回復困難とみられた歐大陸に於ける勢力圏を、あはよくば一部なりとも手に收めようといふ英國の貪慾な目的のある事も記憶しなければならぬ。

米英側の相つぐ放送にもかゝらず、ソ聯側が鳴りを鎮めて戦後問題を取り扱はないのは、米英にとつてこの上なき無氣味さである。しかしソ聯にとつて戦後問題の如きは末の末の問題に屬し、現實に樞軸の大軍を引受け、死ぬか生るかの死闘の眞最中である。昨夏獨逸軍に資源食糧地區と交通動脈に斬り込まれ、之を防ぐために死力を盡した。續く冬季反撃戦で老大な損耗を受けてゐる。しかも一九四三年の決戦の幕はアゾフ海よりバルト海にまたがる二千キロの戦線に展開されてゐる。北阿に遠吠え、獨逸非武装地區の盲爆で第二次戦線のお茶を濁してゐる米英なら神經戦の一環として戦後案を論ずる余裕もあるか知れぬが。白刃鏖戦り合ふ血闘の中にあるソ聯は、いかにして樞軸の利益を外すかといふ事だけで精一杯の力が要るのだ。

しかしソ聯に戦後に對する要求がない譯ではない。ソ芬戦休戦條項に現はれた赤色政權の意志、ポーランド東半、ベッサラビヤ進入當時のソ聯の行動を觀ればそれが判る。即ちソ聯は芬蘭



に對する休戦條項としてカレリヤ地峽の割譲を求め、その理由を國土の安全保障とした、ベツサラビヤ進出は前大戰後のルーマニアの不當なる膨張より、ベツサラビヤを解放するといふ理由であつたが、その目標もまた、ウクライナの重工業地帯に對する西歐の脅威といふ、安全保障政策の一つの現れである。かくしてソ聯が萬一勝利を得た場合、歐羅巴に對して國土の安全を期すために必要な隣接諸國の領土を併合する意志のある事は明瞭である。そして次に來るべき要求は汎スラブ國家聯合の結成であり、第三は國際交通路の要衝確保にある事も間違ひない。

注目すべきはソ聯外務委員次長となつた、コルネチューク氏の動きでなければならぬ。ポーランド幽霊政權の亡者シコルスキーの聲明に對し、『レンベルグや西ウクライナ人が文化の程度低く、失業者多く、残忍なポーランド人に併合される事を欲してゐるとでも思つてゐるとしたら、シコルスキーは大馬鹿者だ』とブラウダ紙上に論じ、放送局から世界に放送して、罵倒したのはコルネチューク氏であつた。ソ聯はその直後コルネチューク氏を外務省の樞位に据え、ポーランド國域問題に對する確固不動の態度を中外に明らかにした。が同時に見逃し得ないのは、コルネチューク新次長こそ、汎スラブ的領土擴大要求の急矢鋒であり、その代表者と見られる著名な人

物である事だ。汎スラブ運動こそは今大戰勃發以來顯著に現はれたソ聯の外交指標であると米英は觀てゐる。

一九四〇年六月末ベツサラビヤと、ブコビナの一部に兵を進めたソ聯は、同時十二月ドナウ河のルーマニア領諸島を占領、ソ聯の安全と、防衛目的を理由としたが、米英はその行動を以てバルカンに對するソ聯の意欲と觀た。舊ユーゴ領内に於ける赤化宣傳が最近亡命ユーゴ政府とソ聯政府間に纏れを起してゐる事も、汎スラブ運動の一つの現はれと米英は觀てゐる。英國はそこにソ聯の戦後の抗戦を煽ると共に、戦後も歐羅巴より足場を失ふまいと、獨特の老獪外交に出たのである。

前駐ソ米國大使ジョセフ・デーヴィスが米國誌ライフに掲載した論文によれば、ソ聯が戦後何を望むかといふ點につき(一)、領土の安全保障するために、根強く大規模な新領土の併合、(二)、自活するための海上通路を獲得するために、大西洋と地中海へ出づべき不凍港とグーダネルス海峽の解放等をあげてゐる。ニュース・テイツマン・エンド。ネーション誌も『東歐にソ聯勢力圏の設定は避け難し』と觀、ワシントン・ホスト紙の如きは『バルカンよりエーゲ海に至る



廣大なソ連の勢力圏が豫定されてゐるのではないかとしてゐる。

ソ連の要求する領土の保障と、海上の安全な航路をあたへるためには、米英の觀る如く廣大なる地域をソ連に割かねばならない。北方より之を見る時、フィンランドの犠牲は避け難い。レニングラートよりソ芬國境まで僅々四十キロ、ソ連第二の重工業都市であり、赤色革命の發祥地たる舊首都が、隣接國重砲の射程内にある事を我慢するソ連でない。クロンスタット軍港がバルチック艦隊の根據地である點から觀ても、フィンランドは當然分割を要求されるであらう。ハンゲ半島、バルト海の諸島嶼は、ソ連艦船が大西洋への安全な航路を得るためには、赤色海軍の根據地と化されねばならぬ。それどころか、全北歐三國をソ連の勢力範圍とする事を認めるといふ空氣が、敗亡關頭に立つ米英の一部に存在してゐる。

バルト三國とポーランド東半のソ連併合は、ソ獨開戦前の状態に返すものとして、また前大戦以前の國境より考慮するも、ソ連が要求するのは必定であり、ルーマニアは寸斷、ブルガリヤ、ユーゴ方面も、汎スラブ運動の目標として、當然赤色軍事網の中へ組み込まれる。萬一ソ連にして東部戦線に勝ち盛る事ができるとしたら、ウクライナの穀倉地帯と、キエフ、オデッサ、ド

ニエブル工業地區等を忽ち獨逸軍に奪はれ、今日の苦闘に喘ぎつつある状態より觀て、ルーマニアを支配下に置かざる危険のいかに大なるかは肝に銘じてゐるはずであり、ユーゴ、ブルガリヤへの勢力伸張にもルーマニアをこの儘にしてをいては政治上の不便がある。そして最後にダネルスに對する艦船の自由航行權を握り、黒海艦隊の籠詰を聞いて、エーゲ海より地中海へ帝制時代よりの數百年の夢を實現さし度いであらうことも、何人もうなづくところである。

英國はそれら一切のソ連の夢を悉くあたへる決心をしたと觀るべき節がある。ソ連にはオーデル河以東をあたへる。その代償としてライン河までの西歐羅巴は英國の勢力範圍とするといふのである。イーデンはこの案を持つて米國に渡り、ルーズヴェルトに大西洋憲章の修正を説き、この程度の對ソ讓歩を行はないならば、ソ連は今後いかに大なる要求を出すかも判らぬ」と説明した。しかし英國の動きの中にこそ、『惡魔外交のあくなき打算がほの見へる。イーデンは親ソ政治家として知られてゐるが、英國外交の本筋はあくまで現實、打算にある。老翁チャーチルこそ、今や米ソを兩天秤にかけて、解體しつつある英植民帝國の存続のための大芝居を打つてゐるのだ。試みに歐羅巴戦後案を見よ、悉く樞軸の勢力範圍を對象としてゐる。米英二國いづれも一指も



觸れ得ない雲上の彼方にあるではないか。之をソ聯にあたへる約束をしたところで、英國は何等の苦痛を感じるものではない。ただ亡命政権の亡者どもが蠢動すばかりである。しかも之によつてソ聯が對獨抗戰意識を昂め、單獨和平せず、最後の血の一滴まで戦つて、東部戦線へ樞軸の精銳を引つけてくれる時間が長ければ長い程、英國もまた植民帝國解體の時を先に伸ばすことができる。そして今一つ、ソ聯にして萬一勝残る時でもあれば、英國はソ聯の袖にすがつて繁榮植民帝國の余喘を保たうといふのである。そこに英國外交の際はどうい離れ業をみることができやう。

英國は今次大戦によつて何ものをも要求する力がない。戦前の世界一海軍は、日本海軍のために王座より蹴落された。一方盟邦アメリカが駈け足で英國を凌ぐ艦隊を建造してゐる。陸軍の貧困は西部戦線、バルカン、北阿戦線でその實體を暴露された。たゞ武器なき印度民衆や、南阿、埃及等に對して威力を示すのみである。永年世界を搾取した黄金も、武器や食糧を購入するために吐き盡して、戦後は米國に老大な債務を負はねばならぬ。しかも萬一米英が勝利を得るとしても、主力は米ソいづれかであつて斷じて英國であり得る譯はないのだ。英國現在の心境は、何とかして樞軸の決定的勝利を排し、あはよければ勝負なしの戦争に終らさうといふ祈である。

萬一反樞軸の勝利となつても、米國の英領蠶食は免れ難い運命にあり、ソ聯の歐羅巴掌握によつて、大陸より完全かつ永遠に追放される。それどころか、英領植民地の國際管理論までが米國方面で論議されるに至つては、英國の前途暗澹之より甚しきはない。かくして英國は全く生死の關頭に立ち、戦後問題をゆるゆる考慮する暇のないソ聯と結んで、せめて海洋帝國の現状だけは維持したいといふ一縷の希望を抱きはじめていたのである。そこに落潮愈々急にして、數百年の積悪清算を強要されつつある、英帝國の悲願を窺ふ事ができやう。

歐羅巴大陸に對する英國の傳統的政策は勢力均衡政策であつた。獨逸が國力膨脹の途を辿れば、フランスを援けて之と對立せしめ、前大戦後はフランスの覇道が全歐を壓せんとするを抑へてゐる。赤色革命以來着々國力を充實して行くソ聯をみて、暗に獨逸をけしかけたのも英國である。しかるに現勢は英國に勢力均衡政策の持續を許さなくなつた。フランスはすでに倒れ、歐羅巴には獨伊對ソ聯のみが實力を持つに至つた。獨伊勝てば英國は壊滅し、ソ聯が残れば全歐は赤色一色に塗り潰される。従つて先づ英國は獨伊の勝利を阻まねばならぬ、その次にはソ聯の強化を最低限度に止めねばならぬ。かくして東はソ聯に委すから、西は英國に委せたらどうだとソ聯



に談じつつあるのだ。

しかし英國の親ソ政策は、あまりに藝が細かく、際どい丈に隙間があり過ぎる。英國の離れ業を果してソ聯が信用するか否かが問題である。獨ソ戦が勃發した時、全ソの有識階級は、獨逸軍の背後に英國ありと考へてゐたとは、元駐ソ大使デーヴィスの語るところである。西より殺到する破竹の獨逸軍に備へると共に、英軍がバルチック海を経て海路ソ聯を攻撃するのではないかといふ英國永年の不信外交から來た疑ひは、チャーチルが對ソ援助をロンドンより放送するまで消えなかつたとデーヴィスは述懐してゐる。戦後の歐羅巴を決定するものは、勝利者の手中にあり、たとへ反樞軸が勝利を掴むとしても。勝敗を決する最終戦局の情勢が、戦後問題處理方策を決定する。夢の如き米の甘口に乗る程ソ聯は米英を信用してゐないのだ。反樞軸の勝利といふ米英の夢譚が實現しても、戦後問題でソ聯が再び米英と戦ふ事もあり得るとは、クレムリン宮に直接ソ聯首脳部と會見折衝して來たデーヴィスの語るところではないか。

國際宣傳戰の宗家英國と、同じアングロサクソンの血を繼ぐ米國は、巧緻極まる宣傳を、虚に虚を積んで次から次へと展開してゐる。そして今や戦後の夢譚に眞實性を鍍金しやうと、企て續銚劍で叩き潰しつつある。

## 第二章 米國の流線型帝國主義

### 一、領土擴大より搾取網の擴張

アメリカより放送される戦後案が悉く傍若無人、ソ聯にこそ多少の遠慮もしてゐるが、英國に對する態度は冷酷を極め、愈よ遺産相續の意圖を露骨にするものとして、第三國方面の注目を集めてゐる。

『アメリカの世記』といふ言葉がアメリカ人を無性に喜ばしてゐる。今次大戰にアメリカが勝てば、世界はアメリカの自由になる。アメリカの案は勿論、アメリカ式理念、アメリカ式手法を以て世界を埋めるといふヤンキー式な思ひ上つた空想である。このお題目は戦勢が不利となり、



政治外交に失敗した時は影を潜めるが、北阿侵攻が曲りなりにも遂行され、ソ聯軍の冬季反撃が多少の成功でもみせるといふような時すぐに沸きあがる。そして勝利の幻想の上に、戦後の世界處理に關して發言をはじめめる。しかも之等の戦後案が、あくまでも慎重、功妙に、世界をわがものにせんとする所に喰へないヤンキーの一面を窺ふ事ができる。

アメリカの目指すところは世界最大の國家、世界秩序の決定者ならんとするにある。世界最大の國家といふのは、人口と領土の大に於て世界一たらうといふのではなく、獨立國の名目はあたへるが、事實上各國を屬領と同一の地位に置かうといふのである。世界秩序の決定者となるために、アメリカは世界中に軍隊を派遣しやうといふのではなく、五大洲の軍事的要據點を抑へて、世界各國を武力で縛らうといふ計畫である。英國式帝國主義を排して、アメリカ式の新しい侵略を行ひ、厄介な問題は各國の負擔とし、自分の都合のよい所だけ取らうといふ、アメリカ人自身之を流線型帝國主義と呼んでゐる。流線型自動車は速力を増した、胴體を流線型とした結果飛行機は速力と共に爆撃力を増加してゐる、アメリカの企圖する流線型帝國主義は、古き帝國主義よりもより凄い搾取と壓迫の手を世界に揮はうといふのである。

アフリカ要圖





南北アメリカ大陸に於けるアメリカの遺り口を見れば、流線型帝國主義とはいかなるものか見當がつくであらう。中米諸國に一國でも完全な獨立國はない。南米では僅かにアルゼンチン一國が米國の壓力を排して樞軸との國交を維持してゐるのみである。輸出入銀行を通して、中南米に放出された弗資金は五億弗に近く通貨の崩落阻止に、土木事業の遂行に、輸送設備改修、工業開發、電信電話線の擴張等、中南米諸國は悉くアメリカ弗を導いてゐる、アメリカの意に反すれば國家財政は破局に頻する、歐羅巴戰勃發以後は東半球との交易も中斷されて、中南米諸國はアメリカとの交易を絶對に必要とする。しかもアメリカは戰時必需物資たる、ゴム、マンガン、錫、石油等の産出國にはその必要とする物資を續々供給し、一方懷柔の必要ある國に對しては、アメリカのみが持つ工業製品、機械や物資で釣つて行く、中南米は嫌でも、アメリカの言ひなりにならねばならなくなるのだ。

ルーズヴェルトは、今や西半球の王者を氣取つてゐる。中南米中小國家の元首や、有力閣僚は相ついで白堊館に參向して、ルーズヴェルトの御氣嫌を取り結んでゐる。アメリカは今更中南米諸國を領土とする必要はなく、思ふが儘に驅使することができろのだ。十九世紀の帝國主義は領

土を續々擴張した、世界はこれを、弱肉強食の止むを得ざるものとしてゐた。しかし各國に、國民的民族的意識が昂つた今日、イギリス手法は世界の輿論が許さない。現にイギリスは屬領の獨立運動に悩み抜いてゐるではないか。流線型アメリカ帝國主義はその點巧妙に中南米を自分のものとした。それと同じ手法で世界に臨み、今次大戰を契機としてアメリカの世紀を打樹てやらうといふ野望に燃えてゐるのだ。

中南米諸國の元首や有力閣僚が白堊館に參向した時、ルーズヴェルトは必ず軍事基地を獲得するか、軍隊の對米協力を誓はせてゐる。中米諸國の軍隊はすでにアメリカ軍の延長とも稱すべき状態で、南米の雄邦ブラジル國さえ、アメリカ參謀本部の支配下に歸せるものの如くである。大西洋岸を北より眺めて、ニューファウンドランド、ペルムード、バハマ、ジャマイカ、トリニダード、ギヤナ、ナタールと、重要軍事據點はすでにアメリカ軍が抑へてゐる。ウルグワイの海水浴場ゼラスコも最近二千萬弗の借款の代りにアメリカの海空軍基地として手渡される事となつた。太平洋岸ではカナダに米國軍用公路があり、パナマを経て、エクワドルのガラバゴス諸島、グツヤキル灣がアメリカに提供されてゐる。中南米で軍事基地提供を拒絶したものは、ラブラタ河の



ウルグワイ對岸を指定されて首を横に振つたアルゼンチンがあるのみだ、虱潰しに金權で縛られ、武力で包圍された中小國家は、嫌でも應でもアメリカの言ふ事を聽かねばならなくなる、アルゼンチンと共にアメリカの壓迫に抗してゐたチリーの對樞軸斷行も、原因はそこにあつた。米國の軍事基地は南米の要所を固め、米國の兵器彈藥は隣接する諸國に行きわたつてゐる。アメリカは兵を派遣することなく、特異の謀略によつてチリーを藥籠中に納めたのだ、そこに流線型帝國主義の薄氣味悪い感觸を知る。

全アメリカ大陸を懼伏せしめたアメリカは、今や西阿に魔の手を伸ばした。ヴァルガス、ブラチル大統領との會見で、ルーズヴェルトは『大西洋の安全のために西阿を握る必要がある』と説いたと傳へられてゐる。ブラチルの要衝ナタールはすでに米海空軍の基地と化した。對岸西阿の要衝ダカールにも米軍が侵駐してゐる。この兩要衝を握らなければアメリカ大陸は安全でないといふ暴論である。東亞が東亞の安全のためにアラスカ、ハワイ、濠洲をくれと戰前アメリカに要求したら何と答へたであらうか。歐羅巴が自己保衛上、ニューファウンドランドと、ナタールを寄越せと言つた事もないのである。しかもアメリカが西阿侵攻をブラチル軍隊によつて行はんと

してゐる事は、十一萬五千のブラチル兵中、アフリカ派遣のため乗船の途中、叛亂を起した事があるといふ報道からも推測し得る。

ノックス海軍長官とヴィンソン海軍委員長は、大太平洋に數個のアメリカ空軍基地を要求した。すでにサンフラシスコより濠洲に至る太平洋水域米海空軍基地が設けられんとしてゐるが、それから舊英領土中の要衝もほしいといふのである。カサブランカ、アルジェー等佛領北阿の要衝、パーレン島等ペルシヤ灣の重要地點にもアメリカはすでに大空軍基地建設の途上にある。勿論これらの諸地點は戰略的に必要であらうが、施設は恆久的に堅固なもので、戦後も引續いて占據する意圖が明確なのだ。アメリカは先づ軍事基地から、英帝國の遺産を相續しはじめた、國務次官補パールは『武器貸與法が軍事基地問題擴充の鍵だ』と米國政府を代表して堂々と述べてゐる。ただ戦時中表面化しては反樞軸の足並を紊すおそれがあるので、しばらく問題をぼかして置かうといふのが、マツク・ケラーやペーパーの自重派である。しかし英國の朝野は早くもその野望を見抜きソ聯も警戒の目を放さない、タス通信の如きは『アメリカは明らかに帝國主義の線に沿ふて英國の例に倣ひ、第二のジブラルタル、第二のアデン、第二のシンガポールを全世界に確保せ



んとしてゐる』と報道してゐる。流線型は水と空氣の抵抗をすくなくするが、世界を我ものにせんとするアメリカの巨大なる野望は、いかに流線型的に展開せんとしても摩擦なくして行はれ得べくもないことを證明するものといへやう。

英本土は食糧の七割五分を海外に仰いでゐる。工業資材も屬領から移入しなければならぬが、アメリカは、それ自身巨大な資源と巨大な食糧を生産してゐる。英本土の繁榮は屬領を得ずしてはもたらされないが、アメリカは一國のみで悠に繁榮を約束されてゐる國である。ルーズヴェルトにして戦争の責任者たる事なく、アメリカユダヤにして世界支配の野望を起さぬとしたら、アメリカの將來は洋々たるものがあつたのだ、英國が土着民を壓迫し、植民史を血で彩つてまで帝國主義的極悪非道な侵略を行つたのは、貧困な本土の生産力の上に、贅澤な國民の生活を維持せんとする限り、絶対に必要だつたのである。

しかしアメリカにはその必要がない。住民の怨恨を買ひ、世界の輿論に抗して、領土を擴張したところで、財政上の負擔が大變だ。現にポルト・リコ島の住民の飢餓困窮解決さえもできず、世界の攻撃を受けてゐるではないか。アメリカは投資によつて利潤を稼ぎ、重要地點に軍事基地

を設定しさえすれば、搾取は自らできるといふ事を、中南米に於ける實驗によつて覺つたのである。ヒリッピン獨立宣言も同一の手法であつた、アメリカの巨大な資本に縛られたヒリッピンは永遠にアメリカの搾取より脱け切れるはずがない。屬領なくして繁榮のないイギリスが、ヒリッピン獨立宣言に不満を抱き、アメリカを極度に怨んだといふ事實こそ、英國式帝國主義と、アメリカ式流線型侵略主義の相違を示すものではあるまいか。

戦略的必要を理由に、大戦中獲得した要衝へ、アメリカは戦後も陸軍を常駐せしめ、大空軍を配さうとしてゐる、汎米航空路はすでにアフリカに勢力を擴げ、尖端を西亜へ伸ばさんとしてゐる。印度獨立運動の禍中に介入の隙を窺ひ、遠征米軍はすでに基地建設の最中である。北大西洋のアイスランド、グリーンランドもアメリカ空軍の飛石となつた。樞軸の軍事的實力の及ばぬ所はソ聯邦を除いて悉くアメリカ空軍の支配下に歸さんとするかに見える。英國もすでに疑心を日に濃くして、一アメリカは戦後の世界航空網を獨占し世界貿易の壟斷と、軍事的布石を完全にすべく、獨特の飛行機を製作してゐるのではないか』と暗鬼を描いてゐる。そして第三國方面は米國の基地政策を以て、世界を米ソに二分し、『反樞軸が戦争に勝てばソ聯も米國に倣つて歐羅巴



各地、即ちバルト三國、ハンゲ半島、ブルガリヤ等すでにソ聯が希望してゐると觀られてゐる所以外に、多數の軍事的基地を設定するであらう」と觀てゐる。

アメリカの戦後案の一つ、ガルバードソン案は、ポーランドを首班に、リスアニア、チエツコ、ルーマニア、ハンガリー、ギリシヤを以て中歐國家聯合を結成し、ソ聯はフィンランド、ルーマニアに喰ひ込んだのみで我慢して貰ふといふ蟲のよい註文を出してゐる。中歐國家聯合を以て對ソ防壁とし、爾後の世界の全部をアングロサクソンによつて支配せんとするものである。アメリカが西南歐大陸にも空軍基地を獲得せんとしてゐる事は、副大統領ウォーレスが「戦後樞軸諸國を監視し、攻撃者を制裁するためには、空軍基地が絶對に必要である」と述べた丈でも判明しやう、しかし樞軸が敗れば歐羅巴は赤化する。アメリカの流線型帝國主義も、歐羅巴に關する限り、今一度ソ聯と雌雄を決せざる限り望みはないと第三國は觀てゐるのだ。

英帝國の暴虐は世界一海軍の實力のみで遂行されたが、アメリカの流線型帝國主義は、英海軍の崩落の後、世界一海軍を建設すると同時に、世界中に基地を設けて世界一空軍の偉力を加へ、更にあり餘る黄金を武器とし、ユダヤの惡辣な智能を傾けて遂行すべく意圖されてゐる、その害

毒は英國式侵略の比に非ず、世界の不幸之より大なるはない。アメリカの前に英國はすでに無力と化し、流線型帝國主義を破砕するものはたゞ樞軸のみである。

## 二、かくして世界戦を誘發す

戦争の責任者として、世界の定論となつてゐるルーズヴェルトが、一月三日米國國務省をして全文六萬語の白書を發表せしめ、今次大戦の責任があたかも樞軸側にあるかの如き宣傳を行つたしかもその列記する所が却つて戦争の責任が米國にある事を印象せしめる逆な効果を現はしてゐる事は、世界制覇の野望に驅られるルーズヴェルトの宿命的悲劇であらう。

全白書に於てルーズヴェルトは、日本に對米攻撃の意圖があり、ナチス政策が成功すれば、歐羅巴に大規模な戦争が起り、伊太利に對する參戰阻止工作が伊太利の意志によつて失敗に歸したことを縷々と述べてゐるが、事實は逆に英ソの抗戰繼續、ポーランドの反獨抗爭、バルカン諸國の參戰等悉く米國によつて行はれたもので、支那及び歐羅巴の一角のみに止つた戦ひを、つひに全世界に擴大したものが、アメリカを牛耳るルーズヴェルトの野望であつた事は、今やかくれも



ない。その端的な例として、元駐米ポーツランド大使ポトキーの、本國外務省に宛てた報告書がある。即ち一九三八年十一月、すでにルーズヴェルトは今次世界大戦の展開を企圖しつつあつたといふ事ができるのである。

ポトキー報告とは、ポトキーが、戦債問題で駐佛米國大使ブリットと會見協議した時、駐佛米大使館に到着したルーズヴェルトの訓令を、ブリットから聞いたといふ興味ある實録文書である。訓令の要旨とは獨逸に對する誹謗外交の強化と、獨逸兩國に對して英佛兩國が妥協政策に出る事を阻止する事、米國が英佛側に立つて、最後には参戦の決意を持つ事、それがためにすでに十二億五千萬弗を投じて、米國は海陸空三軍の大擴張を實施し始めた事等を明らかにしてある。そしてポトキーはブリットが、獨逸國及びヒトラー總統を、極めて憎悪に満ちた口吻で非難したと附記してゐる。

ポトキー報告を今日より觀た時、ブリットの漏らしたルーズヴェルト訓令がほんものであつた事を明確に觀る事が出来る。全體主義國家獨逸及び日本を誹謗せよといふ外交政策は實に功妙、執拗に續けられて來た。米國人自身でさえ、ルーズヴェルトは病的に日獨伊三國を憎悪してゐる

と語つてゐる程である。三國同盟は西半球の侵略を指すものであると、ルーズヴェルトは機會ある毎に演説してゐるが、之によつて先づ中南米諸國と樞軸の離間を策動した。三國同盟の目標とする所が、米國の参戦を阻止し、今次戦争の禍ひを最少限に止めんとする理想に出發してゐる事は、公平なる列國の識者が等しく認めてゐる所であるにもかかはらず、ルーズヴェルトは、日獨伊三國が大海洋を隔てた南北米大陸に進攻の意圖を持つものであるかの如き印象をあたへんとした。まして亞、歐、阿三大陸諸國及び諸民族に對して、いかに樞軸三國を誹謗したか、想像を絶するものがある。

英佛兩國が獨逸と妥協する事に反對であるといふルーズヴェルト訓令もまた、事實となつて現はれてゐる。ミュンヘン會議は、チエツコ問題を解決すると共に、歐羅巴の緊迫せる外交關係を一時緩和する事ができた。英佛兩國は勿論ミュンヘン協定を以て一應獨逸を抑へ、やがて軍備の完成をまつて樞軸撃滅の軍を起さうとしたのであるが、ルーズヴェルトは英佛のその一時的妥協さへも許さうとはしなかつたのである。そして英國にして對獨妥協政策を續ければ、アメリカは政治的支持を放棄すると脅迫して英國を對獨硬外交へ轉針せしめた。アメリカは明らかに歐羅巴



の平和を希望せず、戦争勃發を期待し、戦ひの火蓋が切られるや、その世界的擴大を工作した。それ以外に世界制覇の野望を遂行するきつかけは、自分の存命中ないと、ルーズヴェルトが信じたからである。

ポーランドが何故に獨逸の正當なる要求を拒絶し、公式外交文書に對して返事もしなかつたか。理由は極めて明白である。二百萬陸軍ありと豪語し、ベルリン進攻を揚言したと言へ、ポーランドに自力を以て獨逸と戦ふ自信のなかつた事はいふまでもない。勿論あのやうな惨敗は豫期しなかつたとはいへ、獨逸國內へ一步でも進出できるとは信じてゐなかつた。抗戦を繼續してゐる間に英佛が西部より獨逸を衝いてくれるであらう、そして戦ひを長期戦に引ずり込み、そのうちアメリカが軍備を擴張して參戰して來るといふ豫想の下に、大國獨逸へ挑戦した。ポーランドはアメリカの樞軸に對する憎惡に期待し、ルーズヴェルトの戦争挑發政策に乗つて起つたのである。ルーズヴェルト訓令は、ブリット大使によつてポーランドの對獨抵抗を決意せしめると共に、フランスに對しても成功してゐる。獨逸國外相が獨逸國境問題を平和裡に解決するため、一九三九年一月廿九日、わざわざワルソーまで出かけて、ポーランド外相ベツクと折衝してゐる時、フ

ランス大使ボネーは突如として、一九三八年十二月六日の獨逸協定に反對を表明した。ルーズヴェルトはフランスをけしかけ、獨逸との妥協政策を放棄せしめ、歐羅巴大陸に於ける戦争挑發の機會としやうとしたのである。ポーランド外相ベツクは必ずしも獨逸との徹底的抗争をその時までに決意してゐたものではない。開戦が祖國を危ふくするといふ憂ひは彼にも充分にあつたと観るべき節があるのだ。しかしフランスがルーズヴェルトの意志に沿ふて對獨決戦を覺悟するかの如き態度を執りはじめた以上、ベツクの態度も自ら決定したと観るべきであらう。

一九四〇年、西部戦線に惨敗を喫して全土に雪崩れを打つが如く殺到する獨逸軍を迎へ、將に降伏の土壇場に立つた時、アメリカは必死の抗戦繼續工作をフランスに對して行つた。ルーズヴェルトの熾烈な樞軸に對する憎惡は、その機會に參戰を希望してゐたかも知れぬが、無謀なるルーズヴェルトの意を知らず、國論未だ整はざるのみか、軍備擴張も着手したばかりのアメリカは、やがてフランスを援助するであらうといふ掛け聲によつて、すでに決定的敗北を喫してゐるフランスの血の犠牲を求めたのである。中立國にして他國の戦争に介入し、その抗戦繼續を慫慂してなほ、戦争の責任が日獨伊にありといふルーズヴェルトに、腦髓の龜裂がないとすれば、世界最



大の虚偽漢である。

フランスが崩壊した後、ルーズヴェルトが努力したのは英國の抗戦繼續工作である。當時獨逸大空軍の徹底的爆撃戦が全英本土に展開されつつあり、樞軸の精強大軍は、何時如何なる地點より英本土へ上陸するかも知れぬといふ時であつた。英國完全敗北の機は刻々と迫り、首都をカナダに移すといふやうな意見が、白晝公然と述べられ、金持ち連の家族と、兒童の大量が續々とカナダに落ち延びてゐたのである。しかしアメリカは斷じて英國の抗戦放棄を阻止し續けた。英國にして戦意を喪失すれば、ルーズヴェルトの野望は完全に覆へり、樞軸は歐羅巴に不動の地歩を占めて、米國金權勢力の觸手を許さなくなるからである。アメリカは必死で英國に精神的聲援を送ると共に、軍需物資を供給して最後の一线で踏み止らす事に成功した。

中立法案の改訂、現金自國船主義等、ルーズヴェルトが打つた一連の石は、米國が事實上參戦した事を意味する。前大戰當時のポロ兵器しか持たず、士氣に缺け、數に於て問題にならぬ當時の米國陸軍を以て歐羅巴に作戰する事はできないので、アメリカは自己の工業力と、物資とを以て參戦したといふ事ができる。領事館閉鎖の要求、重要物資の輸出禁止、資産凍結等、アメリカ

が行つた樞軸に對する壓迫もまた、アメリカが戦争の挑發者であると共に、すでにその當時より參戦してゐる事を立證するものではあるまいか。

英國の抗戦繼續に死力を盡しつゝあつたアメリカは、一方に於て戦争の擴大をソ聯、バルカン方面に企ててゐた。ドノーヴァン大佐がバルカンにあつて、如何に熾烈な潜行的活動を行つたかは當時から公然と知られてゐた。特にギリシヤとユーゴスラヴィアに對する挑發は猛烈を極め、つひにこの兩國を戦争の渦中に導いてゐる。駐ソ大使サムナー・ウエルズもまた、ルーズヴェルトの意を承けて、ソ聯の對樞軸反感挑發に努めて來た。一九四一年夏、獨逸の忽突たる對蘇進軍はソ聯の背後にあるルーズヴェルトの外交工作を背景とする、複雑微妙な歐羅巴の政情に起因してゐる。バルカン戦、獨ソ戦もまた、共にルーズヴェルトの戦争擴大政策によるものであるといふ事ができるのだ。

ポトキー報告は一九四〇年獨逸外務省の獨逸白書に再録されてゐるが、ルーズヴェルト訓令の二項目樞軸誹謗外交と、樞軸と他國の妥協阻止工作が着々と執拗に行はれた事は以上で明白である。しかして残る二項目アメリカの軍備擴大と、それに續く參戦もみごとに實現してゐるではな



いか。獨逸外務省が白書に、記録した事が、三年後に至り、悉く的中してゐるといふ所にこそ、アメリカが今次大戦の挑發者で、ルーズヴェルトが戦争の責任者であるといふ根據があり、アメリカ、ユダヤに操られる米國政府首脳部が、いかに深謀を以て、世界戦の構成を計畫的に遂行したかが判明するのである。そしてアメリカの参戦を期待し、それがために樞軸に抗した諸國が今日いかなる状態にあるかを觀る時、世界制覇の野望を遂行するために、ルーズヴェルトが如何に冷酷な男であるか判明しやう。

ポーランドはとつくに亡びた、フランスは單に敗戦の憂き目を見たのみに非ずして、その植民地まで寸斷されんとしてゐる。ソ聯は資源と人口の大半を喪失し、赤色政權樹立以來、國民の生活を犠牲として血のじむやうな苦闘の下に建設した産業施設と重要都市は荒廢に歸してゐる、ユーゴ・スラヴィヤはすでに過去の國家となり、希臘は苦悶のどん底に落ちてゐる。世界一大帝國大洋帝國を誇つたイギリスは、今次大戦で勝つても敗けても、三四流國家への轉落を決定づけられ、僅か四千七百萬の人口から、日に日に血の犠牲者を出してゐる。蔣介石一黨は餘喘も細い、そして樞軸に抗する一切の國が瀕死の重傷に喘いでゐる時、アメリカは豫定の如く、傷か

ざる新手として樞軸の矢面に立ち、日獨伊三國に最後の挑戦者として現はれんとしてゐる。樞軸と戦つた諸國は悉くルーズヴェルトの毒氣にやられ、アメリカの堡壘として利用されてゐた事が、今にしてはつきり判るではないか。

しからば明々白々たる戦争の責任者ルーズヴェルトが、何故に白書を以て日獨伊を誣いんとしたのであらうか、理由は列國を口車に乗せたばかりで慥らず米國民をも欺さんとしてゐるのだ。九十日間で叩き潰すと稱した日本に比律賓を奪はれ、東南亞の錫とゴムを斷たれ、三週間で樞軸軍を地中海へ追ひ落す計畫だつた北阿戦線では、増強した獨伊の精兵にまる六ヶ月間手古摺つた。大軍需生産力の急速な確立を目指す産業機構の改變と、社會生活水準の切り下げは、米國民の不滿を煽る結果となつて來さうなのだ、更に大統領選舉戦のお題目たる『米國領土以外に米國青年を戦はしめず』といふ約束は疾づくに反古となつて、すでに百五十萬の壯丁が海外に派遣され、日日戦死し、不具者となつてゐる。更に日本との海戦に利非ざる事が、漸次米國民間に知れわたつて、それらの一切がルーズヴェルトの人氣を日に日に落してゐる。その不滿の鎮靜劑として、日獨伊を戦争の責任者であり、アメリカは挑戦に應じてやむなく起つたと辯解しやうといふ



のが、アメリカ白書のほんとうの目的である。

しかし樞軸の戦力は日に共に増強されてゐる、ポーランド、フランス、ソ聯、重慶、ユーゴ、ギリシヤの犠牲によつても、樞軸の軍事的實力は微動もせず、今や最後の敵アメリカ撃砕の機を掴んだのだ。七百萬徴兵、五萬六千の軍用車輛、二萬の對戰車砲、百二億發の銃彈等、ルーズヴェルトの豪語するアメリカの生産力を恐がる樞軸ではない。世界制覇といふ野望こそ、天人とも紛らすべき、人類最大の悪逆だからである。

### 三、戦争の責任樞軸に轉嫁を試む

戦争の責任者ルーズヴェルトが、米國國務省をして白書を公表せしめ、日獨伊三國に戦争の責任があるかの如く印象せしめんとしたのは、第三國方面に對する宣傳よりも、むしろ國民への言ひ譯であると言はれてゐる。米國上院議員マラヴィーリアの如きは、トリブーナ紙上で白書が如何に偽瞞に満ちてゐるかを指摘し『ここ數年來の米國の外交政策は、歐羅巴の平和を妨害し、戦争への展開に努めて來た。ルーズヴェルトは明らかに今次大戦を契機に、合衆國大帝國を實現し

て國民に自慢する日の來る事を確信してゐる。その時が來るまで國民の慧智に煙幕を張るため、戦争の責任を樞軸へ背負はさうとしてゐるのだ』と論じてゐる。

ルーズヴェルトの世界侵攻計畫は、必ずしも順調に進んでゐるとは言へない。第一早くも英國が、その野望に警戒をはじめた。お膝元の中南米諸國にも反米思潮は潜流してゐる。英國週刊雜誌スペクターの如きも、英米ソ三國間に相互の理解乏しく、之がため對樞軸戰遂行に重大な支障を起してゐると、英國政府の善處を要望する反面、米國の横暴に一矢を酬るてゐる状態である。軍事的成果に至つてはアメリカ海軍に一つとして樹立されてゐない。そして國民各層のルーズヴェルト支持熱は、必ずしも參戰以前程のものなく、中間選挙の結果は、米國の民心がすでに大統領を離れつつある事を證明した。しかも今次議會には、ルーズヴェルト侵略主義を嚴正に批判せんとする多數の反對黨議員が選出されてゐるのである。老獪ルーズヴェルトは戦争の責任を糾弾される前に、戦争を挑發された事にして置く必要があつたのである。

ルーズヴェルトが民心の離反をおそれねばならぬ米國現實の暗雲とは何であるか、第一は米國社會生活の混亂、第二は亞歐における軍事的失敗である、アメリカが資源國と稱された理由は、



單に軍物必需物資を豊富に持つてゐたが故ではない。給養資源に於ても、列強中アメリカ程恵まれた國家はない、玉蜀黍は世界生産額の六割、燕麥は三割、甜菜糖、小麥一割五分乃至二割、大麥は一割三分、大豆、稷麥、馬鈴薯、甘蔗糖等、いづれも本國を養つて餘りある程の收穫がある。アメリカが給養資源に於て不足してゐるものと言へば、コーヒー、茶、カカオ、茶花生等限られた飲料に屬してゐるが、それもお隣りの中南米にあり餘る物資である。アメリカに食糧難があらう等とは何人も豫想する事はできなかつたのだ。

しかし參戰以來一ケ年半、アメリカには脂肪と肉不足時代が早くも訪れてゐる。日本の移民によつて農業勞働力の根底としてゐたロスアンゼルス一帯は特に甚だしく、九百軒のレストラント、百軒の肉屋が休業した。牛乳は五割減り、バターの入手は困難となり、病院も食糧の入手に手古摺つてゐる。ポストンは牛肉の不足から、馬肉に需要が殺到、一ポンド廿五弗から五十弗で取引され、世界一の屠殺場を誇り、コーンビーフで名高い、シカゴで屠殺すべき獸類不足の嘆きが生れるといふ皮肉な現象が現はれた。軍港サンディゴの住民は國境を越えてメキシコまで食糧を買ひ漁り、ニューヨークの肉類貯藏量は平時の三割五分に激減し、牛乳やバターは小兒や病人へ、なほ戰時中相當高度の消費規正は免れぬ、それらに較べてアメリカの食糧不足は、參戰日なほ浅い丈に必ずしも決定的なものではない。しかしアメリカ國民は食糧で困る事があらう等と豫想した事もなかつた丈に、精神的打撃は遙かに甚大である、その國民の不満を抑へるためにも、ルーズヴェルトは、世界制覇のための戰爭挑發者である事を秘して、樞軸に挑戦され、やむなく參戰したと強辯する必要があるのだ。

アメリカの食糧難は勞働力の不足と、輸送機關の不備から生れて來る、南米には獸肉の捌け口に困る諸國が連なり、船さへあれば米國民が肉飢饉に見舞はれる様なことは絶對にないのだ、廣大な國土は飼料生産の餘地を多分に持つて、人さへあれば之も問題ではない。しかし反樞軸諸國に軍需物資を送り、英ソ兩國には食糧まで供給せねばならぬとあつては、中南米産物の輸入は思

にのみ配給されるといふ有様である。鳥肉、大豆、罐詰、スープの不足で、一九四二年のアメリカのクリスマスは慘憺たるものがあつた。

英國は食糧危機の關頭に立ち、ソ聯の小麥、茶不足も、樞軸のウクライナ占領によつて深刻なものがある。東部占領地域の復興開發によつて、獨伊の食糧問題も根本的に解決されたとは言へ、なほ戰時中相當高度の消費規正は免れぬ、それらに較べてアメリカの食糧不足は、參戰日なほ浅い丈に必ずしも決定的なものではない。しかしアメリカ國民は食糧で困る事があらう等と豫想した事もなかつた丈に、精神的打撃は遙かに甚大である、その國民の不満を抑へるためにも、ルーズヴェルトは、世界制覇のための戰爭挑發者である事を秘して、樞軸に挑戦され、やむなく參戰したと強辯する必要があるのだ。

アメリカの食糧難は勞働力の不足と、輸送機關の不備から生れて來る、南米には獸肉の捌け口に困る諸國が連なり、船さへあれば米國民が肉飢饉に見舞はれる様なことは絶對にないのだ、廣大な國土は飼料生産の餘地を多分に持つて、人さへあれば之も問題ではない。しかし反樞軸諸國に軍需物資を送り、英ソ兩國には食糧まで供給せねばならぬとあつては、中南米産物の輸入は思



ふに任せず、農業労働力は軍需工業と兵營に吸収されてしまふ。

働く人間の不足は漸くアメリカ朝野を面喰してゐる、倫敦のイブニング・スタンダード紙ニューヨーク特派員の報ずるところによれば、アメリカは今七萬五千人の教員不足に悩み、約二千餘の學校が閉鎖を餘儀なくされてゐる。續々召集されたのと軍需工業へ引抜かれた結果である。一國文化の基底を成す教育界の現状にして然りとすれば、他の凡ゆる分野に於ける人的資源の枯喝が如何なる段階にあるか想像に難くあるまい。コックス大將は之が解決策として半日兵制案を提唱してゐる。新兵の教育を職場の近くで行ひ、半日は従来の職業に従事し、半日を軍事教練に割いて、産業機構より軍隊への急激な労働力の奪取を避け、生産力の削減を防ぐのを目標とするものである。東西に二大洋を控へ、軍事的脅威を一つも持たなかつたアメリカは、青少年の軍事的訓練を怠つた結果、今産業界の中樞を成す労働力旺盛な壯丁に、半日の訓練を行はねばならぬ破目に立至つた。樞軸の青年が悉く完全な軍事的基本訓練を経て、武器さへあたへればその日からでも立派な軍人となるに比し、アメリカの苦悶はそこにもあるといへる。

農務長官ウイカードは、食糧問題の重大化に備へて、配給部面擔當官としてヘンダーソン、生

産部面擔當者としてハリシウスを任命し、之を左右兩翼の智囊として難局の打開に努めてゐるが、アメリカの社會的混亂はただに食糧問題のみにあるのではなく、一般消費資材の全面的生産減をはじめ、石油消費規正の強化、不急産業従事員の強制労働等にも横はり、婦女子の徵用も相當な内部的苦悶を藏してゐる。米國に參戦すべき正當な理由があり、または眞に樞軸の挑戦によつて起つたものであれば、いかに贅澤な生活に馴れ、個人主義的思想で育つた米人も一致結束して苦痛にたへるであらうが、確たる戦争目的なく、ただルーズヴェルトの世界制覇の野望遂行の道具となつてゐるアメリカ人に、果してどれ丈の滅私的報國の精神的餘裕が残されてゐるであらうか。

アメリカに戦ふ必要はなかつた、生活資材も豊かであつた、戦争の圏外にありさへすれば、世界の富は自ら轉げ込み、贅澤な生活が永遠に保證されたのである。全アジア民族千年の安危をかける日本、永遠に英米の前に跪座するか否かの境ひ目に立つた獨逸、地中海の囚人といふ國家環境にたへ切れなくなつた伊太利、四千七百萬人口を以て、四億五千萬人の住民と、三千八百八十八萬方キロの領土を支へ得るか否かの岐路に立つた英國等、その參戰目標の正邪は別として、いづ



れも各國は切實重大な興亡の關頭に立つて、戦争に飛び込んだのであるが。アメリカの参戦はただルーズヴェルトの度外れた野心と樞軸に對する病的憎惡によつて行はれたのである。ユダヤ式宣傳と、ルーズヴェルト一黨の奸智は今日までよく國民を煽動し、巧みに日獨伊に對する敵愾心を温醸してきたが、何時如何なる時國民の一角から冷靜なる批判が現はれ、ルーズヴェルト侵略主義の實體を衝くかも知れない。現に米國の海外派遣兵は至る所で自棄的暴行を繰り返し、住民の反感を買ふとともに、複雑な兵員の人種的構成も災ひして、軍人同志の衝突も相つぐので、最高當局は休暇に際し双物携帶の禁止まで行つてゐる。米國國務省の白書は國民の冷靜なる判断を阻み、ルーズヴェルト侵略主義の實體をばかすために發せられたのである。

アメリカの軍事的失敗もまた、白書發表の理由をなしてゐる。大東亞戦争勃發の直前、米國の有力者は極度に日本を見縊つた言辭を弄し、九十日間で日本を叩き潰すとまで豪語したものであつた。しかし眞珠灣の敗戦以來、アメリカ太平洋に於て勝利の記録を持つてゐない。比島、グワム、ウエーキを奪はれ、對日空襲線と豫定したアリューシャン列島にも楔を打込まれてゐる。海戦のある毎に損害をひたかくしにかくし、日本の損害を捏造して國民を欺瞞しやうとしてゐるが、化

けの皮は片つ端からはげて、軍の發表に對する不信は昂まるのみである。之が日本に挑戦したための戦勢であるとは、いかにルーズヴェルトの厚顔を以てしてもよくし得るところではない。樞軸に戦争の責任ありと稱する以外に、辯明のしやうもないのだ。

北阿侵攻の失敗は今や米國民間で何人も否定しやうとはしない。米英軍の不意打ちと、佛將星の反逆によつて、リビヤの樞軸軍は昨年十一月すでに全滅の危機に見舞はれ、米英もまた十二杯には攻略完了豫を定したが、獨伊の好防に阻まれて、十倍の勢力を擁しつゝ、甚害また甚害を續け、本年五月、丸六ヶ月目に漸やく目的を達してゐる。之がためソ聯は米英をみくびり、第三國には鼎の輕重を問はれ、歐大陸侵攻作戦も挫折するに至つたが、何よりも米國政府を惱ましたのは、はじめの宣傳が利きすぎただけに、自國民から軍部の實力を疑はれ、一方豫想以上の兵力を輸送し、豫想以上長期間兵站線を維持するため、老大な船舶を釘づけにしたことで、その影響はソ聯、重慶、濠洲、印度への軍需品輸送力を削減し、西半球の交易を阻害し、本國の社會生活にも種々の悪影響をもたらし、國民の不滿を激發したところにある。

樞軸の潜水艦作戦も漸やく急となつた。デーリー・メール紙は今冬季間の米英船舶喪失量が、



前年に較べて激増してゐる點に特別の警告を發し『潜水艦こそはヒトラ總統最大の武器となりつつある、Uボートは今次大戰の當初より、英全艦隊の出動を妨げると共に、海洋作戰を制肘してきたが、一九四二年後半の活躍振りより觀て、一九四三年の戦果は一層揚るであらう』と重大住を高唱してゐる。英國は食糧難のため、百萬エーカーの有閑地を鋤返し、五十萬の新たな勞働力を農園に入れたが、物資不足は船舶減によつて社會生活の破滅へと驀進してゐる。特に北阿佛領は聯合軍が上陸した結果、この方面への軍需物資輸送に釘づけとなつた數百萬噸の船舶と、狙ひ打たれる沈没噸數は、米英海上輸送力の今後に濃厚な暗影を投げてゐる。

ルーズヴェルトが、自ら今次大戰の挑發者である事を認めても、その世界侵略が着々と進み、相當の戦果が樹立されてさへ居れば、アメリカ國民も現實の生活水準低下を肯定、やがての世界一侵略合衆帝國の出現を夢想して、よくルーズヴェルトの後についてゆくかも知れない。しかしルーズヴェルトが奪つたものはアメリカの繁榮と贅澤な生活であつて、アメリカが喪つたものは太平洋の戰略的重要諸島嶼と、多數の青年の血である。しかして得たるものは僅かに侵略主義國といふ烙印のみでないか。チュニジアの戦況報道は最近米國にない。日本海軍に撃破されたアメ

リカ海軍の中樞も之の大部分が秘匿されてゐる、そしてアメリカの久しい世界平和攪亂外交も、白書によつて誤魔化し切らうといふのである。

しがしアングロサクソンの血を引くアメリカの宣傳術は、必ずしも英本國に劣るものではない、ルーズヴェルトの周圍にはアメリカユダヤ人の一味が控へて、全國の有力新聞を資本で縛り、國民に眞實の片鱗をも掴ませないやうに組立ててある。世界の目から觀た時、明確なルーズベエルトの欺瞞宣傳と斷ぜられる白書も、アメリカ人より觀れば樞軸への憎惡を培ふ文書となるのだ。全樞軸はかかる奸智によつて煽動されつつある一億四千萬のアメリカ國民が我等の正面の大敵である事を記憶しなければならぬ。



## 第三章 四面楚歌に埋る老英國

### 一、モリソン米國に泣訴演説

反逆政權を擁立して、北阿佛領の實質的掌握を企てた米國の押しは、ダルランの死によつて一頓坐するかに見えたが、後任ジローが就任した後も野望を捨てぬ事が明らかとなり、之を狙ふ驕慢米國と、戦後も往年の繁榮を持続せんとする英國の對立が漸やく表面に浮び上らうとしてゐる。そして最近行はれた英國内相モリソンの植民地問題に關する演説は、米英間のかかる微妙な對立をめぐるアングロ・サクソン同志の内紛を、巧みに紛裝せしめて表面化したものであると、第三國方面の注目を浴びてゐる。

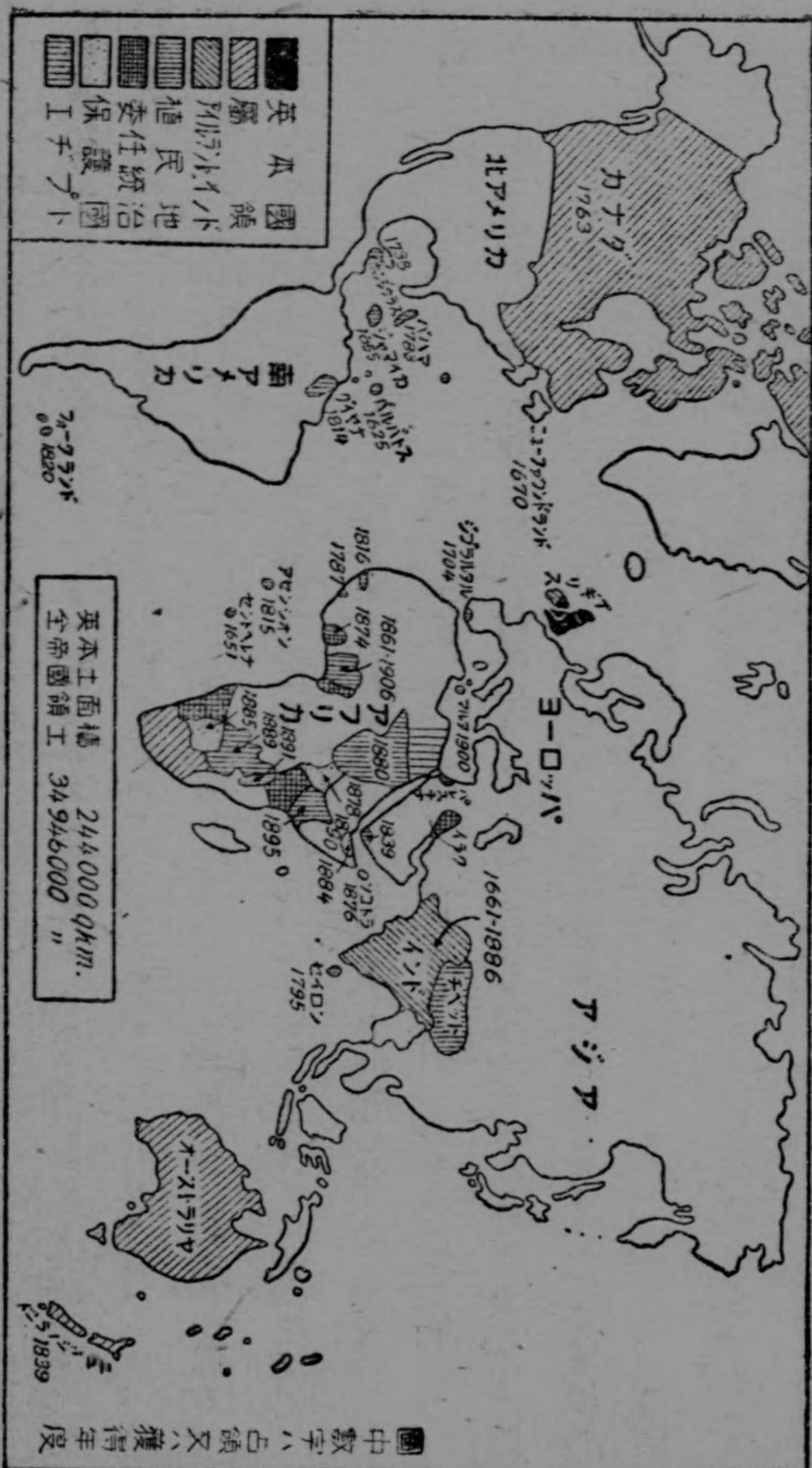
戦争の責任者ルーズヴェルトを中心とする世界制覇の野望遂行は、同一戦線に立つ英國であらうが、獨立戦争で救けてくれた佛國であらうが、米大陸の發見者であり最初の開拓者でもあるラ

テンアメリカ諸國であらうが、相手構はず強行されてゐる。しかも今次大戦で樞軸に對抗するための惡の戦友として、アングロサクソンの同じ血を分け宗家にもあたる英國に對して最も無遠慮に行はれてゐる事は、米國の野望が如何に強烈なものであるかを證明して餘りがある。しかし大英帝國を蠶食せずしてルーズヴェルト侵略主義は行ひ難い、英國こそは戦前世界最大の國家であり、世界最大の植民帝國であり、世界最大の搾取國であつた、ルーズヴェルトが世界に君臨し、世界を搾取し、世界を植民地と化せしめんがためには、英國をその儘にして置く事はできない。米國は心を鬼にしても先づ血に繋がる英國の犠牲に於て、世界進攻の第一歩を踏み出さねばならないのである、かかる酷烈冷酷な野望に何時までも氣がつかぬ程英國人はお人よしでないのだ。

ルーズヴェルトの特使として、北阿、西亞、ソ聯、重慶と遍歴したウイルキ一八九四二年秋の旅は勿論モスクワ政府及び蔣介石に對する煽動を表面上の目的とはしてゐるが、一皮むけば英國の遺産相續下調べであつたとは、當時事情通の指摘するところであつた。果せる哉その後には現はれた米國の軍事的、外交的布石を見れば、明らかに英國を世界制覇の血祭りにしやうとしてゐる事が明確となる。西亞、北西阿に對する遠征軍の派遣は軍事的布石と觀るべく、印度、濠洲、西



英國の世界制覇年代要圖



亞、北阿に對するルーズヴェルト代表の派遣は外交的侵略の前進と解すべきであらう。カナダが全的に米國に依存し、ニューファウンドランドよりトリニダードに至る一連の島嶼が米國によつて九十九年間租借された以上、西半球の英領はすでに悉く米國侵略主義の犠牲となつてしまつたのであるが、大戰の進行につれて、英國の落潮愈よ急となるに従ひ、ルーズヴェルトはつひに東半球の英領及び英國勢力圏に魔手を揮ひはじめたのである。

佛領北阿にある公使マーフィが、傀儡政權を監視して、全佛領アフリカの米國植民地化に如何に辣腕を揮つてゐるかば、周知の通りであるが、西阿にあるワヅウオースの策動もまた目に餘るものがある。チャーチルの胸算用によれば佛領北阿は戰後當然英國の懷ろへ轉げ込む運命にあつたと等しく、西亞もまた英國の傳統的勢力圏であつた、佛領北阿が英國にとつて地中海勢力確立のために絶對必要であると等しく、スエズ地峽の前衛として、印度への陸橋として、更に石油供給地區として、西阿もまた手離す譯に行かぬ所である。しかし米國は、英ソ兩軍が、コーカサスと、リビヤの急に備へて引揚げるや、イラン、イラクに軍を進め、最近ではシリヤ、レバノンにも米國式侵略の歩を踏み出した、そしてルーズヴェルト外交代表ワヅウオースは、アラビヤ人の



獨立國家問題まで論じて英國の氣を悪くさせてゐる。

モリソン演説はかかる米英の微妙なる勢力關係によつて亡國の一線に踏止まり、米國によつて國民生活より、軍事行動の一切を支へられてゐる英國は、堂々と西亞、北阿に米國と對立する事はできぬ。そこで不満をオブラートに包んで刺激をすくなくし、しかも戦後も植民地を維持し、勢力範圍を保たうといふのである、反樞軸陣營の紐のもろさであり、英國が奏する挽歌ともいふべきものであらう。

英國の植民地政策に對する批判が最近にはかに米國內に昂りはじめた、ウイルキーの英國攻撃は餘りに有名であり、米國の一記者クラツパーの、英國植民地機構暴露記もチャーチルとその一黨を相當刺激してゐる、それ所か國務長官の要路に据はり、言動に慎重を要求されるハルまでが、印度に於ける英國政治に不満を漏らすに至つて、米國は何故に英國の植民地にそれ丈關心を持たねばならぬかといふ疑問が湧いて來る。

英國の植民地に對する虐政と搾取は今にはじまつた事ではない、惠まれた氣候によつて、農作物は極めて豊かに、埋藏資源もまた相當ある印度は、數千年の文化と、潤澤な物資によつて、東

洋に於ける一大樂土であつたが、英國東印度會社が一度侵略の歩を踏み出して以來、慘たる飢餓の國と化してゐるではないか。三億五千萬の膏血を絞り、豊穰の平野の稔りを捲上げて、その上に築かれたのが英本國の繁榮であつた。三百年間の交際ある英國人に對して憎惡のみを有し、今次大戰でも協力を斷乎排して、民族の英雄ガンヂー、ネール等の一群が投獄され、住民の暴動が官憲を手古すらしてゐるのは、英國の久しき虐殺と偽瞞と、そして全印度人にあたへた餓死等、惡の累積が原因してゐるのだ。

新嘉坡の餘りに早い陥落は、勿論皇軍の武威によるものではあるが、同時に全マレー住民が英國軍に些の協力もしなかつた事を見逃してはならぬ。ベルマ住民は日本軍の進入に歡喜し、昨日までの統治者たる英國につばも引つかけやうとはしない、策謀と彈壓と、搾取のみあつて、徳望なき英國の植民政策は、廣大な東洋に於て征服してゐた四億の民衆に、一人の精神的知己も持つてはゐなかつたのだ、南阿聯邦のボーア人は、やむなく戦線に狩り出されてはゐるが、反英熱は地下に燻り續けてゐる、英國植民政策の非道は、米國の指摘を待つまでもなく、すでに世界の常識なのである。しかもルーズヴェルトの周邊が、俄かに攻撃をはじめたのは、その必要があつた



からだ、即ち英國の植民地を奪はんがためには、その理由がなければならぬ。英國植民政策の失敗は、その理由の一つとして數へる丈の深さがあるのだ。

英國の植民地程財政的に苦しい所はない、豫算は常に一定せず、本國政府へ補助金の交付を要求してゐる。龐大な富源を擁する植民地が、何故に貧窮を極めてゐるかと言へば、英本國の資本家が、利潤の全部を持ち去つてしまふからである。貿易と資本に對して課せられる植民地の地方税は、倫敦に頭張る本店の反對によつて増額を許されない。マライ半島から米國に輸出されてゐたゴムと錫の代金は、マライに一文も支拂はれず、全額が英本國に送られた。それどころか社會状態の悪い事で定評のあるトリニダード島から、百萬ポンドの大金が無利子で倫敦に送られたといふ報道さへ最近傳へられてゐる。原住民の社會的水準引上げ、衛生状態の改善、學校その他の文化施設等、福祉増進に對する一切の處置は黙殺され、たゞ倫敦シチー筋の資本家が懐ろを肥やすためにのみ、植民地は經營されてゐる。

天人ともに許さぬ惡虐非道なかかる政策が、何時までも續けられる理由はない。それも英國が世界に武力基地を確保し、世界一海軍を保有してゐた間は原住民も泣く泣く地頭の命をきいたか

も知れぬが、今次大戰で武力の根底を叩き潰され、搾取網を片つ端から打破られては、英國植民地帝國の崩壊は必至と觀る外はあるまい。事實モリソン演説もその點に觸れ、自力による植民地の保有はすでに神話であり、歴史的幻想である事を認めてはゐるが、同時に他國の協力によつて、戦前の廣大な屬領を維持しやうといふ蟲のよい考へも露骨に示してゐる、他國の協力とは米國の協力を意味する、その米國大統領が、戦争の責任者として、英國の遺産を狙ふ最大の野心家である事は、モリソン演説の悲劇であらう。

戦争の責任者ルーズヴェルトが、英國の植民地を狙ふ今一つの理由は、英本國に、植民地の物資を完全に消化する力のない點であらう。英國植民地の産物を、英本國が輸入してゐるのは僅か八分に過ぎず、米國の方が遙かに大量を購入してゐる。マライのゴムは戦前半ば以上が米國に送られ、錫もまた米國を最大の顧客としてゐた。英國はたゞ貿易によつて利得し、資本の利子を稼いでゐるに過ぎず、植民地と有機的繋がりを持つてゐない。之に反して米國の植民地は、米國を最大の顧客とし、米國の生産品を最大に消費し、密接な經濟的繋がりを持ち續けて來た、従つて米國は、英國の植民地にとつて、米領となつた方がより開發され、原住民も幸福になるといふの



である。

しかし英國は、現在自國の立場が如何に危険なものであるかをほんとうには知つてゐない。僅かに米國の野望に氣が付きかけた程度で、戦後も戦前の大植民地帝國が維持できるといふ幻想を持つてゐる。たゞ米國の協力なくしては困難な事ではつきり知つてゐるのだ、そしてモリソンは從來の植民地の繁榮と發達を圖ると共に、一層廣大な土地と人間を支配しやうといふのである。それがためには、之までの英國の植民政策が、必ずしも最善でなかつた事を認め『部分的に發達した原住民が、經濟團體のために無視されるやうな事は避け、植民地は原住民の福祉増進を第一の目標として統治され、ある場合には本國の經濟的利益も默殺されねばならぬ』と殊勝な事を言ひはじめた。

苦しい時の神頼みとはモリソン演説の事である。惡業の報りで原住民に離反され、樞軸正義の攻勢で軍事的實力を叩かれた英國は、秋風四周に起り來つてはじめて苦醒心を起し、植民政策の理想を説いて、大植民帝國の維持を企ててゐるのだ。最近英國の植民大臣に保守黨員ダービー卿の息子が就任し、印度事務大臣に頑迷な特權階級の利益擁護者アメリーがなつた事は、米國の攻

勢に對する陣容の整備を意味する。そして自由黨、労働黨出身の閣僚は、植民地關係の椅子から追はれてしまつた。植民次官オリバー、スタンレー、同次官補デヴォンシャイヤ公と並べると、植民地擄取によつて最大の利得を持つ封建的家門の一黨が、完全に植民關係官廳の軸心を握つてゐる事が判明するであらう。この陣容を以てこそ、大英植民帝國の將來は安泰なりと信じてゐるのだ。

だが米國は冷酷なる植民地略奪者の相貌を漸やく露はにしはじめた。英國が軍需物資の代金として、海外投資の清算さえはじめた時、米國は一步も假籍するところなく取立てた。武器貸與法によつて英國は現に大量の軍需物資を購入してゐるが、やがて充分な支拂ひをしなければならぬやうな條件ができてゐる。植民政策の尖兵は往年宣教師で、神の名に於て原住民を手なづけ、徐ろに武力が侵出するといふ順序だつたのである、しかし米國今日の侵略政策は、武器貸與を尖兵として行はれる。之によつて強力な政治的、經濟的支配の地盤を固めやうといふのである。佛領アフリカと、西部亞細亞はその試驗臺となつてゐる。

しかし英帝國が解體した後、その遺産を米國が繼承して、果して天の正義が透つたといふ事が



できるであらうか。英國の植民政策が血で混濁してゐると等しく、同じアングロサクソンの血を引く米國の植民政治もまた暴虐な歴史に満ちてゐる。米國は先住民アメリカ・インディアンを殺戮を前提として生れ、比律賓は叛亂と暴虐に亘られた群島である。現に米國本土には黒人問題が重大な社會上の暗黒面を形成し、世界の識者の眼を蔽はしむる幾多の私刑が行はれて來た。英國の統治を離れても、米國の屬領となつて原住民の幸福はない。解体せる英帝國の各植民地は、悉く日獨伊を中心とする、新らしき共榮圈の中に編み込まれて、はじめて本然の姿に還り、福祉の増進ができる。

## 二、植民地國際管理論に狼狽

樞軸の優勢な武力に壓せられ、ソ聯の一癖ある外交政策に惱む米英にとつて、今日アングロサクソン兩國が争ふべき秋でない事は、ルーズヴェルトも、チャーチルもともに百も承知してゐるのではあるが、アメリカの世紀を築かんとするアメリカ、ユダヤの野望と、戦後も永年の繁榮を持續せんとするイギリスの間には、根本的に相容れぬものがあり、時に應じて表面化せざるをえ

ないのである。特に一九四三年初頭オックスフォードで行はれた、英國植民相スタンレーの植民政策に關する演説は、崩壞途上にある英植民帝國の悲鳴であり、老大國の挽歌として注目さるべきものがあらう。

アメリカは參戰前自由主義國家群の兵器廠を以て任じ、反樞軸諸國に武器を供給して、民主主義の守護神であるかの如き態度をもつて英、ソ、重慶に臨んだ。しかし算盤高いアメリカユダヤが利益のない所に力瘤を入れる氣遣ひがないとすれば、武器貸與法のからくりが、戦後イギリスの遺産を相続し、東亞を搾取し、ソ聯を抑へんとしたものである事は、第三國方面もひとしく認める所であつた。しかしアメリカは其後西半球の壓伏と懷柔を一通り終り、軍需工業の整備擴充を一應完成し、兵を北阿、英本土、西亞、中亞等各地に派遣、アメリカに依存せずして、反樞軸陣營は壊滅を避け難しとみるや、アメリカは戦争の終了を待たずして、傲慢、不遜、成り上り國家の本性を現はし領土慾、基地獲得慾を露骨に示しはじめたのである。

『アメリカは英植民帝國の崩壞を支へるために參戰したものでない』とは今や全米帝國主義團體の標語となつてゐる。米國上院の有力者ミラード、タイザイングは武器を貸與した代りにイギ



リスは西半球の軍事基地を米國に譲渡すべきである。米國議會は六百卅億ドルの武器貸與法による豫算を協賛し、九十億ドルはすでに支出済みとなつてゐる。之がため長期間の重税となつて、後代のアメリカ國民を苦しめるであらう。一戸當り千八百ドルに上る負擔に對して、現在租借してゐるニューファウンドランド、バーミユダ、ジャマイカ、トリニダード、ギヤナ等の英領植民地を譲渡せよと要求しても無理ではあるまい」と、アメリカ帝國主義の心底をあつさりさらけ出してゐる。

中南米諸國に設定した海空軍基地を、アメリカが永遠に手離さないのではあるまいかといふ危惧が生れた時、國務次官ウエルズは「戦後も所有する意圖は全然ない、しかし米洲以外の國家が領有する植民地にある米軍基地は別である」と説明した。即ちブラジル領ナタール、エクワドル領がラベゴス等は戦争が済めばお返しもしやうが、英佛蘭等の植民地には永遠に米國軍隊が頑張りといふのである。中南米の諸要衝を「戦略」を理由に、「暫定的」に奪つたアメリカが、戦後も返還せぬことは、アメリカ侵略政策の足取りより觀て明確であるが、現實の米國はなほ遠慮してお茶を濁してゐるのである、しかしイギリスに對しては遠慮も會釋もなく、返還の義務なしと

キツバリ言つて除ける程、アメリカは英國を見縊つてしまつたのだ。

それどころかマグスマンは、「戦後太平洋を米國の海のたらしめ、英國領土も全部米國の勢力下に纏めやう」とまで論じてゐる。事實太平洋上の英領、濠洲、ニュージールランド等とは個別的に話を進めて軍事的基地を固めずでに遺産の相續を開始してゐる。之を防がため植民相スタンレーが英國は現在も將來も、領有する植民地を、いかなる國家にも分割せず」と、悲痛なる聲明を行はねばならなかつたのだ。

スタンレー英植民相は、イギリスの植民政策が一原住民の生命財産を安全にし、法律的秩序を與へたこと、二清純な行政に終始したこと、三搾取しなかつたことをあげ英國の統治が人類愛の極致をその屬領で發揮したかの如き言辭を弄して、基教的假面を被り、「故に英國植民地を國際管理の下に置くは誤りである」と結んで、動かしつつあるアメリカの食指を封ぜんとしてゐる。嘗ては英國のかかる強辯も世界中に押し通す事ができた時代もあるが、落潮英帝國にはすでに實力と威望がない。世界は冷笑を以てスタンレー聲明を眺める外ないのだ。

英國は植民地原住民の生命財産を守り、秩序をあたへた事はない、英國は武力的に原住民を征



服し、その秩序と社會機構を破壊し、多數の人間を殺して植民地としてゐる、約三百年前英國商館支店が印度に根を下した時ガンヂス河のデルタは穀物、野菜、甘蔗、香料、麻、蓖、魚類、食肉、獸の寶庫であつた。飢餓と動亂なきこの世の樂園に武器を持つものと言へば、狩獵スポーツを事とする貴族ばかりだつたのである。しかしイギリス人がフーグリ河口に要塞を構築し、工場や教會を建てるに至つて印度の平和は忽ち破られ、飢餓と殺戮の土地と變つたではないか。カーゾン卿は英國の印度統治を自畫自讃して、『道も橋もなかつた印度に、網の目の如く交通路を擴げ、一年三億人を輸送する三千哩の鐵道、燈臺、港灣、埠頭を續々作り、都會には上下水道、公共建築物、病院が完備してゐる』と述べたことがある、しかし印度は愈々不幸に、愈々飢餓に追はれて行つた。

カーゾン卿のいふ所の文化的施設は、印度人のために設けたものに非ずして、印度にある英國人のために作られたのである。完備した交通網、堂々たる港灣施設は、印度の富を英本國へ運ぶために必要なのである。例へ英國がお節介をしなくとも、印度が獨立してさへ居たら今日位の交通機關や都市施設は當然完成してゐたはずである。しかも英國のために非ずして、印度自身のた

めに。しかし現實の印度には『生れてから死ぬまで腹一杯の飯の喰へぬ者が四千萬人居り』『印度人の平均収入は一年二ポンドに過ぎず原住民の八割までは貧窮』してゐるのだ。『英國人が支配せぬ前の印度には、村々に學校があり、文盲は例外であつたが、今日の印度人中九割までは文字が讀めない。高度に發達してゐた製造工業や、手工業も、英本國の物を賣り込むために抑壓され』て亡びてしまつた、『彫刻に見る往昔の印度人は肥え太つてゐたが、今日は悉くやせ細り流感でも襲ふと數百萬人が榮養不良で斃れてゆく』

之等一連の事實は英國の植民政策を攻撃せんがための曲筆に非ずして、全部英國人中正義感に燃える人々が、餘りに暴戾なる統治を默視し得ずして書いた報告文書によるものである。英國は原住民の生命財産を保護するどころか、生命を絶ち、富を奪ひ、植民地に秩序を與へる代りに、傳統的平和を破壊して來たのだ。南阿聯邦のボーア人は、模範的社會制度を持つ秩序ある原住民であつた。アメリカの密林地帯に入り込んだ英國人は、自由だつた黒人を鑛山の奴隸とし、原住民の家族生活を破壊してゐる、『ニューファウンドランドは英國最古の植民地であるが、數千の失業漁夫とその家族が飢えに苦しむ、ぼろ着物を纏ひ、北極の寒中を子供は半裸で走つてゐると



モーレー、リチャーズは報告してゐる。全島一つの療養所もなく、結核患者がざつと三萬人、それが英植民地統治三百五十年の成果なのである。

エジプト、パレスチナ、ジャマイカ等、英國が現に統治し、または嘗て統治した所は悉く殺戮の巷であり暴逆非道の世界であつた。そして今侵略の鋒を向けてゐるイラン、イラクにも、食糧危機と暴動と流血の報道が頻々と傳はつてゐる。

英國の植民統治は清純なりとスタンレーは叫んでゐる、しかし印度の高官で歸國の後、問題を起さなかつた者は一人もないと言つてよい。カーゾン卿さえも象牙家具の收賄で議會に問題を起さし、ロード・ウイリングトンも高價な贈物によつて請託を容れた事實がばれてゐる。悪い事をしなかつたといふ丈でローレンス大佐が名聲を博した程、在印英國官吏は腐敗してゐるのである。

クライヴの悪徳は歴史にかくれもない事實である。詐術と謀略と黄金を巧みに練り合はせ、之に武力を織り交せて彼は初代印度總督となつた。之に續く二代總督ヘースチングスも、一七八八年から丸七年間かかつた、公訴事件によつてその悪徳を徹底的に暴かれ、英本國下院から上院に非行を彈劾されつひに八萬ポンドの罰金を支拂つた。しからば印度の高官は何故にかくも相つ

で悪事を働いたか。ヘースチングス事件についてマコーレイはかう述べてゐる『英本國は印度總督へ常に金を送れと催促してゐた、穩やかに統治せよ、しかし金は送れ、正義と寛容を以て統治せよ、そして金を送れ、ヘースチングスは止むなく收賄し、脅迫し、つひには王女まで檻禁して印度の寶物を續々召しあげ本國へ送つた』ヘースチングスやクライヴの清純ならざる政治は、初代及二代印度總督個人の人格的缺陷によるものに非ずして、英國自身の意志といふ事ができやう。

英國は植民地を搾取せずとスタンレーは言ふ、しかし英國は單に屬領のみを搾取するものに非ずして、全世界を搾取してゐた。支那も、バルカシも、イランも、英國の黄金の侵入するところ、英國艦隊の航行する所、常に英國の搾取の魔の手が動いてゐた。『英國大藏省は植民地の税金に潤はず、植民地で得た富は植民地開發のため使つた』とスタンレーは言ふ、事實植民地は直接税金を本國大藏省に納めてはゐないが、植民地にある英國の會社が多額の利益を得てゐる。植民地官廳は會社に普通の税さへもかける事を許されず、植民地で得た多大な利益金はそのまま英本國の本店へ運ばれる、英大藏省は本國へ流れ込んだその金に税をかけ、毎年數十億ポンドを得てゐる。



るのだ。植民地の収益の大部分は英本國を潤ほし、お目こぼしが植民地に残され、それを原住民のために使用して『収益はみんなその土地で使つてゐる』と計算の魔術を使つてゐるのがスタンレー數學である。

デイリーメールも『英國最大の敗北はダンケルク、クレータに非ずして米國との外交戦である』と悲鳴をあげてゐるのだ。

勿論それはありえぬことではあるが萬一今次大戦が反樞軸の勝利に終つたと假定すれば、英國の遺産は悉く戦争の責任者ルーズヴェルトの目論見通り、米國の懷ろへ轉げ込む運命にある。ノックスは全世界を支配すべき大海洋の建設を豪語し、ユナイテッド・ステーツ・ニュースは世界に紛争を起す餘地なき大陸軍を作れとなへてゐる。その壓力に抗し得ざるが如く、デーリー・ヘラルド紙は『スタンレーの植民地確保演説は誤つてゐる、英國は一切の先入觀念を捨てて戦後經營會議に臨まねば、反樞軸國間の協調も圓滿に行かぬ、英國は植民地國際管理案も一應討議すべき覺悟が必要である』と述べてゐる。

### 三、勞働層の赤化對策に焦る

英國は三つの敵を持つ、一は樞軸、二はアメリカ、三はソ聯である。樞軸の新秩序建設は、英帝國の解體を前提としてはじて成る、アメリカの世界制覇完成も英帝國をその儘にして行はれ得べくもない、レーエンの世界赤化基本方策もまた、英帝國潰滅を第一の目標としてゐた。第一の敵樞軸に對して英國は今現實に戦つてゐる。第二の敵アメリカとは北阿に、西亞に、カナダ、オーストラリアに謀略戦の最中である。第三の敵ソ聯とは切實な思想戦を不斷に行つて來た。最近現はれたピヴァリツチ案の如きはその一つの兵器とも稱すべきものであう。

英勞働者の社會機構改革に關する要求は日と共に昂つて來た、戦争遂行は勞働者の支柱なくして遂行されないとはいふ意識は、ソ聯イデオロギーの浸潤と共に愈々高揚されとする形勢にある。勞働黨の政治勢力進出は目覺ましく、單なる閣僚の椅子の獲得に憚らず、全面的政治權力の掌握まで目指してゐると觀らるべき兆が現はれた。駐英ソ聯大使の倫敦政府に對する發言が効いて、共産黨機關紙が復活刊行されるや、忽ち老大な讀者が生れたといふやうな事實こそ、英ソ軍事同



盟によつて英國労働者に對する共產主義思想の浸透が、いかに深まつて行つたかを物語るものにはあるまいか。英國政府も事の重大さを知つて、労働者の歡心を買ふべく、生れたのがビヴァリツチ案である。

ビヴァリツチ案は、その内容を検討するに随つて、何等の新奇さもない事が判る。英國に現はれた社會政策家や、社會科學者が、幾度か發表、計畫したものを再編輯したのみである。ビヴァリツチ自身も一九二四年社會問題専門委員として一書を公刊し『萬人に對する社會的保證』なる意見を述べたが、英國の社會改良は一步も前進しなかつた。一九二〇年から三〇年にかけて、社會問題が喧ましかつた當時、政府は幾度か覺書を提示し、給付の最低限度を保證すると稱したが一向に實現してゐない。チャーチルの誤れる政策によつて、物價が鰻上りに跳ねあがつた結果、傷痍軍人の年金と老後年金を引上げる丈にでも、發案から實現までに二ヶ年を要してゐる。計畫は幾度かあつたが、實行しなかつた丈なのだ。

英國は常に基督教的假面を被る。正義、人道、博愛、平等等のお題目が、英國侵略外交の假面であつたと等しく、内政上の社會問題でも、英國特權階級は基督教的假面を被つて巧みに下層階

級を欺して來た。『列國の社會機構改革は無血と有血とを問はず革命によらねば達する事ができないに反して、神の選民たる英國に於ては、極めて安穩に、紳士的に、基督教的に、社會問題を解決することができる』といふのが英國政治家の常に口にすることであつた。中世の英國貴族は、騙取し、買収し、征服した領地の住民に十字架を以て臨んだが、現在の英國支配階級は基督教的解決といふ言葉で、労働者層の不滿を抑へやうとしてゐる。

前大戰に參戰した兵士は、祖國に歸つた時就職する事ができなかつた、働き場所は全部塞がつてゐたし、戦後の經濟不況で新たな職場の現はれやうはずもない。僅かに僅少な手當を受け、人造バターとお茶を啜つて裏長屋に潜み、危ふくも生存してゐたのである。今次大戰で英國の軍需工場を支へる労働者の鼻息が荒いと等しく、第一線にある者もまた、英帝國を背負ふものが自分等であるといふ自意識を昂めてゐる。戦争が終つた時、前大戰の終熄後と等しく、職なくして危ふくも生存するのではないかといふ危惧は、第一線の兵を弱くする、そこで生れたのがビヴァリツチ案である。英國政府は之によつて労働者の赤化を防ぎ、第一線兵士の不滿を抑へ、とに角戦後まで引ずつて行かうとしてゐる。英國は今第四の敵、内部の病患とも戦はねばならなくなつた



のである。

基督教的假面を被つて、労働者層を戦力増強に狩り立てんとするビヴァリツチ案の中心思想は、獨逸ではすでに六十年前に實行に移されてゐる。一八八〇年獨逸帝國社會政策の目標は『救済を要する者に對して、彼等が要求するよりも大きく支給せよ』といふにあつた。一八八〇年世界ではじめて疾病保險が獨逸に生れた、一八八七年には事故保險法が施行された。ビスマルクは社會保證制度の徹底的擴充を企て、一九一一年、疾病保險、廢疾保險、養老保險の三事業を統合してゐる。一九一三年には一般疾病保險、年金制度が現はれ、その前年には徒弟法が施行された。獨逸に於ける社會保證制度は年と共に擴大されて行つたのである。

ロイド・ジョージはその著『新英國社會政策』の中で獨逸の社會保證制度の功績を讃え、『新しき未知の世界を獨逸は一世代前に開拓した』と述べてゐる。事實今日からみれば、當然の施策としか思へない社會保證制度も、一八八一年頃には驚くべき急進的な施政であつた。それ丈に列國はその成績を注目したのである。フランス、ベルギー、オランダ等、獨逸國周邊の國家は社會保證制度がいかに必要であり、いかに社會を明るくするかを隣國獨逸の實驗によつてさとり、獨逸が着手して卅年後、ビスマルクが愈々その制度擴充に手を着けた一九一一年頃から漸く實施しはじめた。ロイド・ジョージもその必要を感じて獨逸に一ヶ月滯留、保險局で自ら調査にあたり、その成果に感心して著書に讃歌を送つたのだ。

ナチス政府は一九三四年社會保證制度改革法を施行して、完璧を狙つた。現在獨逸八千萬の人口中四分の三の六千萬人はナチス社會保證制度の恩澤に浴してゐる。三千万人は被保險者、千四百萬人は未亡人で職業を持たぬ者、千二百萬人は乳幼児、六百萬人は老後の年金で暮してゐる。その範圍の廣さは全國民層に及び、保證の實質至らざるはない、之に反して英國は之まで實質的に労働層へ惠まなかつた。世界の富を搾取し、屬領を彈壓し、その上に繁榮し、贅澤な生活を營む英國ではあつたが、國內に於ては特權階級のみが大海洋帝國繁榮の御利益に預つてゐるのみである。今日まで歐米の文明國中疾病保險法や事故保險法を實施しない國は、アメリカ及びイギリスのみなのだ。

基督教的假面を被つて英國外交が侵略を續けると等しく、國內労働層の懐柔も基督教的假面で行はれる。英國國教會の首長が、特權階級の利益と、謀略政治の遂行に最も協力する者の中から



選ばれると等しく、英國の牧師は悉く特權階級の利益となるやうなお説教をする者の中から選ばれる。新國教會首長テムブルを決定した者が教會の中樞でなくして、チャーチルであると等しく草深い田園の教會に居居る牧師を選ぶ者は、宗務機關に非ずして地方の地主である。牧師は神の名に於て農民と勞働者の不平を抑へ、特權階級や地主のために獻身的に働く事のみを説かなければ忽ち職を失ふ運命にある。

かくして英國の下層階級の間には不平不満は潜在しつつ堆積して行つた。そして戦争と、ソ聯イデオロギーとの接觸によつて爆發點へ近寄りはじめた。大戦を契機とし日本軍がビルマを占領した時、印度人が英國の人道主義を装ふ搾取統治に猛攻の火蓋を切つたと等しく、その本國にも特權階級の夢魔が現はれやうとはじめたのである。それを防がむがために、基督教的藥を更に多く盛つたビヴァリツチ案が生れた。獨逸の社會保證制度は平和時代に施行されたが、ビヴァリツチ案は英國が大戦の最も深刻化した時發表されたのである、そこに英國內政治の詐術の一面を觀る事ができる。

ビヴァリツチ案はアメリカを刺激した、勞働長官バトキンスは『米國も勞働者のかくの如く放不能、不慮の災害、老衰等の場合何等の保證もされてゐない。慈善團體に救はれるか、飢餓に追はれるか、墜落するか以外にない、ビヴァリツチ案が英國に現はれた時、アメリカ勞働當局が反省するのは、彼等が血の通ふ人間である以上あたり前の事と言へやう。

獨逸は階級闘争を許さぬと同時に、慈善事業も拒否した、特權階級の豪華な食卓から落ちこぼれたパン屑をあたへやうといふのが慈善であるといふ見解をとつた。英國の支配階級は基督教の假面を被つて、それを善としたが、獨逸は慈善こそ國家のために働いた功勞者に對する侮辱であるといふ觀方をしてゐる。そこに制度としての社會保證が生れて來たのである。獨逸の企業家は従業員を保證する義務がある。歡喜力行團は生れ、勞働美化運動は發展した、職場の衛生對策は萬全を期し、工場の採光設備は改善された。勤勞者のための清々しい住宅は續々建築されて行つた。勤勞顯功章の設定、模範工場の表彰等國民に對する社會保護に遺漏はない。之がため能率は増進し、作業成績はあがり、勤勞する者の収入も増加した、

苦しい時の神頼み、英國は戦争の深刻化と共に獨逸の社會保證制度に追従せんと、いかにすれ



ば戦争中労働力を最大に搾取できるかといふ對策の立案をビヴァリツチに命じた。各方面の専門家を委員に數ヶ月を経て成案は提出されたが、アングーソン樞相は全面的賛成を拒み、政府が處理するといふ事になつた。ビヴァリツチ案は數ヶ月後部分的な實行に移されるであらうが、更に數ヶ月後には忘れ去られてしまふであらう。戦争が終ればビヴァリツチ案の如きは問題ではない、第一全工業國が同一の負擔をしなければ英國の産業は窒息する。第二に經濟上、交易上競争能力を獲得し得なくてはそんな負擔は困難であるが、戦後の英國には勝利を得たと假定してもそんな力はないのだ。獨逸の社會保證制度が勤勞者に恵むと同時に、増産の實をあげてゐるに對し、瑞典のガツセル教授は『ビヴァリツチ案は労働意志を弛緩せしめ、閑労働と失業を獎勵する』と英國産業將來の痛となるべき運命を豫言してゐる。

英國の労働層はビヴァリツチ案の實施を待望してゐる。たとへ基督教教的假面を被る懐柔政策であるとしても、ないよりはましだからである。保守黨は、議會に於ける審議を引伸ばして同案を骨抜きにしやうと試み、労働黨出身のアトリー、ベヴィン、モリソンの三閣僚は椅子に對する未練から保守黨の方針に迎合して審議引伸ばしに賛成するが如き態度をみせた、労働黨出身閣僚に

して保守黨と妥協すれば、労働層の支持は薄れ、黨の解體も避け難い、時も時労働黨は共產主義者の入黨案を討議した、勿論否決はされたが、英ソ同盟締結以來英國共產黨は日と共に勢力を擴大した事実は争へぬ事實だ、ビヴァリツチ案に對する労働黨の出方一つでは、有権者の大多數が共產黨へ走る懸念も充分にあるといふ土壇場にあつた。

イギリス第一の敵樞軸諸國は、亞歐に強大な精兵と物的基礎を確立して最後の勝利をめざしてゐる戦争の責任者ルーズヴェルトは第二の敵として、英國最大の搾取對象たる印度へまで手を伸ばしはじめた、第三の敵ソ聯の脅威は着々全英領に伸び、南阿聯邦では共產黨と對ソ斷交論まで議會に現はれてゐる、そしてビヴァリツチ案發表を契機に、今英本國で共產黨は労働層の獲得に一步前進したかに見える。大英國はいかなる觀點に立つとも崩壊する運命にありと斷ずる外はあるまい。



# 獨ソ決戰の背景

● 定價 二圓五十錢

(出版會承認い一〇〇一三六號 發行部數初版五・〇〇〇部)

版權  
所有

編輯者  
印刷所

印刷所

配給元

發行所

東京市麴町區丸ノ内三丁目二番地  
株式會社 歐亞通信社

上田半治郎

東京市王子區神谷町一丁目四八二番地  
東京證券印刷株式會社

(東京四四三八)

日本出版配給株式會社

東京市麴町區丸ノ内三ノ二 三菱二十一號館  
歐亞通信社

電話丸ノ内 二七九二・四六四四・四六四五  
振替東京 四三〇一 一五番

日本出版會會員番號一〇五五二五番

昭和十八年六月三十日印刷  
昭和十八年七月四日發行